

報 特 攻
 平成19年2月



今年も、初詣では先ず靖國神社の年越し参りと心に決めていた。靖國神社の年越し参りには、他社では決して味わうことのできない感動的情景に出会うことができるからである。

九段下で地下鉄を降り、九段坂を登る。ライトアップされた靖國神社正門の大鳥居は、巨人の如く漆黒の空に聳え立ち、参道中央の大村益次郎像は、遙か東北の空を睨んで立つ。

大鳥居から第二鳥居までの参道両側には、沢山の屋台が並び、食べ物の臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、い

第70号

〒105-0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090
 F A X 03(3432)5567

編集人 田 中 賢 一
 発行人 栗 原 宏

三夜の月は朧々と冴え、ライトアップされた拝殿の金色の御紋章と見事なコントラストをなしている。

正零時、暗夜のしじまを破って大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとうございませう」と互いに挨拶を交わして肅々と拝殿に進み、拍手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達を中心としながらも、真摯な参詣人の姿がそこにある。

毎年のことながら、靖國の社頭には伊勢絵馬協賛会の安田織人氏から献上された大絵馬が掲げられている。今年

ずこの有名社寺でも見受けられる年越し参りの景観である。だが、第二鳥居から神門前に至れば様相は一変する。手水舎の冷水で身を清めて開門を待つ。既に数百人の参詣人が静かに門前に詰め掛けている。圧倒的に若者が多い。外国人の姿も散見される。やがて、零時30分前、一斉に開扉されて拝殿前まで進む。この日、大晦日の夜は風も凜いで絶好の晴夜、中天に掛かる十



元旦零時の拝殿前



ボーイスカウトの庭燎奉仕

に遺品や遺書など展示の品々に、見入っており、戦争を中心とする我が国の近・現代史の真実が徐々に浸透している証しとも見えていささか安堵と希望を覚えた次第。今年も清々しい気持ちで社頭を拝辞した。(飯田正能記)

は丁亥年、干支の亥に因んで猪の雄姿が描かれている。また、その横には、全国約三百社から奉納された絵馬が美しく飾られている。その中に郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。遊就館内の全国護国神社特別展と相俟って、靖國神社に寄せる善良な国民の崇敬心の篤さを思わせる。更に、境内各所での、ボーイスカウト東京連盟の大勢の少年達による庭燎(かがり火)奉仕の健気な姿に感動。神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館で、元旦特別上映の映画「天皇・

皇后と日清戦争」の初回を観賞し、祖国の危機に身を擲って敢闘した祖父らの姿を偲び、大御心の忝さに改めて感動。深夜の館内は若者達に溢れ、熱心に遺品や遺書など展示の品々に、見入っており、戦争を中心とする我が国の近・現代史の真実が徐々に浸透している証しとも見えていささか安堵と希望を覚えた次第。今年も清々しい気持ちで社頭を拝辞した。(飯田正能記)

目次

靖國神社初詣で……………1
 元旦や糧なき春の勝戦……………2
 平成十九年 年頭のご挨拶……………3
 靖國神社に参拝しようとしなない政界財界の要人共に見る詠者の階層……………4
 和漢防人の歌に見る詠者の階層……………9
 中国を読む……………14
 呆れた中韓の歴史教科書……………11

日本人よ気骨を持て……………19
 母子像に見る戦後六十余年の落差……………18
 靖國神社にたまたま参拝した女性名の大提灯を見て思うこと……………21
 フォトリボン慰霊巡拝旅行……………23
 慰霊親睦旅行……………31
 人間魯魯(黒木博司・仁科関夫少佐②)……………33
 今期の戦史⑧ ガ島の攻防(4)……………44
 平和へのみちしるべ(抄①)……………48
 川南護国神社例祭参加の記……………50
 古い碑に秘められた史実「八勇士殉職之碑」・海軍赤江飛行場の慰霊碑……………52
 見学者に与える二枚の葉書……………54
 大東亜戦争忠魂顕彰六十五年祭他……………55
 運命の日 十一月八日……………57
 CD「あ、特攻」の領布とあ、特攻「勇士之像」……………62
 全国護国神社奉納運動……………63
 理事会・評議員会報告……………64
 図書紹介・事務局より……………66

「元旦や糧なき春の戦」 ガ島に名を残した若林東一

田中 賢一

このことは既に62号で述べたが、元旦に因み重ねて述べる。

語りてもなお語りたも尽きざるは

国に殉ぜしまずらをの友

ガ島の一角見晴台を確保していた若林中隊長（38師団歩兵228聯隊第10中隊）は十八年の元旦西山大隊長に次の挨拶状を送った。

ガ島第一線に新春を迎ふ、将に必勝の元旦なり。謹みて聖寿の万歳を寿ぎ奉る。我が中隊本朝一粒の食なきも士氣極めて旺盛なり。水筒一杯の水は滾々として活力の泉となる。既に死生なく任務重し。若林第一線に在るからは、願くば御安心を乞ふ。

元旦や糧なき春の勝戦

於見晴台、第十中隊

若林東一

西山部隊長殿

それから二週間後の一月十四日、若林は敵の砲撃により戦死するのであるが、この頃（元旦）はやがて補給もあり攻勢に出るものと信じていた。

それよりも前から、攻勢に出る日を

夢みていたことは彼の日記を見れば、想像に難くない。十一月二十三日の日記に次のような一節がある。

退屈と云ふものを克く考へて見ると、中々面白いものだ。壕の中にひとつ躊躇つて敵の砲弾の風圧力にあふられ乍ら、総攻撃の日を待っている

第一の楽しみは敵をやつつけた日の晴々しさ。
第二は今までの愉快だった事柄の回想。
第三は夢。

彼の性格からいって攻勢の期待があったればこそ、糧なき春の勝戦の句が出たのであろう。
前年の十一月この中隊が見晴台を占領してから戦死するまで、約六十日間壕の中にあつて中隊を指揮した。
何やらむ良き事待てる心地して
今宵も寝ねむこの穴掘りて

彼は壕に入つてばかり居たのではない。数名を率い先頭に立って敵中に潜入し腕に覚えの剣術で敵斥候を倒し、糧食を沢山奪つて帰つたこともあるし、斥候を出すときには敵陣の見える所まで同行し、具体的に行動を指示した。

一月十三日、数日前から続く敵の激しい攻撃に、夕刻若林は頭に迫撃砲弾の破片を受けて倒れた。仮包帯をしてなお中隊の指揮を続けたが、夜になって

指揮を竹内小隊長に任せ、部下の扶けを借りて大隊指揮所に西山大隊長に報告に行った。別れの挨拶である。大隊長は後方に下がって治療することを勧めたが、もとより彼が後退する筈がない。自分の陣地に帰り翌十四日陣没した。

「後に続くを信ず」彼の残したこの言葉は、この部隊だけでなく全陸海軍に伝わり、特攻隊員の寄せ書きなどに屢々見かける。爆弾を抱いて敵艦に体当たり出来たとしても、それだけでこの傾いた戦勢が挽回できる筈はない、後に続く者があればこそ究極の勝利を得られるのだというのが、特攻隊員の死生観になっていた。

義烈空挺隊員の一人棟方少尉は入営前に小学校で教鞭を執っていた。健軍飛行場を出撃する前に新聞記者に手渡した紙片に書いてあった。

全国ノ学童ニ寄ス
義烈空挺隊棟方少尉
俺ガ行ク！
俺ガヤル！
俺に続け！

コノ意気デ進メ コノ意気デ勝テ
若林の残した言葉の真髄はここにも見ることが出来る。

若林東一の経歴
明治四十五年三月二十七日、山梨県

西八代郡栄村に出生、身延中学校卒業後五年ばかり郷里で森林組合に勤めていて、昭和八年適齢で徴兵検査を受け甲種合格で甲府の歩兵第四十九聯隊に入営し、軍人としての第一歩を踏み出した。

ここで下士官を志願して仙台の陸軍教導学校に学び、教育総監賞を受け原隊に戻り軍曹にまでなったが、将校を志し士官学校予科を受験した。合格して十一年四月に入校し、我々と同期生となった。52期では下士官から入ってきた者は三人いたが、三人とも中学校は出てはいたが、軍務の傍ら勉強し我々と同じ試験を受けるのは、並み大抵の努力では出来なかつたと思う。

我が期で明治生まれは若林一人で、一番多い年齢層は大正七年だった。私は予科本科とも中隊が異なり兵科も違つたので、接触は無かつたが、予科本科とも歩兵の恩賜だったので、努力家だつたらしい。中学生時代からガ島で死ぬ数日前まで日記をつけていたことを見ても、我々の真似出来ない人物と思う。まだ紹介したいことがある。

沢山あるが、記事の標題と離れるのでこれ迄とする。



若林東一の経歴

明治四十五年三月二十七日、山梨県

平成十九年 年頭のご挨拶

会長 山本 卓眞



会員の皆様には、よい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年九月、悠仁親王殿下ご生誕の慶事があり、それまで世論が二分して芳しからざる雰囲気だったのが一気に沈静化しました。これから落ち着いていた議論が進むことを期待できるように思います。

同月安倍政権が誕生し、多くの期待の中、村山談話、河野談話の踏襲など転向かと思わせる局面もあり、靖國参拝の曖昧戦術など、今後注目と支援を要すると思われれます。この点、小泉首相は八月十五日に参拝して

有終の美を飾られました。

イラクの日本自衛隊が任務を立派に果たして無事に帰還したのも朗報でした。一方北朝鮮はミサイル実験に加えて核実験を行い、日本への脅威は一段と高まりました。我が国の核武装論、敵基地への長射程精密誘導弾の議論も始まりましたが、中途で終わらせずに徹底した議論がされるよう願っています。

しかし、一朝事ある時、国のため戦う若者が10%という(1991年の調査)日本の精神状況を正さない限り、安全保障の基礎がないこととなります。この意味で当協会の活動は重要です。

幸い教育基本法も改正され、防衛庁も省となり、明らかに一歩前進しました。安倍首相は憲法改正の意志も見せています。日本の正常化に自信と希望を持てるようになってきました。

昨年、硫黄島の戦に関する米国映画二本が日本でも話題になりました。また、「散るぞ悲しき」と「常に諸子の先頭にあり―陸軍中将栗林忠道と硫黄島」とが発刊され

話題になりました。硫黄島の守備隊は、長期間、地下の陣地を作るため、地熱、ガスとの戦い、水不足、疲労との戦いを続けた上に、強烈な弾雨の下、逃れる道も補給もなく文字どおりの死守によって敵に甚大な損害を与えました。特攻隊とは別の形での壮烈な戦史が、大東亜戦争の各地に刻まれています。会員各位には、特攻烈士の慰霊顕彰と共に、他の数多の、^{あまた}壮烈な戦死を遂げた将兵とご遺族にもご配慮頂きたいと思えます。

当協会は、今年から各地の護国神社に特攻勇士之像の建立のお手伝いを始めることになりました。(別稿 藤田理事)

当協会の会員は、一昨年から再び減少を見せ、昨年も約二四〇名の減員となりました。会員の年齢構成上、止むを得ないところではありますが、特攻戦士の慰霊顕彰をできるだけ盛大に行い、次世代の方々への精神、事業両面での継承を確かなものとする為に、会員の増強、若い方々の入会を切に希望します。

皆様のご協力をお願いします。

靖國神社に参拝しようとしな政界財界の要人共に読ませる書

会員 田中 賢一

遺書遺詠にみる靖國神社

——戦死したら靖國神社に祀られ、祭事は国で手篤く行われるものと、誰もが信じていた——

毎年四月の第一土曜日に靖國神社境内大村益次郎銅像の前で、「同期の桜を歌う会」の行事が行われている。「貴様と俺とは同期の桜 離ればなれに散らうとも 花の都の靖國神社庭の梢で咲いて会おう」。歌っているとジーンと熱くなるのを感じるのは、私だけではないようだ。見れば戦後の若い人も感激を込めて歌っている。戦後六十余年、この歌は純正日本人の琴線に触れるものがある。

靖國神社、そして桜、英霊の御心に深く刻み込まれてきたからこそ、未だに日本人の心を打つ。

よしや身は千々に散るとも来る春に
また咲き出でん 靖國の宮
義烈空挺隊 関三郎軍曹

英霊の遺書や遺詠は沢山残っている



が、その中で必ず死ぬときまわっている特攻隊員のもの比較的多いのは当然である。ここに、それらの中から靖

凡例

國神社に係わるものを拾ってみよう。書いた方の陸海軍の区別は出典と経歴を見れば判るので、記さなかった。階級は出撃時のものである。経歴について、(陸軍)

「特攻基地第二国分の記」より

陸士とあるのは航空士官学校も含む、少候は少尉候補者、特操は特別操縦見習士官、幹候は幹部候補生、少飛は少年飛行兵、特幹は特別幹部候補生、仙台等地名を冠し乗員養成所とあるのは通信省航空機乗員養成所のこと、(海軍) 甲(乙・丙) 飛は甲(乙・丙) 種飛行予科練習生、特がついてるのは特別飛行予科練習生を示す。

沖繩作戦時鹿兒島県溝辺

町十三塚原(現在の鹿兒島空港)に在った海軍特攻基地の記録

宮内 栄少尉 飛行予備学生出身 22歳 第三草薙隊 4月28日出撃
父母宛の遺書の一節
折がありましたら、靖國神社で待っておりますから、面会に来て下さい。

る迄靖國神社で首を長くして待っているぞ。

時任正明少尉 飛行予備学生出身 25歳 第一草薙隊 4月6日出撃
父母宛の遺書の一節
——正明、桜花咲く靖國の杜、智三人の兄上の許に、そして親友松本峯一の居る所に一足先に行きます。

靖國神社発行「英霊の言乃葉」より

植村真久少尉 飛行予備学生出身 25歳 神風特別攻撃隊大和隊
19年10月26日比島海域に出撃
愛児への便りの一節

——お前が大きくなって、父に会いたい時は九段へいらっしやい。そして心に深く念ずれば、必ずお父様のお顔がお前の心の中に浮かびますよ。

島 澄夫少尉 飛行予備学生出身 25歳 第三八幡護皇隊 4月16日出撃

弟宛の遺書的一端
——達夫・広昭、俺は一足先にゆく、二人とも早晚後に続くのを信ず、二人のく

永尾 博中尉 飛行予備学生出身 22歳 第三草薙隊 20年4月28日出撃 沖繩近海
父母宛の遺書の一節
——父さん 大事な父さん 母さん 大事な母さん 永い間色々とお世話になりました。好子、寿子をよろしくお願ひ致します。

靖國の社頭でお目にかかりませう。では参ります。お身体お大事に。

米津芳太郎少尉 少候24期 26歳

富嶽隊 19年11月13日出撃 ルン

ン島東方洋上

母宛の遺書の一節

——親に先立つ不孝をお許し下さい。

さりながら大君の御楯として靖國の守護神になる芳太郎のご故母上もおお喜び下さることゝ存じます。——

町田道教少尉 飛行予備学生出身

25歳 神風特別攻撃隊筑波隊

20年5月11日出撃 沖繩近海

母宛の遺書の一節

——それから若い盛りの綾子にもだいが苦労をかけました。化粧もせず、着物もきず、たゞ家の為に働いてくれるのを思うと全く頭が下がります。よい婿さんを見つけてやって下さい。サエ子ちゃんもよい子になるようお願ひ致します。私も靖國神社からそれを祈って居ります。

「都城疾風特攻振武隊」より

沖繩戦で都城飛行場から出撃した陸軍特攻の記録

田中 治伍長 少飛13期 20歳

第六〇振武隊 5月20日出撃

父宛の遺書の一節

——永の御不孝平に御許し下さい。治は先に失礼致しますが、靖國の杜頭より皆様の御健康を祈ります。

松尾 巧一飛曹 乙飛17期 20歳

神風特別攻撃隊第三御楯隊 20年

4月7日出撃 沖繩近海

両親宛の遺書の一節

——私の小遣が少しありますから、人に頼んでお送り致します。何かのたしにして下さい。

近所の人々、親族、知人、小学校時

代の先生によろしく、妹にも……

後はお願ひします。では靖國へまいります。

昭和二十年四月六日午前十一時書

小川 清少尉 飛行予備学生出身

24歳 神風特別攻撃隊第七昭和隊

20年5月11日出撃 沖繩近海

両親宛の最後の便りの一節

——殊に母上様には御健康に注意なされお暮し下さるよう、なお又、皆々様の御繁栄祈ります。清は靖國神社に居ると共に、何時も何時も父母上様の周囲で幸福を祈りつゝ暮しております。

清は微笑んで征きます。出撃の日も、そして永遠に。

誇を胸に 秘めて飛立つ

永島福次郎少尉 特操1期 22歳

第二六振武隊 6月21日出撃

遺筆の一端

——靖國を安住の地と定めたり、我が心は静寂清明

——靖國ノ御社ニ咲ク若桜

——元氣日増に旺盛 唯一日千秋の思

ひにて出撃の日を待つて居ります。既に隊員五名悠久の大義に殉ぜらる。残る吾等 亦神鷲に続かん 飛機整備完了しだいなつかしの都城に転進 爆装

完了沖繩へ……
再び会うことやなし
何時の日靖國で会う事ならんや

西宮忠雄少尉 特操1期 23歳

第二六振武隊 6月21日出撃

遺筆の一端

——靖國で共に飲まうか五色酒

花の都の靖國神社 酒豪 青年将校

一死元來不足論

浜田 齊伍長 少飛14期 20歳

第一七九振武隊 6月22日出撃

父母宛の遺書の一節

——齊は男子の本懐これに過るはなしと喜び笑って死にます。では次は靖國神社にて

「陸軍最後の特攻基地(万世)」より

沖繩戦に万世より出撃した陸軍特攻の記録

大島 寛伍長 仙台乗員養成所

20歳 第七四振武隊 4月7日出撃

辞世

さくら さくら若桜

明日は九段の花と咲く

荒木幸雄伍長 少飛15期 18歳

第七二振武隊 5月27日出撃

最後の便りの一節

——本日(廿七日) 出発します。

必ず大戦果を挙げます。

桜咲く九段で待っています。

どうぞ御身御大切に

弟達隣組の皆様宜敷

瀬谷隆茂軍曹 仙台乗員養成所

20歳 第四三三振武隊 5月26日

出撃

両親宛の遺書二通の一節

——御両親様どうか何時までもいつまでもお元氣で皇國の為に御健闘下さい。では靖國で会う日を楽しみに隆茂は征きます。

——明日は戦友が待っている靖國神社に行く事が出来るのです。日本男子と生れ本懐これに過ぎるものありません。

お父さんお母さん、隆茂は本当に幸

福です。では又靖國でお会ひしませう。待って居ます。

軍特攻の記録

若尾達夫軍曹 古河乗員養成所

21歳 第四三三振武隊 5月26日

出撃

同僚の遺品の中にあつた一文

松本兄、君とは古河、仙台、平安鎮

といつも一緒だったね。愈々大望の特

攻隊に召されて、これからも亦死を共

にする同じ隊とは……思えば山あり河

ありの幾屋霜、一緒に散らう、そして

靖國でまた一緒にならう。

花でさへ 潔よく散る若桜

大和男の子の俺達が

御国の為に 散るのなら

何の桜に負けやうぞ

日の本の 男に生れ光栄は

死して屍は帰らずも

魂永久に 靖國の

護りの神と我ならん

岸田盛夫伍長 少飛13期 21歳

第六四振武隊 6月11日出撃

出撃前夜の手記の末尾

俺には靖國神社に弟が待っている。

道案内を弟に頼むんだ。羨ましかろう。

「知覧特別攻撃隊」より

沖繩戦に鹿兒島県知覧を出撃した陸

佐藤新平曹長 仙台乗員養成所

24歳 第七九振武隊 4月19日出撃

留魂録(日記)より

三月二十九日

同期も大分戦死とのこと、靖國神

社の同期生会に立派な武勇伝の一席、

土産に出来る如く努力せむ。

四月一日

お母さんへ——あの時お母さんと東

京を歩いた思出は、極楽へ行つてから

も、楽しいなつかしい思出となること

でしょう。

あの大きな鳥居のあつた靖國神社へ

今度新平が祭られるのですよ……手を

つないでお参りしましたね。

浅川又之少尉 幹候9期 23歳

第四三振武隊 4月6日出撃

兄宛の辞世の歌

桜花と散り九段に還るを夢に見つ

敵艦屠らん 我は征くなり

榊原吉一軍曹 仙台乗員養成所

20歳 第六三振武隊 6月7日出撃

父母宛の遺書の一節

九段にて再会望みます。

「サヨウナラ」「サヨウナラ」

靖國神社編「いざさらば我はみくに
の山桜」より

富沢幸光中尉 飛行予備学生出身

22歳 神風特別攻撃隊第一九金剛

隊 20年1月5日出撃 ルソン島

近海

父母宛の手紙の一節

——お正月もきました。幸光は靖國で

二十四歳を迎えることにしました。靖

國神社の餅は大きいですからね。

安則盛三中尉 飛行予備学生出身

21歳 神風特別攻撃隊第七昭和隊

20年5月11日出撃

本文の説明より

安則中尉は四男、そして五人兄弟の

中ただ一人の戦死者となった。すべて

を見通していたかのような安則中尉の

辞世は

はらからの五人そろつて旗のもと

一足先に 四男坊征く

「五月十一日の命日には靖國神社に参

拝してやってくれ」という父の遺言を

守り、三男の三作さんは命日祭である

永代神楽祭に毎年参列している。

「特攻隊遺詠集」より

特攻隊戦没者慰霊協会発行の本で、

特攻隊員が出撃にあたり心情を吐露し

た詩歌約八百点を、解説を付して記述

したもの。

高石邦雄大尉 陸士54期 24歳

航空特攻石腸隊長 19年12月5日

出撃 比島方面

大君の醜の御楯となりし身は

靖國社頭の花と咲かなむ

天野三郎少尉 陸士57期 22歳

航空特攻一字隊 12月5日出撃

比島方面

(妹天野和子の歌)

靖國の杜に向いて合掌す

レイテの島に散りし兄見ゆ

福山正通中尉 海兵72期 23歳

神風特攻隊金剛隊 20年1月5日

出撃 比島方面

たらちねのちは迎えん靖國に

明日はゆく南溟の空

磯部 豊中尉 飛行予備学生 22歳

神風特攻隊金剛隊 20年1月5日

出撃 比島方面

我も又還らぬ友の跡迫いて

靖國の宮の若桜と散る

島村 中一飛曹 乙飛15期 20歳

第一神雷桜花隊 20年3月21日出

撃 沖繩方面

大君の辺にこそ散らん櫻花
今度咲く日は九段の杜

柏谷義藏少尉 乙飛4期 27歳
第1神雷隊 20年3月21日出撃
覚悟して大海原に羽撃の
響きは永久に靖國の杜

棚橋芳雄二飛曹 丙特飛14期 22歳

桜花隊 20年3月21日出撃
若鷺は南の空に飛び立ちて
還るねぐらは靖國の森

長谷川実大尉 陸士55期 24歳
第20振武隊 20年4月2日出撃
沖繩方面

春まだき九段の花と咲き散りて
勝ちみ戦の基開かん

清水 定伍長 少飛12期 21歳

第44振武隊 20年4月7日知覧出撃
沖繩方面

いざ征かん弾も敵機も何かせん
今日は九段の花と咲く身は

梅村要三伍長 印幡乗員養成所

19歳 75振武隊 20年4月16日万世出撃
沖繩方面

錦着て白木の箱で九段坂
いざ吾征かん特攻隊

田熊克省少尉 海軍飛行予備学生13期 27歳
菊水部隊天校隊 20年4月16日串良出撃
沖繩方面

大君の御楯となりて吾は今
翼休めん 靖國の森

服部武雄伍長 少飛14期 19歳
第105振武隊 20年5月25日知覧出撃
沖繩方面

国の為生命捧げし若桜
弥生の空は 九段坂上

磯貝 巖中尉 海軍飛行予備学生24歳
第5神劍隊 20年5月4日

鹿屋出撃 沖繩方面
靖國の花と咲かなむわれもまた

いくさの庭に散りし友らと

中内静雄二飛曹 乙特飛1期 18歳

第8神雷攻撃隊 20年5月11日鹿屋出撃
沖繩方面

身はたとへ南の海に朽ちぬとも
やがて九段の花と咲くらむ

近藤 豊伍長 少飛15期 18歳

第11振武隊 20年6月3日知覧出撃
沖繩方面

轟沈の空は青空靖國に
笑顔で迎へる 母の面影

高村統一郎少尉 特撰1期 27歳
第12振武隊 20年6月3日知覧出撃
沖繩方面

我がつとめ果して逢はん九段坂
桜の庭で 姉の待つらむ

巽 精進少尉 幹候9期 24歳
第64振武隊 20年6月11日万世出撃
沖繩方面

俺の住家は九段と決めたよ
しばし浮き世は仮のやどよ

座間重信中尉 陸士56期 23歳

神翔攻撃隊 20年4月11日 ニコ
パル諸島

大君の為にぞ散れと教ふらん
靖國社頭の 若き桜は

山本正記伍長 特幹1期 20歳

海上挺進第17戦隊 20年2月10日
マララ湾

靖國の社にしづまる武上の
み霊に続く 若桜かな

宗像幹夫伍長 特幹1期 20歳

海上挺進第6戦隊 20年2月13日
比島リサル州

征けば帰らぬあづさ弓
靖國の社 我を待つらん

引田耕一郎少尉 幹候10期 23歳
海上挺進第2戦隊 20年3月28日
沖繩慶良間

国の為嵐に向う山桜
咲くは何処ぞ 靖國の杜

木村 実少尉 幹候10期 23歳
海上挺進第10戦隊 20年7月19日
ルソン島地上戦闘

憂国丈夫大義 九段社頭謝久闊

久司博敏曹長 海上挺進第26戦隊
20年5月13日 沖繩地上戦闘

若桜国の鎮めと散りしとも
永久に咲きませ 靖國乃花

吉野繁実中尉 海兵67期 24歳

真珠湾攻撃特殊潜航艇々長 16年
12月8日 ハワイ

靖國で会う嬉しさや今朝の空
(父に送った句)

原 敏郎中尉 予備学生3期 28歳

回天金剛隊伊47潜 20年1月12日
ニューギニアホーランジヤ

靖國の桜と咲かんとこしえに
南の海に果つるこの身も

加賀谷 武大尉 海兵71期 24歳

回天金剛隊伊36潜 20年1月12日



靖国神社に霊鎮まる 戦没特攻隊員

故少飛会海法秀一画

ウルシー泊地

驕敵を三途の川迄吹き飛ばし

身は九段の花と咲かなむ

このようにその他の書物からも引用すれば、靖国神社に係わるものは数限りなくあろう。

平成百人一首を読んで

百人一首といえど誰しも小倉百人一首を思う。これは藤原定家が小倉山荘にあって編集したもので、古今集から続後撰集までの勅撰集から採ったもので、一番多く入っているのは古今集である。正岡子規は「歌よみに与ふる書」で「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」と言っているの、百のうち古今集が二四も含まれているこの百人一首も、同断とするであらう。

それはさておき、国語問題協議会の編輯した平成新選百人一首をながめてみよう。この書が採り上げている百首は記紀・萬葉時代から平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代、明治・大正・昭和時代に至るまで日本の歴史の全部を網羅している（現在存命の歌人は除く）小倉百人一首の王朝三百年間のものとは、当然のことながら異質である。冒頭の一首は須佐之命の作である。八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を新婚を喜ぶ歌と伝えられていて、古代日本民族のおおらかな気持ちがかげえる。この歌集百首を通読すると、日本歴史の各時代精神を読みとることができる。現在のわが国の思想の乱れは

日本歴史を知らないことにある。和歌を通じ歴史を学ぶには絶好の歌集といえる。各時代の象徴的な歌を拾ってみれば。

〈記紀・萬葉時代〉

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも 弟 橘媛

（倭建命が相模国で地方豪族に欺かれ火攻めに遭ったとき、向い火を放ち難をのがれたが、そのとき媛の身を案じた命の愛情を詠んだもの）

青丹よし寧楽の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり 小野 老

〈平安時代〉

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関 能因法師

〈鎌倉・室町時代〉

われこそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け 後鳥羽院

〈江戸時代〉

敷島の大和心を人問はば朝日ににほふ山ざくら花 本居宣長

親思ふころにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん 吉田松陰

〈明治・大正・昭和時代〉

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心とものがな 明治天皇

生徒みな兵となりたり歩み入る広き校舎に立つ音あらず 窪田空穂

浅薄な思想もって靖国神社のことを

喋々する政界の者共に教える歌なにごとのおはしますかはしらねどもかたじけなきに涙こぼるる 詠人不知（一説には西行法師という）

かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名をぞとどむる 楠木正行

最近親が子を殺す、子が親を殺めたという、聞くに耐えない事件が報じられる。このような歌心はないのか。銀も金も玉も何せむに勝れる寶子にしかめやも 山上憶良

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉せ忘れかねつる 文部稲麻呂

たのしみはまれに魚煮て児等みなかうましうましといひて食う時 橘 曙覧
垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすかしといねつたるみたれども 長塚 節

（詠者入院中に一時帰宅した時）

昭和時代の終に特攻隊員の遺詠一首

来る年も咲きて匂へよ桜花われなきあとも大和島根に 長沢徳治

長沢少尉は第67振武隊、石川県出身

金沢高工卒、幹候9期、20年4月28日

知覧出撃、沖縄西方洋上散華。我が身は桜花の如く散るが、祖国はあの桜のように永遠なれと。

百首の最後に台湾人の一首

萬葉の流れこの地に留めむと生命のかぎり短歌詠みゆかむ 孤蓬萬里

和漢防人の歌に見る詠者の階層

— 67号の国柄についての続篇 —

田中 賢一

赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山歩ゆか遣らむ (妻の歌)

「父母妻子を思う」

時時の花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出来ずけむ

水鳥の発ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき (水鳥は枕詞)

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず

わが妻も画にかきとらむ暇もが旅行く我は見つしのはむ

大君の命かしこみ出で来れば私の取り着きて言ひし子なはも (大君の御命令を承って出発すると私にとりついて泣いた子はなあ)

千葉の野の児の手柏の含まれどあやにかなしみ置きてたが来ぬ (千葉の野のこのてがしわがまだ開かないように、本当に可愛いが置いてきた)

「親、妻が詠う」
家にして恋ひつつあらずは汝が佩ける刀になりても齋ひてしかも (家において心配していないで、お前が帯びている太刀になっても守ってやりたいものだ 防人の父)

草枕旅行く夫なが丸寝せは家なる我は紐解かず寐む草枕旅の丸寝の紐絶えは我が手と附ける此の針持しわが夫なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寐も

防人に行くは誰が夫と問う人を見るが羨しき物思もせず

○詩経に見る防人の歌

彼の国最古の詩集詩経に従軍や行役に関するものは十四篇あるが、その中で明らかに従軍兵士の作と思えるものは三、四篇である。それらを挙げてみる。

邶風 擊鼓

鼓を撃つこと其れ鐘たり 踊躍して兵を用う

国に土き漕に城つくるに 我れのみは独り南に行く

太鼓をどんと鳴らし、おどりあがって兵器の練習だ。都で土木工事をしている者もあれば漕に城を築きに行く者もいるのに、俺だけは戦場に行くことになった。

孫子仲に従って 陳と宋とを平らぐ

我に帰りを以えざれば 憂うる心は有にも忭たり

こうして孫子仲どのにつれられて行くのは陳の国と宋の国にはなしをつけに行くのだと言うが、いつ帰れるとはっきりはしていない。憂いはつのるばかりだ。

爰に居り爰に処り 爰に其の馬を喪う

干きて以つて之を求むるは 林の下に干いてす

(仲間たちは) あすこにしゃがみこみ、あすこに休んでいたが、あすこで馬を見失い、うろろう探しに行ったのは、森のかけ。

死生契濶

彼我の防人の歌を「詩経」と「万葉集」から拾って見る。結論から先に述べれば、我が万葉集には防人となった庶民が詠者である歌が沢山載っているのに対し、詩経の方は僅か四点しか見あたらない。彼の国について古典詩を広く尋ねてみても、兵士自ら詠った詩は残っておらず、プロの詩人が兵士の身になって詠った詩ばかりが目立つ。

○万葉集に拾う

巻の第二十は大件の家持の作がもっとも多いが微されて筑紫に向かう防人の作が百首以上あるので、作表的のものを挙げてみる。

「大君の為、国の為」

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は大君の命にされば父母を齋戸と置きて参るて来にしを大君の命かしこみ弓の共さ寐か渡らむ長けこの夜を大君の命かしこみ青雲の棚引く山を越えて来のかむ

「筑紫に向かう道中」

筑紫方に船向る船の何時しかも仕へ奉りて本郷に舳向かも

暁のかたはたれ時に島陰を漕ぎにし船のたづき知らずも (暁の薄暗い時に島陰を漕いで行った船の行先に心あたりがない)

子と説りを成しぬ
子の手を執り
子と偕に老いんと

(家に残した妻よ) 死んでも生きてもどんな苦

労があるうとも、お前との間には約束がある。お

前と手をにぎり、お前と共に老いよう

干嗟 闊かなり

我と活きず

干嗟 洵かなり

我と信さず

ああ遠く離れてしまい、一緒に暮せそうもない。
ああ遠く離れてしまい、添いとげることは叶わぬ。

次にもう一篇引用してみる。

魂 風 陟 岵 (はげ山に登りて)

彼の岵に陟りて

父を瞻望す

父は曰わん嗟予が子よ

行役しては夙夜已る無く

上わくは旃を慎まん哉

猶お来たりて止まる無かれと

彼の岵に陟りて

母を瞻望す

母は曰わん嗟予が季よ

行役しては夙夜に寐ぬる無く

上わくは旃を慎まん哉

猶お来たりて捨てらるる無かれと

彼の岡に陟りて

兄を瞻望す

兄は曰わん嗟予が弟よ

行役しては夙夜に必ず偕にし
上わくは旃を慎まん哉
猶お来たりて死する無かれと

まだ二篇ばかり兵士が詠っているものがあるがこ

こで強調したいことは詩歌の内容ではなく、兵士自

身が作った歌がきわめて寡ないということである。

彼の国の兵士も、思っていることを歌にしないとい

うことはあり得ない。しかしそれを文献としてのこ

すに値しなかったであろう。我が萬葉集は大した

ものだと痛感する。

○代詠歌

兵士自らの作詩が無い代わりにプロの詩人が兵士
の身になって作った詩には、読者の胸臆に迫るもの
がある。特に唐詩に多い。

從軍行

王昌齡

烽火城西 百尺の楼

黄昏 独り座す 海風の秋

更に羌笛を吹く 関山月

那んともする無し 金閨万里の愁い

海風 青海省の湖から吹く風

羌笛 戎の吹く笛

関山月 曲の名で歌詞は旅人の郷愁を詠ったもの

という

金閨 婦人の居室、万里の彼方にいる妻へのせつ

ない思い

子夜呉歌 李白

長安 一片の月

万戸 衣を擣つ声

秋風 吹きて尽きず

総て是れ 玉関の情

何れの日か 胡虜を平らげ

良人 遠征を罷めん

玉関 玉門関

夜受降城に上りで笛を聞く 李益

回楽峰前 沙雪の似く

受降城外 月霜の如し

知らず 何れの処にか蘆管を吹く

一夜征人 尽く郷を望む

涼州詞 王子渙

黄河 遠く上る 白雲の間

一片の孤城 万仞の山

羌笛 何ぞ須いん 楊柳を怨むを

春光度らず 玉門関

隴西行 陳陶

奮って匈奴を掃わんとして身を顧みず

五千の貉錦 胡塵に喪う

憐れむべし 無定河辺の骨

猶是れ春閨夢裏の人

貉錦 防寒の軍服、ここてではそれを着た将士

無定河 内裏古から陝西省に流れこむ河

春閨夢裏の人 妻の夢枕に現われる人

著者のこの本から67号に一篇を取り出して紹介したが、今回は次の標題のものを掲載する。標題の下の番号は、本会報に掲載の番号である。

外交の常套手段②

—米中軍用機接触事故と—

瀋陽日本総領事館事件—

自分の非を認めようとはしない。

謝らない。

一度頭を下げたら、ますます威文高いただかに出てくる。わめき立てて恫喝する。

こゝに述べることは中国、又は中国人の特性である。とりわけ国家間の外交問題では十二分に配慮を要することなのである。2011年4月1日に海南島の南東海上で起こった米中軍用機の接触事故の処理を通しての両国の対応を見ることにする。

この事件の経緯は、よく知られていることと思うが、念の為に記すと、米海軍のEP3電子偵察機が日常の偵察活動を行っていた時、中国海軍のF8戦闘機が接近してきて、翼を並べる程に近づき、嫌がらせの行動を行い、2機のうちの1機が

EP3に接触して墜落、EP3は機体を破損されたがどうやら飛行を続け、最も近い海南島の飛行場に着陸したのである。

EP3は緊急救難信号を発信しつつ海南島へ向かった。この信号を受けた場合は、それが軍用機であっても、国際法によって着陸を認め、人員も機体も保護しなければならぬことになっている。であるが故に、アメリカは事件発生後直ちに談話を発表し、「中国側は速やかに乗員及び機体をアメリカに返還されるような処置を取ることを望む」と述べ、特にEP3の機体内にはアメリカの主権が存在しているから、中国側は入ることはできないのであると強調した。アメリカは中国がその通りにするであろうとは毛頭思っていなかったであろうが、世界にアメリカの正当性を認識させる必要から、中国に先んじて報道したのである。

一方中国側は、米軍偵察機の行動は合法ではあるが、常時中国の近海上空で偵察を行うのは、著しく中国の権威を損なう行為であり、少しでも領空に近づけば、スクランブルをかける権利があるとの主張を行ない、そして海南島に着陸した偵察機は領空を侵犯したと反論した。その領空侵犯とは、海南島に着陸するには中国の領空に入らなければならず、それを侵犯と称したのである。まさに白を黒と言い含める論法であると言える。

EP3の救難信号は機体の破損によってその電波は発射されなかったのではないかとの説もあるが、迎撃もせず易々として着陸を認めたのには明らかに或る意図が読みとれる。即ち中国にとっては国際法を守る意図はなく、電子装置の宝物E

P3を如何にして入手するかという思惑であり、搭乗していたアメリカ人と共に有力な対米外交カードに利用しようとしたのだと考えられる。そこには国際法を守るといふ法治の意識はなく、それによって生ずるであろう中国の非を自ら認めることはいないという態度なのである。

米国は24名の搭乗員を速やかに帰国させることを至上の目的とした。然し中国からの情報は仲々入って来ない、人員は安全なのか、中国側は機体内に入ったのではないか。米当局は強硬姿勢を取っていたが、一日も早く搭乗員(24名のうち3名は女性である)を帰還させるため、中国との対立はなるべく避けようとした。帰国が著しく遅れたり、傷害を受けたり、或いは「人質」にされたりした場合には、米国民の与論は一気に爆発点に達することもある。それは米政府としても避けたいことであつたから、搭乗員が解放されるまでは「猫撫で声」策をとることにした。勿論アメリカ側は用いる言葉を慎重に選び、自国としては中国に謝罪したのではないが、中国はアメリカが謝罪したと解釈でき得るようになったのである。即ち中国の飛行機が墜落してパイロットが行方不明になったことに心からの遺憾の意を表し、行方不明の王偉パイロットの家族に陳謝し、口頭での通告なしに領空に進入して着陸したことに陳謝したのである。この声明をよく読めば、アメリカは飛行そのものには陳謝を言及していない。中国も米国と「人質」のことで事を構えるのは得策ではないと考えていたから渡りに舟で、11日目に搭乗員全員を解放したのであつた。

24名の搭乗員が中国を離れるや否や、アメリカ政府は「猫撫で声」政策を一変し、高姿勢で恫喝した。中国側も「人質」なら問題は大きくなくなるが、飛行機という物体ならばさして問題にはならぬと見越していた。米国のやり方も仲々に見事だが、中国もしたたか者である。

米国は偵察衛星からの写真によって大まかな事は掴んでいたであろうが、搭乗員の帰国後の報告によれば、着陸したEP3は銃を構えた中国兵に取り囲まれ、機外に出され、中国人は機内に入ったというのであり、初めから国際法を云々されるような状態ではなかったのである。

さて、次に昨年の瀋陽日本総領事館での北朝鮮難民の亡命事件の時に、中国武装警察官が領事館内に侵入し、亡命北朝鮮人を拉致した事件である。事件の全容はご存知と思うので詳しくは述べないが、本節の冒頭に記した4つの手段をそのままはっきりと中国側は示してくれた。

韓国の亡命支援者が撮影したビデオテープが中国を除く世界で放映されたので、一日余は全くコメントせず、日本国内の反響を見ながら作戦を考え、中国側は日本公館への侵入者を排除した正當な行動であり日本の領事館は感謝しているとの発表を行い、日本政府は中国を中傷するコメントをしていると非難する作戦、即ち「うそ」を「まこと」にすり替える巧妙な外交戦術に出たのである。本来、この事件は中国武装警察官がわが公館内に無断侵入したという国際法違反が先ず問われる重大事件なのである。然るに外交術に長ける中国は、だんまりを決めた後、「日本の副領事は朝鮮

人の出した亡命意志を伝える英文のメモを返した」、「日本側は館内に入って朝鮮人を連行するのを認めた」、「副領事は「感謝」といった」などを小出しに報道し、日本の世論が外務省の不手際を指摘するようになり日本国内の中共同調者が中国とは争うななどというようになると、それではと日本を恫喝し、何とはなしに中国のいうことに理があるような雰囲気を作り出し、日本政府が条約違反を持ち出せないようにしたのである。

1、中共政府は自分の非を認めない。

もし非を認めたらば、その後の策略は立てられなくなる。だから非が中国側にあっても決してそれを認めることはない。

2、中共政府は謝らない。

1に関連して決して謝らない。

3、中共政府に一度頭を下げたら、ますます居丈高に出てくる。

瀋陽事件で、わが政府は頭を下げてはいない。然し中共側より副領事が朝鮮人に亡命意志を書いた文書を返したこと、副領事が中共の機関に電話して事は解決した。謝謝といったなどのことが発表され、民主党の国会議員団が中共側を訪問して中共寄りの報道をする等のものである。日本の新聞やTVがそれを報じて、中共の非を問うよりも外務省の不手際を叩くようになると、中共の報道官の記者会見での談話は益々居丈高になり、事を複雑にしているのは日本政府の反中国的行為の結果であり、日本側の謝罪をすら求めるようなことをするのである。

4、中共政府はわめき立てて恫喝する。

もうこうなれば中共政府はわめき立てて恫喝するのが常套手段となる。

このような状態になって、日本政府は国際条約違反を抗議し、謝罪を求めすることも控えるようになってしまった。或る政府高官は、日中国交回復30年を記念する年であるから、抗議はしない方がよいとすら発言しているのであり、何をかいわんやといいたい。

私は本誌に『中国を読む』を昨年の12月号より書いているが、その12月の記述の冒頭に190年の北清事変の時、日本軍と住民との間の問題について、清朝政府は日本に対して抗議を申し入れたことがあった。その時、英国公使が、「絶対に謝ってはならない、たとえ日本兵の方に悪い事があっても謝るな」といったことを紹介したが、イギリス人はもう百年も前から、中国人との付き合い方を知っていた。アメリカ人も同様である。

英米人は中国民族（その90%は漢民族）の性質を知っている。いや見抜いていると言った方がよいかも知れない。それは東アジアの日本、中国、朝鮮の各民族性を比較して見ることができることによるのである。同じ東アジアに在る日本人は、客観的に中国人、朝鮮人を見る術を知らない。

北清事変の6年前の日清戦争は、日本が完勝した。日本海軍も清国海軍もその創設期には共にイギリス海軍に学んだ。イギリス海軍が知ったのは日本民族は漢民族（清国であっても実務につき軍人は100%が漢族であった）に比べて格段に優秀で

あり、両国が戦えば必ず日本が勝つと見ていた。第二次世界大戦は、日本は英米と戦ったので敗戦のやむなきに至ったが、戦後、米国は日本人は何故中国人や朝鮮人とその民族性が違うのかを知りたがり、特に米海軍は日本人は信頼し得ると感じ取った。陸上自衛隊と航空自衛隊は全く新しく米国式に作り変えられたが、海上自衛隊は日本海軍が主体、米国は支援する形で再建された。これが同じ旭日旗を使い、艦名も同様な方法で命名され、号令の多くも継承されて、江田島に行けば日本海軍がずっと継続されている感じを受けるのである。

日本は文字も仏教も、そして平安期には政治型体をも中国より取り入れた。即ち多くの文化的感化を受けたので、日本にとっては師であった。文化とか芸術の面だけを見れば漢民族の汚濁性は見えてこないが、駆け引きを要するような政治、外交、商売になると途端にその嫌らしさが見えてくる。交渉の過程で見えてくるのは、本章の初めに記した特性である。

日本にとっては中国は文化の師であったこと、そして隣国である点から、却ってその本質を見抜けなく、第二次大戦では独伊と組んで、英米仏ソ中の連合軍と戦う結果となった。海洋国である日本は、本来同じ海洋国である英米と組むべきであった、大陸国である独露中とは親交を結ぶべきではないのである。

さて、米中間の外交交渉を横目にわが日本の状況を見てみよう。敗戦後は、特に中国に対しては頭を下げ放しである。宮澤内閣の時、教科書問題

で恫喝されるや謝罪して訂正、それ以後の教科書問題たるや、まるで中国の言いなりである。最初に「それは内政干渉である」と毅然たる態度を示しておけば、それで済んだものを、一度謝罪し頭を下げたから、これでもか、これでもかと出るのである。首相の靖國参拝問題も同様である。

昨年、中国の測量船や海軍艦艇が津軽海峡を日本海側から太平洋側へと抜け、或る艦船は停止したり、往復したりして調査を行っていたのは新聞にも報道されたので国民の知る所となった。津軽海峡のように日本領内に有る海峡でも、公海と公海を結ぶものは、その中央部分は公海と同様に外国船舶の自由なる航行が国際海洋法で認められている。けれどもその航行は一方に直進するだけで、停止したり、往復したりして調査を行うことは許されていない。従って中国艦船の行動は明らかに違法行為なのである。

外務省は例の如く、对中国問題となると及び腰になる。結局強硬な抗議を行うのではなく、他国の近海で調査を行う場合には事前に相手国に通知するという方法をとった。中国としては事前に通知すれば、最早日本は反対をしないことを知って堂々と日本近海の調査をするようになった。海上自衛隊の調査船が中国大陸に近づいて、この方法によって調査をしているのであろうか、恐らく「ノー」であろう。

米中の外交を見ていると、日中外交が如何なる状態にあるのがわかる。日本は恫喝されれば易々と頭を垂れて中国の鼻息をうかがう、無言の威圧を加えられれば、中国の意を汲んだ策をとる。

すっかり侮られているのである。原爆、人工衛星を持っていく国から、開発途上国であるから資金援助を続けるといわれて、無償援助を行なっているのがわが日本なのである。

数年前のことであった、日本の企業に技術留学に来ていた、中国の一流大学の大学院生が、21世紀は中国の世紀になる。日本などはこんなもの、だと言って両方の母指の爪を合わせて虫をつぶす仕草をして見せたことがあった。中国の青年がこのように広言しているのを見て、日本は中国に侮られ、辱めを受けているのを実感し、愕然としたのであった。

编者挿入

中国は何故靖國カードを執拗に使うのか

それは人民の政府に対する不平不満を外に向け政権の維持をはかる以外にない。然らば人民はどんな不平不満を抱いているのか、大きな項目だけを挙げてみれば、

- ・強制的に土地を取り上げられ、ろくに補償ももらえない農民が四千万もおり、地方政府相手では埒が明かないので、北京に出てきて訴えている者が四千人もおり、直訴村が出来ている。

- ・権力を持つ役人の汚職は凄まじく、中には高級軍人もいる。甚だしい者は死刑に処しているが一向に絶えない。

大きいものは以上の二つであり、不平不満にもとづく百人以上の暴動が、昨年は八万七千件も起きている。それを鎮める為の靖國カードである。

呆れた中韓の歴史教科書

会員 中野 直

平成14年頃「中国歴史教科書の目を覆う反日」という或るジャーナリストの論文を一読し、これではとてもこの国との友好関係など築いては行けないとの感を深くし、中韓教科書の実態を知りたいと思っていた。この度日本政策研究センターの本件に関する冊子入手し、教科書の実物を手にしなくても、実態がよくわかってたので、ここに一文を草した。

日本の歴史教科書に対する両国の批判は、中国「根本的な問題は日本が正しい歴史を認識するべきであると言うことだ」

韓国「過去の侵略と強奪の歴史を美化する歴史教科書の検定問題」

であるが、しからば彼等の言う正しい歴史認識とは果して如何なるものであろうか。

両国教科書の内容を一言にして言えば、日本に対する憎しみと怒りの表現に満ちた記述であり、とても正しい歴史認識などと言えたものではなく、彼等が日本の教科書を批判する資格は皆無であるという事実を日本人全体が強く認識しなければならぬ。

〔中国編〕

中国に於て日本に関する歴史教育の基盤となっているのは、自国の若い世代に対し、『日本は侵略国家でありその残酷性は凄まじく、中国は果敢な抗日闘争に明暮れたのである。我々の日本に対する憎しみと怒りは何時迄も生き生きと保たせておかねばならぬ』というものである。その為戦後の日本については『田中首相が訪中し、国交正常化合意の調印を行った』というたったの一行しか記述されていない。従って中国の生徒達が日本について学ぶのは日本の侵略と残虐だけとなっている。何とも呆れはてた次第である。

一、近代の日中関係は「侵略」で始まる。
中国教科書の近代史に日本が初登場するのは「台湾出兵」である。『日本は軍隊を派遣し、わが台湾を侵略する戦争を起した。英米仏などが調停。日本は中国から銀50万両巻き上げることを撤退の条件とした』事実は明治7年台湾に漂着した宮古島の住民54人が台湾先住民により殺害された。清国は台湾は化外の民、化外の地として責任を回避したため出兵した事件であって、化外云々をわが台湾と歪曲している。

二、2番目に登場の日清戦争

『日本に迫られて止むを得ず宣戦した甲午中日戦争で中国は日本侵略軍に敗れ屈辱的な馬関条約を締結した』開戦の経緯については清国軍艦の発砲から始ったのであって日本に迫られたというのは全く事実と反する。

三、一行も触れない日露戦争

明治時代の日本が登場するのは前述2件と「北清事変」の3回のみにて、何れも侵略である。中国大陸からロシアの影響力が後退する等世界的にも重要事件であり、辛亥革命の契機となった日露戦争については全く無視を決めこむ。つまり日本を侵略国とする中国の国定史観と矛盾する出来事は記述されないということである。

四、残虐の済南事件

『日本帝国主義は国民政府の北伐を阻止するため公然と出兵して済南を占領し中国の兵士や民間人6千人を殺し済南虐殺事件をひき起した。…また理不尽にも国民政府山東交渉員蔡公時らを強制連行した。日本軍に抗議をした蔡は日本軍により耳と鼻を切り取られ目をえぐられて殺された』事実は全く逆。昭和3年の第二次山東出兵時に起った済南事件の記述であり、虐殺されたのは日本人である。又日本軍が残敵掃討の為国民政府の交渉公署

の建物を搜索、射撃の応酬中に射殺された蔡
交渉員を国民党の宣伝材料に利用した記述。

五、数多の排日行為を無視した記述。

『柳条湖路線爆破を口実に北大宮を砲撃、
瀋陽を占領。日本軍は無人の地に入ったも同
然。半年も経たぬうちに東北三省の美しい国
まで敵の手に落ちた。東北3千万の同胞は日
本軍の残虐行為のもと、徹底的に抑圧され侮
辱された』満州事変はこの様な単純で一方的
な事変ではない。「火をつける前に既にガス
が充滿していたというべく、一触即発の危機
にあった。」(中村菊男「満州事変」より)

六、盧溝橋事件と田中上奏文

『1937年7月、日本侵略軍は盧溝橋に進攻し
長い間もくろんでいた全面的な侵華戦争を開
始した』の書き出しで始まる中国教科書は、
今も偽書「田中上奏文」は実在し、そこに書
かれている侵略計画は事実だとしている。

七、南京大虐殺

『戦後極東軍事裁判の統計によると、日本
軍の南京占領後6週間のうちに、身に寸鉄を
帯びない中国人民と武器を捨てた兵士で虐殺
された者の数は30万以上に達した』

更に中国歴史の教師用指導書の記述には

『南京大虐殺については血に満ちた事実
より、日本帝国主義の中国侵略戦争の残虐性
と野蛮性を暴露せよ。教師は授業の中で特に
小文字の記述での日本軍の残虐行為の部分
生徒に真剣に読ませて日本帝国主義への深い
恨みと激しい怒りを生徒の胸に刻ませよう』

教科書の本文に続いて小文字で具体的な虐
殺の描写をしているが、南京虐殺を教える狙
いは、日本に対する深い恨みと激しい怒りを
生徒達の心に叩きこむことにあるのであって
事実はその目的のために書き変えられ、歪曲
されたといえる。

以上、中国の歴史教科書を検証してみると
戦後の日本については何も教えていないとい
う重要な問題がある。教科書の中の日本に関
する部分の記述の分量は他の事柄に比べて極
めて多量であるが、総て日本の侵略性や残虐
性の記述に終始し、戦後の平和日本、日中共
同宣言、日中平和条約の締結、日本からのO
DA等には何一つ触れていない。中国の教科
書では日本は1945年8月終戦の時点で消えてし
まっている。遺憾極まりない歴史教育である。

〔韓国編〕

一、教科書に於ける日本関連記述の特徴

(一) 自国を「文化的優越者」と位置づけ、日
本を蔑視する。

1、『百済は近肖古王の時、阿直岐と王仁
は日本へ渡り、漢文・論語・千字文を伝えて
あげ、武寧王の時に段陽爾と高安茂が漢学と
儒教を伝えてあげ、日本に政治思想と忠孝思
想を普及させてあげた。続いて聖王の時には
仏教を伝えてあげ、その他天文・地理・暦法
等の科学技術を伝えてあげた』

∴してあげる、∴させてあげる等の恩着せ
がましい表現が繰り返されている。

2、元寇の乱は日本征伐の戦。秀吉の朝鮮
出兵は壬辰倭乱と表記し、日本を倭と記す。

(二) 日本の行動は総て侵略なりとする。

1、秀吉は朝鮮を侵略した。

2、日清戦争後の日清講和条約により朝鮮
は完全に清との服属関係を絶ち独立すること
になったにも拘らず、日清戦争については、
『日本軍は∴清日戦争を起した。このように
日本軍の侵略行為が露骨化してくると∴』
3、『朝鮮開港後は日本の経済的政治的侵
略が続いた』との記述もある。

二、「天皇」には触れたくない教科書

朝鮮の歴代王朝が支那を宗主国として自ら
「華夷秩序」を受入れ支那王朝に対し属国関

係にあった事実を教科書では隠蔽している反面、日本に対しては依然「華夷」の意識を持ち続けているという異様な「小中華思想」を引きずっている記述がある。明治37年、明治維新後の最初の外交交渉についての記事である『明治維新を通じて新しい国家体制を整えた日本も修交通商を要求してきたが、その外交文書に日本国王が朝鮮国王を低く見る表現と従来外交慣習にはずれた内容があったため朝鮮政府はこれを拒否した』

この様に現行教科書に天皇を日本国王と記述しているのは、「皇」は中国皇帝以外には使えぬという小中華思想の表われである。

三、日韓併合以後の記述

日清・日露戦争より日韓併合に至る過程の教科書内容は、当時の国際情勢を殆ど抜きにして、唯々日本の侵略撃退、反日抵抗史観に基き記述されている。

(一)併合について

『露・日戦争で勝利した日本はわが国に対する侵略を本格的に推進した。わが国の外交権を奪い、ソウルに統監府を設置することを内容とする乙巳条約を強要したのである。この条約により日本は外交権を奪っただけでなく、統監府を設置してわが国の内政全般に干

渉しはじめた。高宗皇帝の拒否にかかわらず日本が乙巳条約を一方的に発表するや『略』乙巳条約は明治38年の第二次日韓協約であり保護条約といわれているもので、事実上この協約により韓国の外交権を日本の韓国統監に委譲したのであるが、韓国教科書は明治43年の最終的な併合条約によらずに、この協約により併合の不法且つ無効を教えている。

(二)統治時代

明治43年の併合を経て日本統治の時代になると、日帝支配＝悪という大前提のもと日本憎しの感情をむき出しにして執拗に日本の悪口を書き連ねている。主な項目別については紙数の関係上教科書の記述のみを紹介する。

1、土地収奪

『植民地支配下で韓民族は日帝の経済的収奪にひどい苦痛を受けた。このうち最も大きい被害は土地を略奪されたことである。これによって、朝鮮後期以来持続してきた慣習上の耕作権や開墾権など、農民たちが主にもっていた各種の権利は徹底的に否定された』

2、産業侵奪

『日帝の産業侵奪政策によりわが民族の経済活動はひどく萎えしぼみ、民族産業の発展はおさえられた』

3、食糧収奪

『しかし日帝は、米が目標通り増産できないにもかかわらず、増産量よりもはるかに多い量を日本に持ち出した。これによりわれわれの食糧事情は極度に悪化した』

4、韓国語使用禁止

『韓国語の使用を禁じて日本語だけを使うようにし：』

5、創氏改名

『日帝はわれわれの名前までも日本式に変えるいわゆる創氏改名を強要し：』

6、人的資源の収奪

『日帝は女性たちも勤労報国隊、女子勤労挺身隊などの名前で引っぱっていき、労働力を搾取した。とりわけ多数の女性を強制的に動員して、日本軍が駐屯するアジア各地に送り軍隊慰安婦にして非人間的な生活を強要した』
以上全般を通じて韓国歴史教科書を支えている歴史観について、韓国の女性評論家呉善花氏は次の様に論評している。

「『韓民族は絶対的に善であり、その繁栄を冒す者は悪である。韓民族は善なるが故に数々の受難が続いたが、決してめげることなく常にその悔しい思いをバネに未来を切り開いてきた』という観点を持つ韓国歴史教科書

は、生徒達に被害者根性を根付かせ、弱者の反感を強固に保持させることになってしまった」と。將に同感である。

最後に文部科学省の教科書検定について物申す。

昭和57年の教科書検定誤報事件に端を發した「近隣諸国条項」が教科書検定基準に採り入れられてより、文科省の教科書調査官達は「やる氣」を無くしてしまったという話を聞く。とんでもない事だ。その様な弱気なことかどうか。どうするか。「近隣諸国条項」の後遺症の如き歪んだ歴史観の呪縛から速やかに脱出せよ。前述のような中韓歴史教科書の実体を調査官達は当然承知していると思う。反日イデオロギーが生み出した虚偽の事柄を、事実なりとした記述ばかりである。その様な内容に迎合するような日本の教科書の記述、日本人の誇りを失わせるような記述は断乎として改めさせよ。他国との安易な歴史認識の共有などにはあり得ない。「歴史とは何か」の本義に立ち還り、我は日本の検定調査官なり、自国の正史を回復するのはわれわれであるのだという強固な信念を持って検定を行うことを切に望むものである。

中韓雜記

戦前我が国が中国の近代化に寄与したことは、各分野に亘り大きなものがあるが、ここでは清国及び中華民國の軍の幹部養成に如何に寄与したかの一断面として、陸軍士官学校の中国留学生数を拾ってみよう。

第一期清国留学生四〇名明治三三年入校。以下卒業年と人数だけをあげる。三四年三五名。三五年二五名。三七年九三名。四一年三二八名。四三年五二名。四四年五四名。この年清国革命の為留学生隊廢止
大正三年支那学生隊設置

三年四名。五年一九名。八年二〇名。九一四年記録不備にて不明

一五年四名。昭和二年八名。三年二一名。四年二二八名。五年八五名。六年二一八名。七年一五名。八年九名。九年一九名。一〇年一六名。一一年二二名。

支那事變勃発により中華民國留学打切り。在校中の者も帰国。

清国時代陸士に派遣された留学生は四五〇名に達した。それらの者は先ず成城学校や振武学校の留学部に入り、日本語を学んだ。辛亥革命はこれらの者が中核となって成し遂げた。

朝鮮は三韓の時代から隋唐など中華帝国の属国だった。朝貢冊封国、即ち貢ぎ物を奉り国王の印爾をうけた。第一、独立国としての年号もなく、中華帝国の年号を使っていた。

日清戦争は朝鮮の内紛に乗じ清国が軍隊を派遣して常駐させたのが発端だった。国都に清国軍が常駐するのは、宗主国の清国も朝鮮も当然のこととしていた。しかし日本としては、当時眠れる獅子と言われた清国に、朝鮮半島に蟠据されては、国の存立に係ることなので、外交交渉では埒が明かす戦鬪となった。明治二十七八年戦役は我が国の勝利に帰し、下関条約では第一条に朝鮮の独立を謳っている。

清国が手を引き朝鮮は一応独立国となり大韓帝国と国名を改め高宗も皇帝を名乗ったが国内の統治能力はなく、財政は破綻状態で、独立国としての態をなしていなかった。これを救う途は日韓併合以外にはないと、韓国内の識者も覚るに至り、明治四十三年それが実現した。このことについて欧米列強も何一つ異義をとらえなかった。

日本の統治下になってから、産業の開発、交通の整備、教育の普及など目覚ましい進展をみて、近代国家の態勢を整えるに至った。

日本人よ気骨を持って

会員 吉田 昇一

明治の先人は臥薪嘗胆を合言葉とし日露戦争に臨んだではないか。

我が国は日清戦争に勝利し、遼東半島、台湾、澎湖諸島の割譲を得た。講和条約を締結したのは明治二十八年四月十七日であるが、それから六日後の二十三日に、露・独・仏の三国は連合して遼東半島の日本領有は東洋平和の障害となると、清国への還付を要求してきた。所謂三国干渉である。到底三強国を相手に戦う国力はないので、涙を飲んで三国の言分にしたがった。国民は政府の弱腰に激昂し、国論は沸騰したが、やがて止む無しと悟り「臥薪嘗胆」の合言葉のもとに、国力を養い軍備を充実し、十年後にはロシアに打ち勝った。

今次大戦の前にはABC包囲陣にて我が国を苦しめ、石油入手の途を閉ざし、最後は降伏を迫るに等しいハルノート突き付けられた。これに対する国民の怒りは、開戦の捷報に接したときの国民の気持を見ればわかる。長い間の鬱憤が晴れた思いだった。

嘗ての日本人は国の為憤慨し、国を思い安

堵したり常に祖国に対する思いがあった。それが戦後は個人的安泰を求め、或いは安易に平和を求める念ばかりで、祖国を思い悲憤慷慨するような気風は消え失せてしまった。

広島が原爆が投下されたのは八月六日で、毎年この日に慰霊の行事が催されている。核兵器反対の叫びは結構だが、原爆によって一瞬に七万八千人の命が奪われた。そのことに對する非難は聞こえない。第一誰の企画か知らないが、原爆の碑に「安らかに眠って下さい過ちは繰返しませんから」と刻んであるが、アメリカ人が建てたならば道理に適っているが、日本人が何の過ちを犯したのか。



9月11日は五年前、アメリカではテロリストに乗取られた大型旅客機が、ニューヨークの世界貿易センタービルに突入し、三千人の犠牲者が出る大事件があった。五周年のこの日全米各地で追悼式典が行われた。

アメリカ国民は唯追悼するだけではない。

テロとの戦う精神をますます高揚しているのだ。これについて思うことは、広島が原爆の被害はこんなものではない。核兵器廃絶を叫ぶだけでよいのか、日本人として怒りをどこに向けたらよいのか。東京裁判は敗者だけが裁かれ、原爆を投下したのは不問に付せられたことに對する怒りはないのか。そこまで歴史に書き残さねばならない。

日本はポツダム宣言を受け入れて矛を収めた。ポツダム宣言は日本に科すべき条項が示してあるが、よく読むと連合国の負うべき事も載っている。それは第九条にある。

日本国の軍隊は完全に武装解除されたあと、それぞれの故郷に戻って平和で生産的な生活を営む機会を得ることを許さる

とあるが外地にある日本兵が故郷に戻る為には連合国が輸送してやらなければならないのだが、ソ連はどうしたか。六十万もの人間をシベリヤに連れ去り、労役に使い長きは十一年も拘束酷使し、六万も死なせたではないか。戦争に負けたのだから致し方ないなどと考えず、もっと怒らねばならぬ。ソ連、今のロシアに對し補償を求めなければならぬ。現在の政治家にそれだけの気骨はないのか。

気骨を失った国に未来はない。

母子像に見る戦後六十余年の落差

会員 大和瀬 克司

最近年の故か、道を歩いている親子連れに出会おうと、妙に気になることが多い。赤子は母親に抱かれている時の顔が、何とも言えず美しく安心しきっているその姿が、当方の心を和ませてくれる。この延長が、戦場で生命を失う時、咄嗟に出る「お母さん」の呼び声なのであろう。親子の情の究極の叫びが、最も身近に接した肉親の情の現われであるとすれば、誰がその非をそしり得よう。

このように、肉親の情ほど深く強いきずなは無いと信ずるものであるが、最近のニュースによれば、肉親の殺し合い、幼い子供に対する暴行、果ては殺傷沙汰が後を絶たない。甚しきは母親による我が子の殺傷事まで起きている。それが強度のしつけのためや、子が自分の邪魔になったからと言う平易な理由で、親に頼ろうとする子供の命を奪う。全く以って魔界の王の指令下に地球人類殲滅に向かつて動き出した状況下にあるようにも思える。私には実に理解し難い社会現象である。

しかし乍ら、これは起こり得るべくして起きた現象であると思う。その原因は戦後の

「いえ」の崩壊である。日本国民の誇るべき特徴を一口に言えば、それぞれが「いえ」と

言う概念で生活し、「いえ」は一種の運命共同体であり、代々続いた歴史的運命体とも言うべきものであった。そこには、長老たる老人が居て、大なり小なりの生活上の規範があり、同時に家族なりの決まり、生活上の役割があり、それ等を守ることには貧富の差はあっても、「いえ」が在る故に秩序が保たれ、安心して生活を営んでいたのである。「いえ」が生活秩序の原点であり、教育の基本の場であった。うそをつかない、勤勉、礼儀止しき、つつましき、年長者を敬う、お互い同士助け合う等の基本は、「いえ」の生活の場から自然に身につけていったものと思う。

然らば、この「いえ」の良風が如何にして消え去ったのであろうか。最大の原因は彼の憲法改悪の罪に他ならぬ。日本古来の国柄にあてはまらぬ、未熟な個人の尊厳と自由独立を強要したからに他ならぬ。憲法起案のGHQの役人ならば当然のことであろうが、「いえ」を以って社会構成の単位としてきた国柄に、強制的に個を以って国家構成の単位と考えた。個の理念を持ち込むことは余りにも唐突であった。たとえ自国で成功したにせよ、

二千年余りの社会制度を一朝にして覆すことは必ず弊害を伴うものである。

「いえ」の崩壊が急速に進んだのは、戦後の産業構造上の世界的変化によることも大であったろう。第一次産業より急速な第二次産業への転換、且つ第一次産業の大規模機械化産業化、第三次産業の意外なまでの大発展等による若い労働力の大都市集中化、生産工程での自動化、ロボット化による直接生産工程労働者の減少、第三次産業の発展に伴う労働者の必要性と適正者のバランスの破綻、一攫千金を目論む投機的産業の横行等々。その原因は多岐に亘るものがあるが、このような時勢に向かった主因は、戦後のGHQの強引な日本の国柄を無視した行政とも言える。勝者絶対の占領行政が、占領期間中のみならずその後も残渣を残して行われ、政府要人はこれに唯々諾々として従ったことによらう。斯くて戦後六十余年、余りに大きな落差を生ずるに至ったものと思われる。

然しながら、七十年足らずは未だほんの一時に過ぎず。世界の歴史は少なくとも五百年を待つて視るべし。されど今にして落差を縮むべき運動を起こさねば、その差はますます大となり遂には、回復し得ないこととならう。

為すべきこと多く、順位付けも至難の業である。然し乍ら、温故知新の諺にある如く、今一度じっくりと米軍政によって捨て去ったものを、日本の国柄によって取捨選別をなすべきである。捨て去ったものに取り上げるべきものは無いのか、日本国の国柄に反するものは無いのか、若しありとすれば、これを取り戻すのが眞先に為すべきことではなからうか。そこには東京裁判史観も、軍政下に定められた憲法を始め、種々の制度、法律に対する唯一の判断基準は、眞の日本らしいものは何かを探り、これのみを残して他を捨つるの大勇断が必要であらう。このためには、身を捨て顧みない強い意志を持ち、強力な統率力を持ち、正確な判断力とを持った大政治家が必要であらう。靖国参拝にオロオロするが如き輩にあつては出来ない。

かつて、東洋の君子国として諸外国に敬意を払われたる気骨、今いづくにありや。往時大國隋との外交交渉において、日出ずる所の天子と称した気概は喪失したのか。もとより、誤った八紘一字ではなく、武力を以って世界に覇を称えるのではなく、日本人であることを誇りと思える国となつてもらいたいと念ずるのである。それには僅か六十余年にして、

道徳の退廢のすさまじさを眺め、このよつて来るところは何処か、将又その進行を止めるのは、如何にすべきかを愚考し、甚だお粗末な私見を述べたままで、賢明なる諸兄の卓見をお聞かせ願いたい。

古典詩に見る母子の情

遊子吟

中唐 孟郊

慈母 手中の線

遊子 身上の衣

行に臨んで密密に縫う

意は恐る遅遅として帰らんことを

誰か言う 寸草の心

三春の暉に報じ得んと

母が手で縫う針糸は

旅に出て行く子の着物

一針一針縫いながら

帰りが遅くならぬかと

胸を痛める母心

草一寸の心もて

春日の母に報いよと

寸草の心 子の心

三春の暉(かがやき) 春の日差しのように

な暖かい母の心

反面教師の意味で次の詩を掲げる

曹植は曹操の子で文才に長け、父曹操から囑望されたが、曹操の没後兄文帝から疎んぜられ「七歩のうち詩を作れ、出来なければ法によって処分する」と言われ、次の詩を作った。

七歩の詩

魏 曹植

豆を煮て持つて羹と作し

鼓を漉して以つて汁と為す

萁は釜の下に在りて燃え

豆は釜の中に在りて泣く

本は是れ根を同じくして生じたるに

相煎ること何ぞ太だしく急なるか

豆を煮て豆乳を作り、醗酵させ漉して吸物

を作る

まめがら釜の下あつて燃え

豆は釜の中にあつて泣く

もとは豆も豆殻も同じ根から育つたもので

はありませんか

どうしてそんなにひどいことをするのですか

靖國神社みたま祭献納の女性名の大提灯を見て思うこと

会員 板橋 勝

七月十五日、仙台から出向いて参拝した。大鳥居をくぐり境内に入ると、両側に個人献納の大提灯がピッシリと並んでいる。見れば女性の名前が多い。御祭神の妻か母親であらう。永代献灯料を納めれば永久に掲載されるので、現在御存命かどうか知らない。母なる人は既に故人になられたであろう。妻なる人も現存者は少ないと思う。遺族会の資料によれば昭和二十八年恩給法が改正された時、妻なる遺族は百五十二万人だったが、現在はおよそ十八万人だという。

女性名の大提灯を見ると、その陰にある献納者の心情に胸迫るものがある。帰宅してから感懐さめやらぬうちに、あの歌の書物から戦死者の妻の歌を拾って見た以下「和歌に見る日本人の心」の該当部分を転載する。

この果てに君ある如く思はれて
春の渚にしばしたたずむ



凡そ今次大戦における戦没者の圧倒的多数が、日本列島から見れば海の向こうである遠い島々の戦場で、或いは正にその海の中で命を落としたのですから、思へば日本人にとつて海というものの特別な意味が今あらためて脳裏に湧き出てくる、そんな感慨をさそう悲しくも美しい絶唱であります。

この人々の胸の思いを一杯にしているのがとり返すすべなき亡き夫を恋ふる未練である

こと、その短く薄かった生の絆への嘆きと恨みの情である。この妻達のことばの切なさに、読む人は唯々同情を以て対するより他ありません。

亡き夫の恋ほしくなりて涙出づ

花梨の實黄色になりし畑に

やうやくに堪えしなみだのあふれ来て

今またたかば落ちなんとする

カビエングの椰子の葉陰も歩しか

遺品の靴ゆこぼれ落つる砂

その骨は拾うすべなしシツタン河の

砂一握を骨とするてふ

カビエングはラバウル基地の北隣の島ニュー

アイランド島北端の海岸で激戦地。シツタ

ン河はビルマの激戦地です。

行きずりの人の面影にかよへれば

せつなさまでに君よみがえる

咳せきのあまりに似たりしばらくは

顧みたちぬ師走の街に

といった経験は少なからぬ妻達に生じたこと

と思われます。

清らかに孤独を守りてあり経るふに

よしなき言のきこゆるあはれ

事あれと構まえるる眼まなこよ寡婦といふ

名ゆゑの位置のきびしかりけり

といった辛い経験を嘗めなければならなかった例も生じたことと思われれます。何しろ残された妻達は多くはまだ若く、出征前の夫と過した結婚生活も極めて短かった場合が多かったと思われれます。その短かった幸の日々を偲び嘆きの情も多くの佳作を生んでいます。

妻となり君に仕へし我の日の
短かかりしよ今に思へば

帰る日までこの家に居よと直ぐ帰る

如くに言ひて征きし君はも

淡かりし縁の亡夫を懐う日に

わが引く草のどれも實をもつ

吾子が名を呼ばはり給う御声さへ

聞ゆる如し夫生れし家

恋といふめでたきものを知らしめて

すなはち君を召し給ひけり

(すなはちとは忽ちという意味)

戦後非力な女一人で生きてゆくのは実に辛いことであつたでしょうが、それでも亡夫の忘れ形見が残されていた場合は、妻達の生甲斐としてどんなにか支えになったであろうと思われれます。

野あそびにほうけし吾子がねすがたの

かなしきばかり君にかも肖る

くづ折れむ心いたはり寝る夜さの

かひなに痛き児の重さはも

やすらなる吾子の寝顔は亡夫に似て

ながきまつげのかけ落し居り

父なくて生ひゆく吾子と思ひつつ

髪を切りやる項のいとしさ

この書物には戦死者の母や妹の歌は見えないので別の書物から、ある特攻隊員の母

はるばると来し方願れば天かけし

白マフラーの子の笑顔顔つ

これも特攻隊員、妹は詠う

靖國の社に向かひ合掌す

レイテの島に散りし兄見ゆ

女性名の大提灯に触発されて妻や母妹の歌

を拾ってみたが、最後に一首、

かくばかりみにくき國となりたれば

奉げし人のただに惜しまる

みにくき國の最たるものは、この御社に

総理大臣が参拝するのをやめろという外道

が、政界財界におるといふことだ。



挺進第三聯隊戦死者の妻の歌

田中賢一記

天川忠夫准尉妻真理子

東の空が白む頃、こんもりと木々にかこまれた社にぬかづいて夫の無事を祈りつつけていた私だった。

さらばとて夫の握れるたくましさ

み手のぬくもり今も残れる

このぬくもりの残れる手は、夫との再会の日まで慣れぬ農仕事に苦勞しつづけた手だ。

ふしくれだった指、じっと見つめていると

いとおしさに涙のあとさえ見えそうな手だ。

なおも見つづけていると、何もかも夢みたい

に過ぎ去ってしまった気がする。

我が心うつるなる時在りし日の

夫を偲びて心なごめり

夫の無事を祈りながら、苦勞もいとわず歩

み続け終戦を迎えたいけれど、夫はとうとう帰ってこなかった。

てこなかった。

梅野九少尉妻チヨ子

大学まで出してやらむと子には云ひ

我が身思へり弱き我が身を

父在さねば勤くあれよと子をさとし

おのれをさとす淋しくもあるか

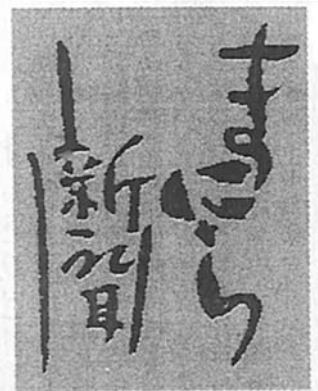
フィリピン慰霊巡拝旅行

当協会では、前年同様、平成18年10月25日(水)のフィリピン・ルソン地方パンパンガ州リリー・ヒル・マバラカットの飛行場跡地における神風特別攻撃隊初発進基地慰霊祭に参加し、その後引き続きフィリピン各地の慰霊碑巡拝を行うため、慰霊旅行の参加者を募集しましたところ、次の25名の方々のご参加を得、次頁記載の日程により慰霊巡拝旅行を催行いたしました。

- なお、マバラカットの慰霊祭については、現地の日刊「まにら新聞」が下段掲載のとおり報道しております。
- 菅原 道熙 (神奈川県・陸士61期)
 - 杉山 茂 (千葉県・防大4期)
 - 谷尾 侃 (東京都・陸士58期)
 - 横澤 照人 (神奈川県・海兵78期)
 - 深山 明敏 (東京都・防大1期)
 - 穴山 正 (東京都・乙飛24期)
 - 大津 幹雄 (千葉県・甲飛14期)
 - 奈倉 浩 (静岡県・少飛6期)
 - 鈴木 一則 (静岡県・特縦3期)
 - 石井 千春 (東京都)
 - 森 力夫 (神奈川県・幹候昭15)
 - 穴山 和幸 (東京都)
 - 大日向邦治 (長野県・甲飛9期)
 - 仲田 千穂 (大阪府)
 - 杉村 麻衣 (大阪府)

18年) 10月26日 (木曜日)

日刊



The Daily MANILA SHIMBUN

ASIAN INTERNATIONAL COMMUNITY INFORMATION, INC. (Printer-Distributor)

AICI, 4th Floor Montivar Building, 34 Jupiter corner Planet Streets, Bel-Air, Makati City
Tel. 897-5630 / 5632 / 5612
Fax. 897-5640

P60.00
Since 1992 in METRO MANILA
発行 **びすく社**
東京都世田谷区玉川2-9-15
© BYSCH 2006
<http://www.manila-shimbun.com>

戦没者慰霊祭開かれる 特攻隊初出撃から62年
太平洋戦争末期、ルソン地方パンパンガ州マバラカッター町から神風特別攻撃隊が初出撃してから六十二年目の二十五日午前、同州クラーク特別経済区の平和公園で戦没者

慰霊祭が開かれ、比人、日本人約百人が出席した。慰霊祭には特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会、僧侶、医療法人徳州会などの団体のほか、国歌伴奏のため比空軍のブラスバンド、近くのハドゥアンネグリト小学校児童らが

房具援助などに対する感謝の表明として参加するようになったという。児童らは一年生から六年生、そのほとんどがアエタ民族で、比日の国旗を手に観音像の前で日本人らと記念写真を撮り、口々に「楽しい」と話していた。

- 中矢 伸志 (奈良県)
- 白田 智子 (埼玉県・23振武隊長 井芳夫中佐次女)
- 廣島 文武 (東京都・第4御盾隊 廣島忠夫氏甲飛12期弟)
- 山口 武夫 (埼玉県・甲飛15期)
- 鳥山 隆 (奈良県・陸経6期)
- 廿日出昭信 (東京都・甲飛13期)
- 廿日出廣子 (東京都)
- 宮地 正美 (東京都)
- 板津 忠正 (愛知県・航養14期)
- 岸 由夫 (神奈川県・航養14期)

参加した。引率した女性教師フエー・トレンティノさん(38)によると、児童たちの慰霊祭参加は今年で三年目。日系企業からの文

徳之島に不時着、海軍に救出されたという。また、

観音像前で比日の国旗を振る児童ら＝クラーク特別経済区で25日午前8時ごろ写す



メンバーの一人、元海軍の男性(81)は、「日本軍は飛行機も不足しており、戦力はなかった。特攻は最終手段だった」と同作戦で戦友を失った悲しみを表した。同慰霊祭はマバラカッター町が比日の各団体、機関と協力して一九九八年から毎年十月二十五日に行われている。

日程表

日付	場 所	交通機関	時 間	行 程	食 事
10/24 (火) A班 B班	成 田 発 マニラ 着	PR-431	09 : 30 12 : 40	フィリピン航空にて空路マニラへ マニラ到着・通関後、バスにてクラークへ (途中、在日本大使館表敬訪問) <A班・B班合同> <div style="text-align: right;">クラーク泊</div>	朝：－ 昼：機 内 夕：ホテル
10/25 (水) A班 B班	ホテル 発 マニラ 着		06 : 30 17 : 00	クラーク (リリーヒル) の慰霊祭 西・東飛行場の慰霊碑参拝 1 航艦司令部の住居、関大尉以下の宿舎で あった住宅見学 大西軍司令部跡 (大西神社) MR.ディソン氏宅表敬訪問 <A班・B班合同夕食懇親会> <div style="text-align: right;">マニラ泊</div>	朝：ホテル 昼：市 内 夕：市 内
10/26 (木) A班 B班	ホテル 発 マニラ 発 マニラ 着		07 : 15 08 : 00 15 : 30	終日 コレヒドール島巡拝 <A班・B班合同> マニラ市内、教会・リサール公園・サンチャ ゴ要塞の戦跡視察 <div style="text-align: right;">マニラ泊</div>	朝：ホテル 昼：島 内 夕：市 内
10/27 (金) A班	マニラ 発 成 田 着	PR-432	14 : 50 20 : 10	モンテンプルパ参拝 参拝後、マニラ空港へ フィリピン航空にて帰国の途へ 到着通関後、解散。お疲れ様でした。	朝：ホテル 昼：－ 夕：機 内
B班	マニラ 発 セ ブ 着	PR-857	13 : 00 14 : 15	モンテンプルパ参拝 参拝後、マニラ空港へ 国内線にてセブ島へ セブ島慰霊巡拝 (病院跡・セブ観音) <div style="text-align: right;">セブ泊</div>	朝：ホテル 昼：弁 当 夕：市 内
10/28 (土) B班	セブ オルモック	高速船	06 : 00 08 : 00	早朝…セブ港へ 高速船にてレイテ島オルモックへ レイテ島慰霊巡拝<オルモックーリモン ダガミーブラウエンードラグータクロバン> <div style="text-align: right;">タクロバン泊</div>	朝：ホテル 昼：市 内 夕：市 内
10/29 (日) B班	タクロバン発 マニラ 着 マニラ 発 成 田 着	PR-192 PR-432	08 : 00 09 : 10 14 : 50 20 : 10	国内線にてマニラへ マニラ到着後 乗り継ぎ フィリピン航空にて帰国の途へ 到着通関後、解散。お疲れ様でした。	朝：ホテル 昼：－ 夕：機 内

比島慰靈旅行報告

菅原 道熙

今年も昨年と全く同一の期日・行程

で比島慰靈旅行を実施いたしました。昨年とほとんど変わらない25名の参加者があり、大半は高齢者でありましたが、全員恙なく帰国出来ましたことは、誠に嬉しく英霊の御加護の賜と、心から感謝申し上げます。

慰靈旅行の主眼である東マバラカット飛行場跡の神風特攻隊の碑については、本紙66号別冊の冒頭に詳述しておりますので、改めて繰り返して頂きたくお願い申し上げます。

今回の旅行で昨年と異なった2点について御報告いたします。一つは、杉山藩理事(元統幕議長・空幕長、防大4期)が副団長として参加されました。山崎隆一郎在比特命全権大使は、以前杉山理事が統幕議長時代に、外務省から防衛庁に出向しておられた関係もあって、大使を表敬訪問することになりました。

駐在武官の安永幸生一等空佐が空港に迎え下り、マニラ市内の高級住宅街に在る大使公邸に直行。15時頃に到着しました。大使自らのお出迎えに恐縮しつつ広間に着席。昨年の行われ

た、日比国交修復50年記念式典のビデオで、フィリピン共和国の現状について詳しいお話を承り、次いで、安永一佐から比国軍の現況を同じくビデオで説明して頂きました。

その間に、茶菓のおもてなしを受けて、一同早朝からの疲れを癒すことが出来ました。杉山副団長が持参された零戦のプラモデルを贈呈して、広間前庭で全員の記念撮影の後、公邸を後にして一路当時の宿泊地クラークへ向かいました。

次は、板津忠正氏(会員、初代知覧特攻平和会館館長)が、一応整備された現地を再訪したいと参加され、その際、氏を中心人物とした写真集『特攻花』を最近上梓した、七彩工房代表の中矢伸志氏、担当したカメラウーマンの仲田千穂さんと新人の杉村麻衣さんが、板津氏の薦めで参加されました。全く予期しなかったことで、大変驚き、かつ、嬉しく思った次第であります。

100%現地での人の努力で碑が建てられ、その上、毎年10月25日に慰靈祭が催行されている事に対しては、我々日本人は心からの謝意を表されなければなりません。しかしながら、この事が未だ広く我が国に周知されていないことは極めて遺憾なことであります。

参加された2人の女性カメラマンは、

若い眼でどの様に感じ取られたのか、19歳で『特攻花』を知って喜界島に通い続けた仲田さん、杉村さんが加わって、マバラカットを世に問うことに繋がることを期待する次第であります。

平成12年以来、南九州・比島・沖縄・台湾・宮古島・石垣島、更に比島と続けられて来た、特攻発進基地慰靈巡拝旅行は、今回をもって終わります。

若い会員が増えた暁には、再びこのような慰靈旅行が企画されることを、念じて止まない次第であります。



山崎大使表敬訪問記念写真・中央が山崎大使

注 『特攻花』制作 (株)七彩工房

取材・デザイン 仲田千穂

発行者 中矢伸志

発売元 (株)七彩工房

〒542-0082 大阪市中央区島之内

TEL 〇六一六二五一一〇七三一一

FAX 〇六一六二五一一六五六六一

メール: 731@nanasai.jp

ホームページ: http://www.nanasai.jp



リリーヒル観音像前で、中央菅原団長の右マリノ・P・モラレスマバラカット市長



東マバラカット飛行場跡慰靈碑前で出迎えた地元小学生の一行

フィリピン慰霊行

横澤 照人

15年ぶりにマニラ国際空港に降り立った。空港の建物はパイプとプラスチックガラスですっかり近代的建物に変身していた。日本大使館付武官の出迎えを受けてようやくバスに乗ったのは1時間半後であった。

この度、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が行ったフィリピンのマバラカトほかの慰霊旅行会は、総勢25名で、参加者は、菅原道熙協会理事長（陸士61期）を団長に、ジェット戦闘機操縦4000時間を誇る杉山蕃元統合幕僚会議議長（防大4期生）が副団長となり、知覧特攻平和会館の板津忠正元館長外、91歳の長老から19歳の写真家の卵のお嬢さんまで多士済々の顔ぶれである。

空港から大使公邸に直行した。山崎隆一郎大使は、杉山副団長が統幕議長時代に外務省から防衛庁に出向していた関係から表敬訪問することになった。茶菓のお相伴に与り、大使からこの国の大要についてレクチャーを受けた。

その後の安永幸生武官の話で、フィリピンの年間軍事予算は日本の1週間分位、つまり50分の1と聞いた。国内の諸事情からスービック海軍基地やク

ラーク空軍基地を返還させたフィリピンは、自国の防衛をどう考えているのか。アメリカはフィリピンに投資をしているので、いざとなれば助けると期待しているとすれば、大きな過ちと思う。基地を貸さない、経済的にも大して魅力のない国に、アメリカが血を流して本気で守るかは疑問だ。南沙諸島で問題を抱える隣の中国とどのように対応するつもりか、それともまた、この国は、東に代わり西方の抑圧者を平和裏に迎え入れるのであろうか。

公邸を辞し、17時頃クラーク特区内のホテルに着き、成田集合朝7時からの長い1日が終わる。

翌朝7時に、バスは両国の国旗を打ち振って我々を歓迎する20人ほどの小学生を迎えられて、元クラーク基地内のリリーヒルの前で降りた。その奥の「観音像」は、数年前に鹿児島市にある最福寺住職の池口恵観師が浄財を集めて寄進したものである。そして、この敷地の管理はマバラカト市が行っていると聞いた。

日本側の参列者は、特攻協会と徳州会合わせて約60名である。

式は午前7時5分両国国家斉唱で始まり、花輪を観音像に捧げ、マバラカト

ト・クラーク両市長の挨拶があり、午前7時25分、関大尉が東マバラカト飛行場発進の時刻に合わせて、地元高校生のブラスバンドにより「海行かば」が演奏された。異国の慰霊碑の前で聞くこの曲は、負け戦に無念の思いを残して亡くなった霊をそこに迎え、魂が身近に漂うのを感じて、心に染み入り、涙を抑えるのが精一杯であった。

敷島、朝日、山櫻特攻隊が待機し飛び立った、西と東の飛行場跡の碑に詣でた。こちら一帯は平らだから、特攻隊員が母の横顔に似ているとして目印としたアラヤット山は何処からでも見える。

今は市中になった東飛行場跡の慰霊碑は、始めダニエル・H・テイソン氏の手がけたが、一九九三年のピナツボ山の噴火により火山灰で3メートル下に埋まってしまった。そのあとマバラカト市のヒルベロ観光局長などの尽力と日本側関係者の協力により特攻神社として再生し、今はコンクリート製の横長の大鳥居が建っていた。正面に安置された立派な特攻隊員像の前で、会員は般若心経と特攻平和観音経を唱えつつ遂次焼香供養した。

201空司令部跡の個人の住宅に立ち寄り、次いで火山灰に埋もれた第一次碑建立の中心人物デイソン氏宅を表敬訪

問した。

我々が到着すると、軍歌が流され、冷たい飲み物が振舞われた。特攻関連資料が展示されている一室を見学した。大柄で物静かなテイソン氏に名刺を頂いて辞した。その名刺にある三つの国旗の左がフィリピン、右は米国そして中央が日章旗である。異国の方がこれほど大事にして下さる日章旗を粗末にしては罰が当たると。

コレヒドール、マニラ、モンテルパニラ湾を扼する、西を頭にしたお玉じゃくし形の小島は、先ずスペインが船の検問所と灯台を設け、その後アメリカは30年がかりで堅固な要塞を構築した。

日本軍はバターン半島攻略後、この島に上陸して、1日でウェンライト中將は無条件降伏した。その時の米比両軍の投降兵は1万人は下らないという。その3年後、レイテが落ち、マニラが解放された後、板垣大佐以下6千名で守備する日本軍は、3200トンの砲撃に耐え、米軍上陸後半月間持ちこたえた。最後はマリントネル内の爆発で40名が玉砕した。捕虜となつたのはわずかに20名である。

マニラの棧橋から高速艇に乗り70分で南ドックに着く。日本庭園で麗しい

慈母観音に焼香して、南シナ海に向かい「海行かば」を斉唱する。

ハーン砲台とギャリー砲列では、12インチ(30センチ)砲の太さと長さに驚く。これが地下から出たり入ったりして9000メートルも砲弾を飛ばしてバターンの日本軍を悩ませたというが、このような要塞は巨艦と同じく空からの爆撃には敵わない時世になっていた。日本は飛行機を10倍つくり、搭乗員を10倍養成し、戦艦大和、武蔵の代わりに制式空母を10隻も造っていたらと思わないではないが、国の総合力が敵わないのだから、あれこれ考えてもしょせんごまめの歯軋りに過ぎない。次ぎはマッカーサー将軍が、日本軍上陸50日前という随分と前に魚雷艇で逃げ出した北ドック付近に行った。レイテ湾では、上陸する彼の大きな金ぴかの銅像があるのに、背を向けて逃げた将軍の後ろ姿の像がないのは、片手落ちだ。

昼食後、日本軍の砲爆撃で柱と壁を残した米軍兵舎跡と米政府が建てた戦争(勝)記念館見物後、マリントネルに入る。日本軍の勝ち、負けの戦の様子をやや公平に扱っていたが、このトンネルの中で、400名の兵士が爆死したことを思うと、一緒に見学した現地の中学生のように平静に見てはおれ

なかった。

マニラに帰って、夕方市内の一部を見物する。中心にあるマニラ大聖堂は、戦争で破壊されあと、クリスチャンの神奈川県の内山岩太郎知事がセメント6万袋を贈って再建し、市民に感謝された。それ以後、日本たたきは沈静化したとガイドの鈴木さんが強調していた。その頃までの政治家には、密かに徳を積む偉い人がいたのだ。

翌朝、高速道路で、モンテンルパに行く。ここは今でも刑務所になっている。その一角の1ヘクタールの土地が墓地跡である。35年前は、随分と田舎の道端に、運つたなく処刑された14の



モンテンルパで刑死された方々の墓石が集められている

粗末な墓があったように記憶していたが、今は近くまで家並みが押し寄せて、敷地内も手入れされていた。慈母観音像の前で全員が焼香し、備え付けの平和の鐘をたたいた。どなたの寄進か知らないが、敷地内にひっそりと佇む宝篋印塔(鎌倉時代の塔)が印象に残った。墓守の老父はマハトマ・ガンジーのような良い顔をしていた。

セブ島

モンテンルパ慰霊後、帰国組と、14名のセブ・レイテ慰霊組に分かれた。我々は国内便で、セブ市の東海上のマクタン島で降りる。

マジランは、なかなか服従しないこの地方を鎮圧するために出陣したところ、反対にこの酋長ラブラブに殺された。そして酋長はこの地方の英雄になった。今のマクタンは工業団地化が進み、ビザヤ地方の経済発展の先頭に立つに至ったのは、勇士ラブラブの覇気を継承したのだから。

セブ市もえらいスピードで開発中で、ほこりっぽい港湾埋め立て地を通して市中心部に入る。

35年前のセブは、空港から市内に入るまでの道端に、ポツポツと建てていた掘建て小屋の軒先に特産のギターがぶら下がっていた。天井に扇風機が廻

るホテルも、長雨でぬかるんだゴルフ場もガラガラ、古いサン・ペトロ砦とマジランが持ってきたという十字架と幼いキリスト像の教会、青い海と白い砂が売り物の鄙びたりゾート地だったセブは、今は活気に満ちた大都市にすっかり変貌していた。

コロン通りのロータリー近くにある旧南方病院跡の看護婦さん方の慰霊碑に参拝し、マルコポーロ・プラザホテルの前にある『海軍部隊遺族戦友、陸軍落下傘有志』が寄進した美顔のセブ観音に手を合わせる。敷地内の樹木は手入れがなされ、掃除もされていたが、やぶ蚊に襲いかかられて払う手を休める間もない。ルソンでもレイテの山中でもほとんど蚊にあわなかったが、セブ蚊は特別だ。

レイテ島

特級のホテルライフを楽んむどころか、朝食もとらずにセブ港から高速船に乗り込む。オルモック入港30分前に船尾のデッキに出て、海上慰霊祭を行う。この付近の海で沈み、遺体も揚がらない何千という将兵の御霊の昇天を願って投花し、黙祷と「海行かば」を捧げる。航行2時間で下船する。

レイテ戦最後の市街戦が行われたオルモック市内を通過する途中に、個人

の所有だが、戦争の記念として残している弾痕の跡も生々しいブロックハウスがある。この付近の地下に潜んでいた日本兵は投降に応じないので米軍は地下を砂と水で埋めたという。かくしてレイテ最後の市街戦は終わった。

東海岸に上陸した10万の米軍を迎え撃つために、徒歩で北上した増援の玉連隊と同じ道を、バスはリモン峠を目指す。

激戦地リモンはそう険しい峠ではない。峠を守る立石大隊3千は、砲を列ねた2千の米軍に押されながらもよく持ちこたえた。同じく五七連隊はリモンの東南3キロにあるヤヒロ山で57日間奮戦している。

道路から10メートル位登ったところに木柵で囲われた慰霊碑があった。見物の子供達を従えて、祭事を始めようとすると、老婆が来て錆付いた柵の鍵を開けてくれた。

共に女性で、人を慈しむ母であることは同じだ。我々仏教徒はあまり違和感なくそれを受け入れられるが、キリスト教などの一神教徒は多分拒絶反応が強く、頑なに拒否するであろう。

お賽銭は墓守の老婆への寄進となり、木柵の横に咲き乱れていた黄金鶏菊(特攻花)などの世話に使われるであろう。

この碑を覆う屋根の四本柱を固めるために、ガイドの鈴木道夫さんがセメントを寄贈したという。彼は、30年前に東芝をやめて、青年協力隊員としてフィリピンに派遣された。当時彼の専門は電子工学だから、引く手あまただったろう。現地的女性と結婚して二児をもうけた。いろいろの仕事を手がけたが、今は現地の旅行会社の契約社員で、特攻協会の慰霊巡拝には、以前から関係していた。

当地での大戦についての彼の豊富な知識と弁舌もさることながら、日本精神と英霊への思いは、その言葉の端はしから伝わってきた。そして比島中に何百とある日本将兵の碑が、訪れる人も少なく次第に打ち捨てられることには大変な危機感を持っていた。私も全く同感である。

本来なら碑を建てた人達―戦友や遺族や郷土の人達が撤収するのが筋だが、

老齢になり、資力も体力も結束もなくなつては、遠い異国で、碑が朽ち果てるのを待つことになる。

日本でも各寺に無縁仏があるが、少なくとも遺骨は寺が保管すると思う。このような状況では、碑の集約または撤収は日本政府にお願いしたいのだが、そうもいかないなら、戦没者慰霊碑撤収会をつくり、慰霊碑が現地の人迷惑にならないように、綺麗にして返還したいと思う。

パロの街外れにある三角山の頂上に十字架のある三十三連隊の激戦地を左に見て、タクロバンのレストランに入る。幼稚園のお祝い事であろうか、たくさんの子供と母親がいた。

ブラウエンでは、高千穂降下部隊と第16師団の慰霊碑に詣でた。昭和19年12月6日夜落下傘降下部隊と16師団地上部隊は一部連携出来たと言われている。

帰路訪れたマッカーサー上陸地点のレイテ湾は波静かな白砂の浜であった。レイテ戦で追いつめられた日本軍は、島の北東のカンギポット山を目指した。一部将兵は海路逃れたが、船のない兵はこの周辺に1万数千人ほどが集結し、終戦時まで抵抗した。しかし兵の多くは負傷と病氣と飢えで倒れて、この付近からの投降兵はほとんどいなかった

という。米軍とゲリラと飢えに追われる、敗残兵のすさまじい逃避行は、大岡昇平の小説『野火』に背筋も凍る壮絶な情景で描かれている。

レイテの戦没者は七万九千二百六十一名または六万一千二百三十名である。そしてフィリピン全土では四九万八千六百人が戦死している。

この地と海で戦い、草むす屍、水漬く屍となった大勢の将兵は安らかに昇天されて、慈母観音の慈愛の胸に抱かれることを、ひたすら祈る。

比島慰霊旅行に参加して

名倉 浩

今回の慰霊旅行に参加したことは、短期間ではありましたが、私にとって生涯忘れることの出来ない旅となりました。

詳細な計画と良いガイドに恵まれたことを感謝しております。ことに在日大使館を表敬訪問、山崎在フィリピン特命全権大使のお話をお聞きすることができましたことは特に感激致しました。さらに、クラーク・リリーヒル及び東マバラカット飛行場跡の第二次慰霊碑(神風神社)の慰霊祭には現地市長や住民更には小学生まで日比両国旗を持って式典に参加して下さったこと

は事のほか感激でありますと共に、特攻隊で亡くなられた勇士の名譽のためにもこの上ない喜びでした。

戦後六十一年が過ぎ、大戦に参加した人々も少なくなりました。私は現在

八十五歳になりましたが、昭和十三年十六歳で少年飛行兵として入隊、大戦で四年間各地で闘い、特にニューギニア戦線では度重なる爆撃の末、被弾不時着、生死の境をさ迷い、生き残った一人であります。同期生（少飛七期）と飛行第七戦隊の亡くなった同志には、今もって申し訳ない気持ちで一杯の日々を過ごしております。五百五十人の同期生のうち、戦死が半数、特攻隊で亡くなった方が二十人と聞いておりますが、昭和十九年十二月三十日ミンドロ島沖に突入した進襲隊の一人、同期の天地孝志隊員とは度々同乗飛行訓練をした仲でありました。十二月十四日、菊水隊でネグロス島に突入した

堂用 清、國広 望、十二月二十日、サンホセ周辺に突入した精華隊の久永博の諸氏もクラークのあの飛行場から飛立って行った同期生でした。また、二十年一月十二日富嶽隊四式重による特攻隊で散華された根本基夫大尉（陸士五十五期）はニューギニア戦線では飛行第七戦隊二中隊で度々爆撃行に同乗した上司でした。六十三年前、クラーク

ク飛行場にはニューギニアより連絡にきて着陸したこともあり、今回は戦後初めての訪問で、皆様と共にあの地に再び立つことができ感慨無量な一時でありました。

戦後六十一年余、私共生き残った者は亡くなった同期生や戦友の御霊に奉賛に、慰霊に、毎年慰霊祭を行って来ました。私は飛行第七戦隊会、少年飛行兵七期生会の会員となり、事務局や会長役も務めました。戦中の戦友や同期生の活躍の実態を後世に伝えるよう、会報や記念誌を発刊してまいりました。膨大な資料になりましたが、大切に保存しております。当時の航空戦の実態を知って、再び戦争をしない平和な日本が続く為にご活用賜れば幸甚の至りと存じます。今回の旅行に参加された方、戦史研究に興味のある方は、お申し出下さい。

小飛七期生会も飛行第七戦隊会も、共に会員が減少し、三年程前に解散の止む無きに至りました。小飛七期生会は靖國神社で、飛行第七戦隊会は、自衛隊浜松基地において最終解散総会を行いました。浜松基地は、陸軍爆撃隊発祥の地（大正末期）で、隊内に記念碑と資料館があり、今後も記念碑の奉賛祭は浜松新生つばさ会が祭事を引き継いで下さることになりました。私共

生存者も生のある限り参加して亡き戦友の御霊に奉賛の誠を尽くして行きたいと存じます。申し遅れましたが、今回旅行に同行されました元統幕議長・空将で新生つばさ会長杉山様には、大使館表敬訪問の実現にお骨折り下さったと伺い、心から謝意を表します。

今回、クラーク慰霊祭に続いてコレヒドール、モンテンルパ参拝もあって、大東亜戦争緒戦時のフィリピンの戦況と終戦前後の様子が実感されて、当時の勇士の苦闘を伺い知ることができました。私は緒戦から、満州、ジャワ、ニューギニア各戦線に参戦。その後、航空士官学校（六十期）の助教として終戦を迎え生き残りしました。

戦後の六十余年を生き、戦後復興、その後の経済発展を経験し、その渦中で生き現在あるを何時も亡くなった戦友に申し訳なく、この方々のお陰で現在の日本があることを肝に命じて生きております。現社会や世界情勢を見る

とき、いつの時代も何かがあり変化変動は避けられないことですが、戦争のないこと、原爆の使われるような戦争は絶対あってはならないと強く思うことであります。

平成十八年十二月八日、今この記事を書いております。昭和十六年の開戦の日から丁度六十五年になります。そ

の日は満州のチチハルで開戦を知りました。年齢十九歳のときでした。ソ満国境の防備に当たって、九七式重爆撃機の機関係として訓練を重ねておりました。その後南方第一線で、度重なる爆撃行で帰らぬ飛行機は其の数を増し、出撃前に、今度は自分の番だと覚悟し、心に言い聞かせて飛び立って行った時期を今思い起こします。しかし、帰る可能性もありました。帰る事のない特攻隊員の覚悟、心情を推察して痛恨の極み、今改めて感じ入ってこの記事を書いております。

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の今後の維持発展が如何にして次世代へ継承されるのか、世代交代を前にして色々心配されることも伺っておりますが、永久に歴史として残さなければなりません。最善の道筋を願って止みません。会長様以下関係者に深く感謝申し上げます。

今回の旅行で、昔、見たままの美しいマニラ湾の夕日が、また、当時のマニラホテルが変わらず建っていたことが、若き時代の思い出を再現して戴いた、良い慰霊行脚であったことに感謝致します。

再び比島の 慰霊旅行に参加して

甲飛9期 大日方邦治

同期生の河野光陽君が甲飛9期生の記録を送ってくれた。この記録の戦死者名簿を整理して大変に驚いた。

同期生の中、なんと31名がフィリピンのクラーク基地を発進して戦没されている。この中に、長野県出身の同期4名の名前がある。しかも、私と同じ中学校の一緒に入隊した者の名前を見て、前回は特別攻撃隊の原正彦さんの

慰霊を中心に、特別攻撃隊のみの慰霊と心得ていたが、改めて自分の不勉強であったことを恥じて、10月24日出発の今回の慰霊旅行の仲間に入れていただくことにしたのである。

詳細に記録を見ると、特別攻撃隊が発令される前、10月17日に同じ中学出身の太田明さんと、中村仲衛門さんが七六一航空隊所属でクラークを発進、その後10月21日に細井信男さんが同じ七六一空にてクラークを発進し3人も戦没されている。

また、予科練の時、同班で隣で一緒に飯を食べ、折にふれてお互いの故郷の話をし合った、和歌山出身の作田一美さんも同じ部隊で、細井さんの直ぐ

後、10月27日にクラークを発進、タクロバン沖にて戦没されている。

以前記した、松本出身の原正彦さんは、正式に特別攻撃が発令され、神風特別攻撃隊第9聖武隊として、11月19日にタクロバン沖で戦死された。

クラーク基地にて、次々に帰らぬことを承知で命令が発せられ、搭乗名簿が黒板に記入されるや肅々と爆弾を抱えて飛び立ったのである。

彼らは皆、海軍軍人の精神を持ち、迷うことなく我等の誇る予科練魂の権化となった。

当時、私も搭乗配置に着くと早速衣嚢整理をはじめ身辺の整理をしたことを思い出す。それは搭乗員として当たり前の軍人精神教育の結果であると思ひ出す。

私はあれから60年経った今もボーボイズ(編注 飛行艇やフロートの水上機が、ある程度の波高になると離水不可能となって機首を水中に突っ込むこと)で海に突っ込み生き残って忸怩たる心境の日々である。

今回、私は太田明さん、原正彦さんのお宅と現在のお墓の小石を拾い、また、細井信男さんのご遺族であるお姉さんに手紙を書き、お姉さんの写真とお姉さんが作った押し花を送って戴き、持参した。

フィリピンの平和公園の慰霊法要の時、平和観音様のお膝下に持参した写真と並べさせて戴き、法要をして戴いた。

更に、クラークの西、東飛行場跡の記念碑にも供えさせて戴き、特攻観音経の音読を捧げて貰った。

その後、セブ島よりレイテ島に渡る高速船の中で、オルモック湾に突入された戦没者の海上慰霊祭を行った。

最後に、高速船の後尾よりレイテ海に、持参した写真その他を投下して、クラーク基地より発進して戦没された同期生31名の冥福を祈った。

今回は、タクロバンに明るい内に到着したので、宿泊のホテルの従業員にお願いしてタクロバンの海岸に案内して戴き、この海に突入して戦没された海鷲の冥福をお祈りさせて戴いた。

帰宅後、私の行動の記録と写真を添えて、それぞれのお宅に報告して再度のフィリピン慰霊旅行を終えた。

私は、手と足を、偵察哨戒の任務の時、飛行機事故で負傷し切断しているので、何時も介添えをお願いしていたが、今回はホテルの同室の宮地さんのお世話になりながら、同行各位に伴われ、全ての行程に参加できて、心から感謝している。



タクロバン海岸にて 大日方邦治



リリーヒル平和観音像前 慰霊法要

慰霊・親睦旅行

(山本五十六記念館・蔵王・平泉中尊寺・女川慰霊碑・空自松島基地・松島瑞巖寺)

甲飛9期 大日方邦治

平成18年9月25日より2泊3日にて長野県甲飛会の今年度慰霊・親睦旅行を実施した。

今年のは、長岡市の山本五十六記念館・北上して蔵王遠刈田温泉、更に北に向かって平泉中尊寺、南下して女川港の慰霊碑参拜、空自松島基地の見学、松島湾遊覧と盛沢山の行程であった。

第一日・山本五十六記念館

爽やかな初秋の晴天に恵まれ県南の茅野よりバスに乗車出発、最後に須坂インターにて塩崎副会長が乗車、予定の19名全員が揃った。

早速、細田会長より今回の旅行団長を五味一徳氏(甲14期指導班長)に依頼、バスは北信ハイウェーを一路北進する。長岡インターより市内に入り呉服町、山本五十六記念館に到着する。

この記念館は全国の海軍友好団体の募金を基に平成11年4月完成開館された。

記念館の中央に山本司令長官が搭乗

されソロモン諸島バクレ島に赴く途中、米軍戦闘機に迎撃されブルーゲンビル島に墜落戦死された長官搭乗の一式陸上攻撃機の残骸の中、左主翼、座席の一部が、パプアニューギニア政府の好意で平成元年長岡市へ里帰り、この会館に展示されている。撃墜された当時そのままの破断された機体の痛々しい姿墜落による衝撃の凄く破壊力を見て一瞬息が詰まる。(自分がかつてポーズによる事故にあった時のことを想起して慄然とする。あの時、私は片手、片足を失い、同乗の二人は戦没され、私は生き永らえて亡くなられた方々の冥福を祈り続けて今日に至っている。)

館内の陳列ケースには、書簡、写真身の回り品等の遺品が整然と収められている。

山本長官は大正13年霞ヶ浦空副長、後に空母「赤城」艦長、航空本部技術部長、一航戦司令、航空本部長、聯合艦隊司令長官と文字通り海軍航空兵力とともに歩まれた。かの零式艦上戦闘機も九七式艦上攻撃機も長官の指導から生まれたものであった。

山本長官が戦死され終戦後に発見された黒革の手帳には霞空副長時代から開戦までに亡くなられた長官の部下の本籍、生年、戦死、殉職の記録が克明に誌され、肌身離さず持たれていて、

機会をとらえてそれらの方々の遺族を弔問されておられたとのことである。全海軍軍人から慕われていた山本長官の在りし日の温容を偲んだ一瞬であった。

記念館の前の道路を挟んで長官の生家高野家を訪ねる。木造15坪の二階家で、半坪ほどの土間の敷居を上がると右側に2間が続き、左が勝手、急な階段の踊り場の右に天井の低い畳ほどの部屋が五十六少年の勉強部屋で、粗末な机が置かれ、当時の質素な生活が偲ばれる。

生家の北側に接して200坪程の公園があって、等身大の元帥の胸像が立っている。

信濃川を渡って北陸ハイウェイを北上し、昼食。いよいよ蔵王ハイラインに入る。

左右に広がる這松など眺めながら景色を語るガイドの説明に名だたる樹水の美しさを想像しつつぐんぐん登る。蔵王こまぐさ平の展望は目にしみる青空と、ゴツゴツした高原の素晴らしいコントラストで、えも言えぬ美しさであった。更に上の坂の上の神社まで足を延ばす元気者もある。この季節これ程の眺望の出来るのは珍しいと、売店の人の話。

蔵王の雄大な展望に心を残しながら、夕暮れ迫る中、遠刈田温泉到着。宿の眼下には幅の広い川があって水は僅かに流れている。

一風呂浴びて夕食宴会となる。歌も次々に飛び出し大いに盛り上がる。部屋に戻ると早朝の出発から長時間の行程で心地よい疲れの中に忽ちに夢路に入る。

第二日・中尊寺・女川

東北ハイウェイにて平泉前沢インターに到着したのは午前10時30分であった。

駐車場所の坂を登る。中尊寺の宝物殿は右側である。説明を聞いて宝物殿を見学し揃って金色堂を拝観する。数年前に修復されたばかりでその装飾が目映い。

ここで旅行の無事を祈り、昼食。いよいよ南下してバスは女川市に到る。

(以下、関全壽(14期)担当)

女川は宮城県東部に位置する三陸海岸南端の入江の深い漁港の町である。

昭和20年8月9日早朝より10日夕刻まで、米・英・加連合の大空襲を受けた。

女川には海軍防備隊があり、三陸沖の輸送船団の護衛、敵潜水艦の制圧、対空警備に当たっていた。

当日は湾内には海防艦「天草」をはじめ掃海艇等多数の海軍艦艇が連合軍の上陸に備えて在泊しており、敵艦載機の執拗な波上攻撃に対し、陸上部隊と共に勇猛果敢に応戦したが、湾内の艦艇は健闘空しく悉く撃沈され、数百の負傷者と57名の尊い命が犠牲となった。

海防艦「天草」を攻撃した編隊の隊長はカナダ海軍のロバート・グレイ大尉であった。彼は500ポンド爆弾を天草目がけて投下、反転上昇中に天草からの機銃により撃墜され、女川湾内に沈んだ。攻撃された天草も程なく沈没した。

グレイ大尉は欧州戦線でドイツ戦艦を撃沈する偉勳により英国より最高の勲章を受け、また、第二次大戦最後のカナダ人戦死者としてカナダ最高のビクトリア勲章を遺贈されている。カナダ海軍では戦後その機体を引き上げるべく日本の海上自衛隊も協力したが、墜落地点が特定できずにいた。同国のたつての願いによって平成1年8月、現場を見下ろす崎山公園に慰霊碑が建てられた。

時の女川町長長須善一郎氏が「仏様に国境はない」と、格段の努力をされたと伝えられる。

女川湾戦没者慰霊塔は、当時海軍防

備隊に勤務されていた神田義男上曹が私費を投じて41年8月に同公園内に建立され、毎年追悼供養が行われている。200メートル離れて、同じ公園内にグレイ大尉の慰霊碑があり、平和への願いと、日加友好のシンボルとなっていて両碑とも参詣者が絶えない。我々一同も両碑に花束を捧げ、線香を供え、「海ゆかば」を斉唱して冥福を祈った。(以上、関全壽記)

女川より今晚の宿泊地松島海岸に着したのは予定より大分遅れて夕暮れになった。入浴は後回しにして最後の懇親会は賑やかに開かれた。

第三日・松島基地・瑞巖寺・塩釜

8時半ホテルを出発。三陸ハイウェイを戻って石巻の航空自衛隊駐屯基地に直行。昨晩から大雨で見学場所まで雨傘使用。格納庫にてインパルス用のジェット機の前で詳しい説明を受ける。選ばれた、大学の教養・技術も卓抜した者が三年間の教育を受けるとのことである。ジェット機の翼に触れると、特種塗料でスベスベしていて戦時中の飛行機を知る我々は想像もつかぬ現代最新鋭の航空機の進歩を実感した。(翼のスベスベは実は特種の、日本が技術の粋を集めたプラスチックの材料

と、後日、自衛隊のパイロットより教えて貰い、心に安心感を持った。)晴天ならば一日に二回訓練飛行を実施しているが、生憎の雨天とて誠に残念であった。売店にておもしろいおもしろい記念品を購入して再び松島海岸に戻る。

瑞巖寺では修行僧の洞窟を巡る。二階の洞窟は修行を積んだ先輩の僧の席との説明に昔も格差が存在したか一寸考えさせられた。

11時半に湾内遊覧船に乗船、天下第一の景勝を巡り塩釜港で下船、近くの笹かまぼこ工場を見学、昼食。同館の続きにある記念館にて、仙台七夕祭の飾り付け等を見学する。



女川湾戦没者慰霊塔裏面に157名の英霊名記載



カナダ空軍パイロット ロバート・グレイ大尉の慰霊碑

すべての見学を終えて、バスは仙台インター・東北・磐越・北陸・信越ハイウェイを通って県内に帰る。道中、全員が病人、怪我人も無く無事に今年度の慰霊親睦旅行を終えた。

人間魚雷回天と黒木博司・

仁科関夫少佐(2)

会員 岡田 幹彦

かねて覚悟の殉職

黒木はなくなる少し前、回天特攻にかける思いをこうのべている。

「自分はこの特攻兵器で戦勢挽回しようとは思わない。小さなもので大きなものをつつけ、艦隊と艦隊とが尋常互角の決戦が出来るようにする。すなわち、飛行機が不足の為やれない処を少しでもこれによって補い、飛行機が大量に出来るまで持ちこたえようというのである。そして、この兵器を我々の犠牲によって使い、敵の侵寇を出来る限りくいとめようとするのだ」

「自分は身を挺して回天の研究に没頭しているが、唯この兵器のみを以て龐大なる敵の物量を撃破出来ようとは夢にも考えていない。自分の狙いはこの兵器を縦横に駆使して敵に体当たりする精神を重視し、この特攻精神を速かに海軍全般に徹底せしめんが為である。特に航空機関係者の覚醒を促し、海空一体となって敵に殺到する以外に絶対に皇国を護持するの道なしと信ず」

回天特攻が海軍あげての航空特攻の

捨石となることこそ、

黒木の神願だったが、

重ねてこの気持ちをは

表明している。黒木から直接これを聴いた一友人は後日こう語った。

「当時は戦況漸く我に不利となりつゝ、あり、戦局打開の為には何か意外の戦術を採用しなければ到底敵の攻撃を打ち破ることは不可能であるとの見解に傾き、漸く中央に於いても少佐の計画に賛同せざるを得ない状況にあった。而して戦況益々困難を加うるに到るや、空に海に全力を注いで特攻兵器を採用し遂には特攻以外に抗戦の方策は全く不可能に立ち到り、少佐の言われる通りになった。実に少佐は明敏なる洞察力を以て早くよりかくなることを予知し、全力を挙げてこれが対策に腐心せられたのであった。あゝ若冠二十三、四歳にして既に戦局に対するかかる透徹せる見透しを堅持し着々と自己の所に勇往邁進した少佐の卓越せる人物には全く驚嘆の外はない」

運命の日たる九月六日、まず仁科中尉が指導官となり訓練が行われた。続いて黒木が樋口孝大尉と同乗しての訓練であったが、この日午後風が強く波が高かった。先に訓練を終えた仁科はこれを心配し、「今日はよした方がいい

いと思いますが」というと、黒木は静かに熱を込めて答えた。

「仁科、これくらいの波で：敵は待つてくれぬぞ。おれたちの出撃が一日でも早ければ早いほど戦局に及ぼす影響は大きいのだ。いつか話した航空特攻あれだ。もし俺たちがやればきつとできるぞ」

だが、波が益々高くなるのを見た回天訓練隊指揮官板倉光馬少佐は中止を命じた。しかし、黒木は「指揮官、やらせて下さい。これくらいの波で使えないのなら実戦の役に立ちません」と切願した。樋口も強く願ひ出た。板倉は二人の気魄と熱気に押し切られて許可した。黒木はほほえみながら仁科に、「心配するな、では行ってくる」と出かけた。

艇が出航したのが同日午後五時四十分、事故で海底に沈没したのが六時十分。艇が浮上せず、黒木、樋口両大尉が窒息死したのが翌日午前六時過ぎである。二人はともに二十二歳だった。

遺書―特攻なくして 神州不滅は保し難し

黒木と樋口は最期に臨んで艇の事故の理由、応急処置、沈坐後の経過、所見を記し、後事を仁科中尉始め同志に託し潔く死に就いた。黒木は次のよう

に書いている。

「陛下の艇を沈め奉り、就中(人問魚雷)に対しては畏くも陛下の御期待大なりと拝聞致し奉り居り候際、生産思わしからず而も最初の実験者に伝うることを得ずして殉職するはまことに不忠申訳なく慚愧に耐えざる次第に候。

恩師平泉先生を始め先輩諸友に生前の御指導を深く謝し奉り候。

必死必殺に徹するにあらずんば、而も飛機に於て早急に徹するにあらずんば、神州不滅も保し難しと存じ奉り候。必ず神州挙げて明日より速刻、体当たり戦法に徹することを確信し神州不滅を疑わず。欣んで茲に予て覚悟の殉職を致すものに候。

天皇陛下万歳
大日本帝国万歳
帝国海軍万歳
仁科中尉に

万事小官の後事に關し武人として恥なき様頼み候。潜水艦基地隊在隊中の(磯四十八期)渡辺もしくは権藤大尉に連絡を頼み候。御健闘を祈る。諸士並びに甲標的諸士の御勇健闘を祈る。機五十一期級友切に後事を囑す。樋口大尉の最後、従容として見事なり。我又彼と同じくせん。

辞世

男子やも我が事ならず朽ちぬとも
留め置かまし大和魂

国を恩ひ死ぬに死なれぬ益良雄が
友々よびつ死してゆくらん

樋口孝大尉の遺書にはこう書かれていた。

「後輩諸君に

『犠牲を踏越えて突進せよ』

訓練中事故を起したるは戦場に散る可き我々最も遺憾とする所なり。然れども犠牲を乗り越えてこそ発展あり進歩あり。庶願くば我々失敗せし原因を探求し帝国を護るこの種兵器発展の基礎を得んことを」

黒木大尉に続け

指揮官板倉少佐は同日艇が浮上せず二人の生存の望みがほぼ絶たれたとき、後悔が全身に襲いその夜まんじりともせず朝を迎えた。七日午前九時、艇が発見され引き揚げられた。板倉が扉を開くと、黒木と樋口は取り乱した様子は微塵もなく従容としてうづくまっていた。その晩、両大尉の遺書が訓練隊の全員の前に読みあげられた。全員が慟哭した。両人の壮烈な殉職に対して全隊員の士気と闘志が火の玉となって燃え上り、板倉の憂慮を吹き飛ばした。彼はこうのべている。

「昭和十九年九月六日、黒木大尉同乗一号基が徳山湾激浪中、洋心深く突入して殉職するや、かねて回天兵器の訓練自体の困難性と危険性を慮配っていた中央主脳部より隊員の士気を懸念し、大津島部隊全員が一時柱石を失った悲しみに蔽われ全く火の消えた感があつたが、在隊期間僅かではあつたが熾烈なる実践力と崇高なる尽忠の至誠は早くも全隊員に透徹し、佐久間艇長の遺書に勝るとも劣らない遺書は一層鮮明にかつ強烈に全隊員の心靈に反映次の瞬間、隊員の士気一段と奮振され、爾來終戦の大詔を拝誦するに至るまで猛訓練につぐ猛訓練が敢行され、幾人かの尊い屍を踏み越えて必勝を期して訓練に邁進し来たつたことを思う時、偉大なる精神力の支配を確信するものである」

隊友の一人はいう。

「兄の死は回天隊にとりて実に偉大なる刺激を与えました。当時隊員の意気消沈を誰しも恐れたのでありますが、結果は全く逆でありました。士気いよいよ挙がり、黒木大尉の遺志を継げるようなものでありました。訓練開始以来僅々八十日にしてあの菊水隊の戦果が上ることは実に戦史に類を見ざるというても過言でありませんが、これ

も兄の死による奮起の賜であると確信します」

黒木は自らの死を以て全隊員を奮い起たせ回天特攻への不退転の覚悟を固めさせたのである。

黒木の捨身殉国により 実現した回天特攻

盟友仁科は涙を以て黒木を偲び自己の決意をこう記した。

「黒木少佐、余に語りて曰く、『魚雷を知るの遅きは余の不覚なり』と。吾人魚雷を知るものは如何に答うべきや。実に慚愧の至りなり。その後黒木少佐と夜を徹して国体を憂え既死回天の策を論ぜしこと幾度か。彼の国体観に共鳴し彼の信念に感服し、兄弟以上の親密を以て可愛がらるること光栄この上もなし。彼の真に皇国を思い八紘一字を希う姿は随所に表わる。

彼常に曰く、『本実験中、貴様と俺の二人の中一人は必ず斃れん。さらに二人斃れた場合は如何せん』と。神見捨て給わず、大津島によくやく訓練を開始に到りたる秋の喜び。愈々機到るを待つ。彼の訓練第一日の同乗指導、既に彼の予感ありたる如し。小官、同乗指導を終り調整場にて彼と会し本日訓練中止を申出るに、彼何か測り知れざるの眼を以て迎へたるも決然として

出発。小官も氣に懸かり追蹊艇の一員となりしもまた胸騒ぎを禁じ得ず。嗚呼彼遂に帰らず、徳山湾の鬼と化す。回天隊員よ奮起せよ。日本の国民よ覚醒せよ。訓練開始に当り二割の犠牲を覚悟、猛訓練を誓いし仲なれども黒木の今日の姿を見んとは。靈前に只合掌あるのみ。

神州不滅は彼の信条なりき。回天兵器に望外の期待あるも、畢竟この精神を航空機に發揮せん限り其の何物にも非ず。航空機に期待あるのみ。彼の持論は此所にある。

黒木少佐の靈は我等を守る。その後の訓練極めて円滑、徳山湾内波静かなり。黒木少佐は永久に回天隊の頭上にあり。回天隊よ、大義の存する所、黒木あり。訓練々々。回天隊の道は只一条。一刻も早く大元帥陛下の大御心を安んじ奉るにあるのみ。一瞬も早く神州の曙を迎うにあり」

もう一人の隊友はこうのべた。

「兄がもし後一ヶ月半位生きて、神風特攻隊(出撃十月二十五日)の事を聞いたら随分喜んだらうと思う。兄は回天に乗るようになって、何よりも飛行機だという考えはやはり捨てずその奮起を望んでいたのだから」

一親友はこう語った。

「入隊当時、機関科の士官で出来る

ものか。用兵的な事も何も分らずに何をいうか。先輩でも出来ぬことを一番後輩の彼が出来るものかと皆彼を軽く見ていた。それがどうだ。一月二月するうちに愚生は勿論、部隊長以下皆が皆黒木君を見直し畏敬し、その人格に愛国の至情に動かされて彼に共鳴し同志となって協力し、彼の大きな仕事を助け始めたではないか。数ヶ月する中に人皆不可能視したことが彼一人の手によって可能に変わって行ったではないか。随分ひどい障害があったにもかかわらず、彼の所期の信念の通りの新兵器が彼の手によって作り出され、戦局は彼の絶叫し続けた憂うべき戦局となり、全海軍が彼が呼び続けた通りの特攻作戦をとるに到ったではないか。始めは嘲笑さえして、てんで問題にしてもらなかった人、反対した人が皆異口同音に、『偉大なるかな黒木』と叫んだのである。『もっと早く黒木君の言う通りにすれば良かった』と叫んだのである」

回天特攻はまことに黒木少佐(死後特進)一人の捨身殉国により実現したのである。

楠公・東郷を仰慕した少年

回天出撃前に殉職した黒木博司少佐が後事を託したのが、盟友仁科関夫中尉である。仁科は大正十二年四月十日、大津市に生まれた。黒木より二つ下である。父染三はこの時滋賀師範学校教師であった。母初枝もかつて滋賀県立女子師範学校、県立天津高等女学校の教師をしていた。両親とも人柄すぐれた知性高い人だった。染三はその後、山口県女子師範学校、大阪女子師範学校の校長をつとめるがともに名校長と称えられ、女子生徒より慈父の如く慕われた。

仁科はこの両親の深い感化を受けた。幼少時より神仏を崇敬し偉人を仰慕した。母は「神仏はよく拝む子でしたよ」と言っている。仁科が最も畏敬したのは楠木正成と東郷平八郎である。両者とも最も敬神の念深き武人の典型であった。

昭和十一年、仁科は大阪府立天王寺中学に入学した。この大阪の名門中学で学年三百人中、常に一番というずば抜けた秀才であった。全ての学科がよく出来たが、ことに数学、理科は抜群だった。数学、理科の教師であった両親の血をうけついでいた。これほどよく出来たから、父は一高(東京)か三高(京都)に行かせ、東大の理科か工科に進ませたいと思った。

仁科は勉強一筋の青白い秀才ではなかった。入学するや剣道部に入ったが、

学科以上に剣道に打ちこんだ。仁科は剣の達人に憧れた。史上の名人中最も好きになったのが、江戸期後半の平山行蔵である。平山は幕臣で武芸十八般の奥義を極めるとともに、兵法、儒学、土木、農政等に通じていた。彼はロシアが千島、樺太を侵略しつつあった当時、深く日本の危機を憂え、泰平の世に惰眠を貧る多くの武士の有様を痛嘆した。生涯独身で質素な生活において心身を鍛え抜いた。全く戦国武士の生まれ変わりみたいな平山の生き方に度肝を抜かれるとともに強く惹きつけられ、平山のごとき真に立派な武人になりたいとひそかに心に誓ったのである。父から聞いていたことだが、「僕の先祖には剣の達人がいた。僕の中には必ずその血が流れている」と仁科は己れを励ました。腕はめきめき上り四年生の時、初段となった。今とは違い、当時この年で初段を授かるのは相当の腕前だった。

小中学生時、仁科が好んだのは神社、寺院の参拝で、近畿地方の社寺、霊所、霊山を数多く詣でている。住吉神社、神戸の湊川神社、大阪の四条畷神社、信貴山、生駒山、葛城山、金剛山などで金剛山には十数回も登っている。金剛山にかくも登ったのは、楠木正成を仰慕したからである。湊川神社では

「嗚呼忠臣楠公之墓」に額き、石碑に刻まれた撰文を暗じた。楠公父子ゆかりの地はことごとく訪れた。仁科もまた黒木に優るとも劣らぬ尊皇尽忠の心の持主であった。海軍軍人となり黒木に会うやたちまち二人が肝胆相照らす仲となったのは不思議でなかった。回天特攻の為、この二人の魂はめぐり合う定めにあつたといえよう。

父の訓戒

この様な心をもつ仁科は両親の期待に反して、昭和十四年十二月、海軍兵学校に進んだ。楠公とともに東郷平八郎を尊敬していたから躊躇なくこの道を選んだ。中学四年の時合格したからいまだ十六歳である。日本歴史における最大の国難を迎えつつあったこの時、仁科は軍人として立ちこの危機を打ち払うことを本願としたのである。

仁科は江田島にある海軍兵学校で三年間、学業、教練、心身の鍛練に全力を尽した。学科は旧制高校の文科、理科をとりまぜたものに、天文、海洋、電気、機械工学、その上に海軍将校としての必須の砲術、水雷、運用、航海、通信、機関等の軍事学が加わる。その他陸戦、短艇訓練等の教練、剣道、柔道、柔剣道、相撲、馬術、登山等の武道、体技、そして徹底した精神、徳育

教育が行われる。これらが三年間のうちにたたきこまれるのだから兵学校生活活が息抜く暇もないのは、海軍機関学校と同様である。

仁科は学科においても極めて優秀だったが、その他についても人後に落ちなかった。剣道には一層励み、卒業時には兵学校では最高位、たった五人しか授けられない四段になっている、棒倒しでは誰よりも奮闘した。またそばにある三九四メートルの古鷹山登りが心身鍛練のため奨励され、過去の最高記録は日露戦争の軍神広瀬武夫中佐の九十六回だったが、仁科はこれに挑戦、

在校中九十回登り広瀬に次いだ。

兵学校には生徒の精神教育の為、教育参考館という自聖の殿堂が建てられていた。そこには古今随一の海将東郷平八郎元帥の遺髪室はじめ中世以来の日本海軍の諸資料、日清・日露戦争時の使用物、諸資料が展示されている。

明治四十三年、広島湾で殉職した佐久間勉大尉の遺書もおさめられている。

仁科ら兵学校生徒はこの日本海軍の聖地に磅礴する愛国殉国の精神を全心身に感じつつひたすら精進努力した。第一学年終了時の成績は六百余人中五番、仁科は心、頭、体ともに最優秀の海軍将校の卵であった。第二学年に進んだとき、父は次の便りを出した。

「第一学年の成績良好なりしこと誠に喜ばしく存じ候。…しかしこの成績を聴き一つは喜び、一つは恐れを抱き申し候。…而してその恐れとせる所は、一、成績予想外に優秀なりし為慢心を生ぜずや。二、次第に向上し最後に優秀となることこそ望ましきに最初に於て優秀なりしこと。三、現在の成績を維持せんとあせり、生活に余裕を失い人物を狭小ならしめはせぬか。四、競争意識、妄りに盛んになり、神経を過勞に陥れ健康を損ずる如きことなきか、等にてこれあり候。

私は常に思う。人生のことは公人たる私人たる生徒たる否とに關せず、唯敬神を第一とし、誠心を以て神に對し、人に對し事に對し、遠謀深慮の下に最善を尽し自己を大ならしめ、以て克く皇恩に報ずるを念願として終始一貫の態度を持するにありと存じ候」

黒木の父同様、仁科の父も立派であった。仁科は父の慈愛あふれる訓戒をよく守り、先輩黒木に少しも遜色なき模範生徒として益々奮励した。

黒木との出会いと別れ

昭和十六年十一月、仁科は第三学年に進み二号生徒となった。そして翌十二月八日、大東亜戦争が始まった。開戦初頭、海軍は真珠湾を奇襲したが、

その時特殊潜航艇による攻撃が行われ九人の軍人が壮烈な戦死を遂げた。九勇士は「九軍神」として称えられたが、仁科はこれに深く感激、このとき特殊潜航艇乗りを決意したのは黒木と同様であった。

昭和十七年五月、仁科は第四学年、一号生徒となり、同年十一月卒業した。十九歳である。成績は五百八十一人中二十五番の好成绩である。しかし仁科が学業以上に鍛錬し、誰よりもすぐれていたのはその気高き人品、人格であった。仁科にとり学業成績の順位はたいした問題ではなかった。

仁科は海軍少尉候補生に任ぜられ、戦艦長門に乗り組んだ。昭和十八年、海軍少尉に任官したのち、かねて志望していた広島県大竹の海軍潜水学校に入校した。ここで数ヶ月学んだ後、同年十月十五日、特殊潜航艇長の講習を受ける為、呉軍港の近くにある倉橋島の訓練基地に赴任した。

その時、仁科を出迎えたのが黒木博司中尉であった。以来二人は同じ部屋で起居を共にする血盟の同志となる。仁科は二十歳、黒木は二十一歳である。

黒木は恰度そのころ、人間魚雷採用の血書嘆願を行っていた。黒木とともに生活を始めた頃のことを仁科はこう記している。

「腕を捲って憤慨している人。夜も眠らずに何か喋っている人。日本精神を一人で考え、時勢を慨嘆して夜中もベッドをトントン蹴ったりするちよつと変った人」

しかし二人はその高貴な人格、ともに楠木正成を敬慕してやまぬ尊皇純忠の精神、至誠の心、一身を捧げて国難を救わんとする鉄石の信念において全く共通していた。仁科は黒木の人格、信念、思想、軍人としての姿勢に深く打たれ、海軍軍人として二人とない模範を見出すのに時間はかからなかった。一方、黒木も自分と同質の得がたき同志を見出したことを悦び、仁科に惚れこみ弟の如く親愛した。熱情の塊りでよく語る黒木に對して、仁科は冷静で寡黙、肉つきよくふっくらとした感じの黒木に對し、鋭く精悍で骨っばい仁科と性格も外見も対照的だったが、二人はたちまち意気投合した。仁科は黒木の間魚雷による特攻に直ちに共鳴、ともにその実現に心力を合わせることを誓い合ったのである。二人の出会いこそ宿命であり、天の配剤であった。

人間魚雷の試作艇が出来上り、搭乗実験が開始されたのが昭和十九年七月である。黒木と仁科は命がけの搭乗実験を繰り返すとともに、回天の装置の

改善に徹夜をつぐ徹夜を重ねた。その間、ろくろく風呂にも入らず、散髪するゆとりもなかったから、二人の頭髪は伸び放題になった。

かくして同年九月、大津島に人間魚雷回天の訓練基地が開設された。訓練指揮官として板倉光馬少佐が赴任してきた時、二人は蓬髪のまま汗と油の搭乗服で板倉を出迎えた。板倉は、「基地にいながら、その髪はどうしたのだ」と問うと黒木は、

「この髪は回天で敵艦に体当たりするまでは切りません」

と答えた。「仁科もか」「はい、断じて」黒木と仁科のただ二人だけが回天の指導教官だった。二人の死に物狂いの尽力がようやく回天基地開設にこぎつけたのである。二人が指導教官として搭乗員の訓練を開始した三日目の九月七日、黒木少佐は樋口少佐とともに殉職したのであった。今や兄弟以上の仲であった黒木の死を誰よりも嘆き哀しんだ仁科は、「忘れめや君斃れなば吾が継ぎ吾斃れなば君継ぎくるるを」と黒木の言葉を涙で嘔みしめた。一年足らずだったが、この二人が結んだ絆より固く強いものはほかになかった。

母との永訣

回天訓練基地にはこのとき百名の特

攻要員がいたが、黒木亡きあと仁科は唯一の指導教官として百名の指導に当たった。「黒木大尉に続け」を合言葉としてそれから十一月の出撃までの二ヶ月間、連日の猛訓練が行われた。日中はいうまでもなく午前四時からの黎明訓練、夕方の薄暮訓練等、全訓練の先頭に立ったのがこの時二十一歳の仁科であった。当時の仁科を始めとする回天特攻隊員の表情につき他部隊の軍人はこう記している。

「もう我々とは比べものになりません。神様の顔、目でした。彼の尽忠というか、国に殉ずる真心には死を覚悟していた我々としても驚きの目で見えていました」

出撃の日がいよいよ迫るが、第一回出撃の十二名の人選を行ったのは仁科である。艇操縦の実力、胆力、人格の面からよりすぐれた者を慎重に選んだ。海兵三名、海機三名、学徒出身六名、無論先頭に立つのは仁科で、平均年齢二十二歳だった。

出撃直前、十二名は帰省を許された。十一月三日、仁科は大阪のわが家に帰った。その日のことを母初枝はこう記している。

「あの子はよく祭日に帰ってくる。今日は明治節、なんだか関夫が帰ってくるような気がしてならない。朝から

気もそぞろで落ち着かぬ。…(床につき)いつしかとろっとしたと思うころ、強くベルが鳴った。あっ、関夫の鳴らし方だ。はじめたように飛び起きて玄関に出た。暗い外に立っているわが子を見たとき、無事に生きていてくれたという喜びで胸一杯になった。

そのころ神風特攻隊のことが新聞やラジオに発表されたばかりだったので、いろいろ話しているうちに何気なく聞いてみた。

『若い人が飛行機で敵艦に体当たりして死んでゆくなんて、本当にもったいないことだね。必死でなくても何とか勝つ方法がありそうなものにね』

関夫は何とも答えなかった。自分が今必死の作戦を前に親に最後の別れにきているなどということはおくびにも出さなかった。：最後の食事があまり進まないの、

『今日はなぜ少ししか食べないの』
『おかすが沢山あるのでね。それに僕も大分大きくなったんだから、そういつまでも大食いじゃないんだよ』と笑いながら言った。しかしお酒はうまそうに飲み、『お母さんも』と杯をさし二人で楽しく汲みかわした。これが関夫にとってはせめてもの別れの杯のつもりだったのだろう。

いくら腹がきまっても、母の目

の前にはさすがに胸にせまり、食事のどを通らなかつたのではなからうか。私が駅までせひ送りたいといつたが、門前でいいよといい、母がつくった握飯を風呂敷に包んで手にぶらさげ、ゆっくりとした足どりで去っていった」
外出していた父には会えなかつた。無論、回天特攻は極秘であつたから、仁科は何も語らず、万感の思いをこめて母と永訣したのである。

回天特攻菊水隊の出撃

昭和十九年十一月八日、回天特別攻撃隊出撃の日を迎えた。最初の出撃隊は回天特別攻撃隊菊水隊と命名された。回天にはすべて中央出入口にある特眼鏡の真下に、楠木正成の家紋である菊水の紋が描かれていた。三隻の潜水艦に十二基の回天と十二名の特攻隊員を載せ、目的地に運ばれるのである。伊号四七潜水艦は仁科関夫中尉(隊長)、福田齋中尉、佐藤章少尉、渡辺幸三少尉、伊号三六潜水艦は吉本健太郎中尉(隊長)、豊住和寿中尉、今西太一少尉、工藤義彦少尉、伊号三七潜水艦は上別府宣紀大尉(隊長)、村上克巳中尉、宇都宮秀一少尉、近藤和彦少尉である。前日夕方、壮行会が行われた。三輪茂義第六艦隊(潜水艦隊)司令長官、菊水隊十二名を運ぶ第十五潜水隊司令

揚田清猪大佐、板倉光馬回天訓練指揮官始め幹部、訓練中の特要員らが集り、三輪長官、板倉指揮官らが訣別の挨拶をしたあと、搭乗員を代表して先任の上別府大尉が「必ず敵艦に命中します」と答えた。それから酒宴が始まり心尽しの料理が出され、「同期の桜」や「轟沈の歌」が次々に歌われた。「海ゆかば」は全員の大合唱となった。

海行かば 水漬く屍

山行かば 草むす屍

大君の辺にこそ死なめ

かへりみはせじ

大東亜戦争日本人はこの歌をうたった。国家、民族が存亡の危機に瀕したとき、先人たちはみなこの思いをもって君国に身を捧げることが厭わなかったのである。

宴たけなわになったころ仁科はそつと中座し、この宴席に出られなかった予科練習生たちの兵舎をたずね、全員を集めてこうのべた。

「練習生、おれは今日まで何も言わず黙って見ていたが、貴様たちには確固たる信念がない。一時の感情や興奮で大任を果たそうとしてもそれは必ず挫折する。確固たる信念とは、国体觀念に立脚した信念である。国のためわが子孫のためにおれたちは死ぬのだ。

人間魚雷が故障したときは、ハッチを開き力泳また力泳、敵艦に泳ぎつき敵の心胆を寒からしめればよい。確固たる信念に乏しい者はただの亀に等しい。練習生、大いに頑張れ」

仁科は一人一人と堅く握手して別れた。壮行会終了後、仁科は調整場に行き、十二基すべての回天の扉を開け、機械の状態を調べた。その姿を見た整備班長は思わず合掌した。

十一月八日午前九時前、回天神社で必中の祈願をした仁科ら十二名は「七生報国」と墨痕鮮やかな白鉢巻を締め、基地の幹部隊員、整備員、作業員らに挙手の礼をしつつ上艦した。仁科の胸には白い布で包んだ小箱がつるされていた。黒木少佐の遺骨である。そのときの有様を板倉指揮官はこう記している。

「征くもの、送るもの、寂として声はない。ただうなずきあうだけである。それですべてが通じる。言葉は必要なかった。整備員、基地要員、それに女子挺身隊員（地元十代の女学生）がこみあげてくる鳴咽を懸命にこらえている。里道は島の男女で黒山のように埋っていた。

午前九時、『出港用意』のラッパが鳴り、三隻の潜水艦は一斉に抜錨（錨を上げ船が動き出すこと）した。『総

員、帽を振れ！』最後の訣別である。潜水艦の後甲板に搭載した回天の上では、両足を踏みしめた搭乗員が軍刀をかざして、一閃、二閃、恩愛の絆を断ち切るように振られている。やがて後甲板の人影が消えたとき艦尾はひとときわ高く盛り上り、湾口の彼方に消えていった。そのときになって、不覚にも涙が滂沱としてあふれてきた。十二名の若人が風のように去った。二度と還ってこないのだ」

黒木殉職後、一身に全責任を担い二ヶ月間全身全霊を捧げた仁科は出撃のこの日、日誌にこう記した。

「懐しき訓練地大津島を後に、七生報国の白鉢巻に日本刀を腰に勇躍棧橋を離る。幾度起る万歳の声。吾人は只感激あるのみ。今、吾人は無雑一心、只邁進す。大元帥陛下の御為に進む道は只一条。今日の良き日、何故天は涙雨。吾等此の幸担いで進むに。過去二ヶ月の訓練、真剣そのものの猛訓練なり。黒木少佐の殉職、懦夫も克く奮起し今日に至る」

黒木少佐の死とその魂が仁科ら後進を導き、今日の回天出撃を迎えたのである。

一路ウルシーへ

目的地は伊三六潜と伊四七潜が中部

太平洋のウルシー、伊三七潜がウルシー西南方のパラオである。ここには西方のフィリピンを指す米海軍の碇泊地がおかれていた。攻撃予定日は十一月二十日である。

十数日間、仁科らは連日、図上での修練を怠らなかつた。回天が潜水艦を離れ敵艦に向かっているよいよ突入せんとする時、搭乗員は特眼鏡（潜望鏡）を以て一瞬のうちに敵艦種を判定し突入の判断を下し、艇の進む方向角度を突差に決めなければならない。そのあと敵艦に命中するまでもう特眼鏡をのぞくことは出来ない。仁科らが狙うのは空母か戦艦だった。

伊四七潜の乗組員はいっしょか仁科ら四人をかけて「神様」と呼ぶようになっていた。間違いなく訪れる死の前にした人とは到底思えぬ落ち着いた態度で毎日を送り、にこやかな笑顔をたやさなかつた。修練以外の時間は書物を読んだり書きものをしたり、また食事後は艦内の将校相手に囲碁や将棋もやっていた。

伊四七潜艦長折田善次少佐は三十三歳、歴戦の勇者で、「鬼善」といわれた名艦長であった。だが折田は出港時より食欲が衰え食事が進まなかつた。どんなことがあってもこの四名を無駄死させず目的地まで送り届け、回天特

攻を必ず成功させねばならなかったからである。

十一月十六日、ウルシーに敵艦数十隻が碇泊中との情報が入った。十九日、伊四七潜と伊三六潜はウルシー海域潜入に成功した。そこには百数十隻の敵艦が碇泊していたから、折田も仁科らも小躍りした。

その日、伊四七潜では別離の会食が行われた。そのあと四人は出港以来一度も洗っていない体の特配の真水で净め、下着から上着まで真新しいものにかえた。二十日、仁科は最後の日誌を書いた。

「昭和十九年十一月二十日、六尺禰ふんどしに搭乗服に身を固め、日本刀をぶちこみ、七生報国の鉢巻を額に、黒木少佐の遺影を左手に、右手には爆薬桿かえ、背には可愛い女の子の贈物のふとん(女子挺身隊員たちが心をこめて編んだ綿入れ座ぶとん)を当て、いざ抜き放ちたる日本刀、怒髪どはげ天をつき神州の曙を胸に、大元帥陛下の万歳を唱えて、全力三千ノット、大型空母に体当り

回天特攻の成功

十一月二十日午前零時三十分、折田艦長は佐藤章、渡辺幸三両少尉に、「第三号艇、第四号艇、乗船用意」を命じた。伊四七潜の四基の回天のうち

一号、二号艇は潜水艦の交通筒より直
接乗艇出来るが、三号、四号艇は一旦
艦上に出た上で乗艇しなければなら
ないから先になった。隊長の仁科は二人
に最後の言葉をかけた。

「頑張ってくれ。成功を祈る。あと
で会おう」
四人は互いに固く手を握り合った。

回天菊水隊の四人。左から佐藤章少尉、仁科関夫中尉、福田齊中尉、渡辺幸三少尉



折田以下全員が佐藤、渡辺両少尉を見
送った。続いて午前三時、折田は仁科、
福田両中尉に、「一号艇、二号艇、乗
艇用意」を命じた。乗組員に囲まれた
仁科は搭乗員を代表して、艦長以下が
四人に示してくれた数々の厚意に対し
て深く謝意を表したあとこうのべた。

「艦長は艦隊命令に従って私共の発

進後、戦果確認の計画を秘めておられ
るやに見受けられますが、それが私ど
も搭乗員のためになされるものである
ならば、ご配慮は無用に願います。伊
四七潜の武運長久を祈ります」

戦果確認のため長居をするならたち
まち探知され撃沈させられる恐れがあ
るから、回天発進後すみやかにこの場
から離脱し帰還してほしいという仁科
の願望であった。しかし折田は黙って
うなずいたのみだった。彼は戦果を視
認し、仁科らが死を以て果たした殊勲
を必ず見届けるつもりだった。折田は
仁科の手を強く握りしめた。狭い通路
に全員が並んで二人を見送った。

四人が乗艇、あとは発進命令を待つ
ばかりである。午前四時すぎ、折田艦
長は電話で「一号艇、発進始め」を命
じた。仁科はこたえた。

「一号艇、発進始め、よし」
艦長「仁科中尉、会心の突撃を祈る
ぞ、何かいうことはないか」
仁科「お世話になりました。後を頼
みます。出発します」
午前四時十五分、折田艦長は声高く
「発進」を命じた。電話装置は発進後
は働かない。仁科の一号艇がすべり出
した。続いて五分おきに二、三、四号
艇がつつがなく発進した。

四時三十分、四基の回天の発進した

あと、折田以下全将兵が固唾を呑んで
戦果を待った。

午前五時七分、ウルシー泊地の真中
に真赤な火の塊が噴き上った。命中で
ある。折田は直ちに全将兵に知らせた。
艦内に喜びと悲しみが入り交ったどよ
めきがおこった。続いて五時十一分、
別のところで火の玉が上がった。二発目
の命中と信じられた。そのあと五時十
二分、艦内に震動が伝わり、折田はこ
れを命中音と推測した。折田は合わせ
て敵艦三ないし四隻に命中、回天特攻
の大成を確認し直ちにウルシー泊地
より離脱、伊四七潜は無事帰還した。

同じくウルシー泊地を目指した伊三
六潜は二十日攻撃を行ったが、発進し
たのは一基のみで、残り三基は故障の
為発進できなかった。しかし発進した
今西太一少尉の一基は見事命中した。

伊三六潜は帰還し、三名の特攻隊員は
そのあと再出撃する。パラオに向かった
伊三七潜は十一月十九日、米軍に探知
され撃沈されて、四名の搭乗員は伊三
七潜乗組員とともに非業の死を遂げた。

回天特別攻撃隊菊水隊は十二基中五
基が突撃に成功し、七基が突撃を果せ
ず、仁科以下九名の勇士が散華した。
仁科は二十一歳だった。
回天特攻菊水隊の正確な命中が何隻
であったかは未だ不明である。日本側

は三ないし四隻の命中とみだが確証はない。アメリカ側は回天特攻に驚愕し恐怖のどん底に陥つたため、損害を伏せ少な目に発表したと思われる、ウルシーにおける命中、沈没を一隻だけとしている。いずれにせよ、回天特攻は少なからぬ成果を上げた。以後、回天が水中いつどこから突撃してくるかわからぬという凍りつくような恐怖を、米海軍全体に与え続けた心理的影響は絶大であった。

菊水隊の成功により回天作戦は本格化し、以後金剛隊、千早隊、神武隊等々と繰り出され、終戦時まで続けられた。出撃して戦死した隊員は八十九名、訓練中殉職した隊員十五名、戦後基地にて自決した隊員二名、計百六名が祖国防衛の尊き捨石となった。

仁科少佐の皇国護持の大和魂

黒木少佐の遺骨を抱いて真先に突入し、回天特攻を成功させた仁科関夫中尉以下九名の戦死者は二階級特進の栄誉に浴した。

仁科は出撃してから突入まで日誌を書き続けたが、祖国を思っつやまぬ深い心は後に続く人々を奮い立たせずにはおかなかつた。

十一月十日、仁科は両親へ出した最後の便りに次の辞世を記した。

君が為只一筋の誠心に

当りで砕けぬ敵やあるべき

回天特攻最先陣たる仁科ならではの
尊皇純忠の絶唱である。

なくなる五日前の十一月十五日、もう一首の辞世を詠んだ。
七度も生きかへりつつえみしらを

払ひつくすが大和魂

同日の日誌にこう記している。

「昭和十九年十一月十五日、出撃後極めて順調なる経過を辿る。一路、ウルシーへ、ウルシーへ。入手する情報に吾人の士気いよいよ昂る。敵艦薯刺しせざれば止まずの意気。生を亨けて二十数年、この間に涵養されたる全力を奮う秋は近く到来す。各教育課程、無駄なりしものはなし。尚本攻撃の術力には未熟を痛感するものなり。これ位子供の業なりと称する者あらん。容易なるもの、簡単なるもの、斯く考へたとき間違いの第一歩だ。考へるほど決して容易のものに非ず。只神助を確信し、御稜威の下に全力を傾注してそこに撃滅あるのみ。二十数年の教育の精髓は瞬間に展開されるのだ」

仁科は黒木同様、人間魚雷による特攻が従来にない特殊兵器による特殊戦法に由るがゆえ、容易ならぬ技術を要する困難な戦法であり、仁科ら隊員の腕前が訓練時間の不足と相俟って尚未

熟であることをよく自覚していた。しかし回天特攻なくして航空特攻なく、祖国を亡国から救うことは絶対不可能と信じたから、全身全霊を傾け心血を注ぎ尽して回天特攻に打ち込み、そこに天佑を祈り神助を確信してひたすら奮進したのである。大東亜戦争の歴史を顧みる時、後世の日本人の心魂を最も強く揺さぶりその限りなく尊く美しい祖国愛を我々の脳裏に刻印する軍人は、弱冠二十一、二歳の黒木、仁科両少佐であるとの思いを禁じ得ない。

皇国三千年の歴史を擁護せん

仁科少佐以外の回天勇士の遺書を掲げよう。仁科とともに突撃した福田齋中尉（死後少佐）は福岡県出身、海軍機関学校五十三期、黒木の二期後輩である。黒木の遺志を体し海機第一号の回天戦死者となった。二十二歳だった。「親を思ふ心に勝る親心

今日の音づれ何と聞くらむ

此の世に生を享けて二十有三年、何等の御恩に報ゆる事無くして御両親に先立つ不孝何卒お許し下され度し。

今や皇国は存亡の極めて重大なる岐路に在る秋、選ばれてこの壮挙に参加し得るの光栄例えん方これなく候。此の事の成ると否とは天命に候も、皇国三千年の歴史を擁護し奉らんとする小官

等の志の赴く所、何卒御酌取下されたし。尚齋死すと雖も魂は永久に生きて皇土を守護し奉るものにこれ有り候。最後に御両親様はじめ皆々様の御多幸ならん事を祈り申上げ候。益田先生、山崎先生、並びに田尻部落御一同様に宜敷くお伝え下されたし。齋

御両親様

殴り込み寸前にして

意気極めて軒昂

齋 見事に散りたるを聞き給わば

萬歳三唱致さるべく

女々しき振舞あるべからず

まりゑ殿日本一の妻であった

同じく佐藤章少尉（大尉）は山形県生まれ、九州帝国大学法科卒業、海軍予備学出身である。二十六歳と最年長だった。航空にしても海上にしても特攻隊員はほとんど独身だったが、佐藤には新妻があった。彼は日記にこう記した。

「わたただ死せんのみ、死せんのみ。日本民族は我々の死によって永遠に生きるのだ」

遺書は次の通り

「まりゑ殿

かねて覚悟し念願していた「海行かば」の名誉の出発の日が来た。短い間ではあったが、心からお世話になった。

俺にとっては日本一の妻であった。小生はどこにおろうとも、君の身辺を守っている。正しい道を正しく直く生き抜いてくれ。

子供が生まれたら、ただ堂々と育て上げてくれ。いわゆる偉くすることも要らぬ。金持ちにする必要もない。日本の運命を負って、地下百尺の捨て石となる男子を育て上げよ。小生も立派に死んでくる。充分体に気をつけて、栄えゆく日本の姿を小生の姿と思いつつ強く正しく生き抜いてくれ」

もう一人、渡辺幸三少尉(大尉)は東京生まれ、慶應大学経済学部在学中に海軍に入った。海軍予備学生出身である。元々海と船が好きで大学ではヨット部に属した。父を早くなくし伯父の世話になり苦労して育った。彼は姉に伯父が出してくれた奨学金は自分の遺産から利子を加えて返してほしいと頼んでいる。二十二歳である。辞世の歌は次のものである。

身はたとひ敵艦橋に砕くとも
御国安かれ兵我は

こんなにも幸福に死所を得た喜び

今西太一少尉(大尉)は伊三六潜から唯一人の突撃者である。十一月二十日午前五時前発進したが、その後伊三六潜は大爆発音を二回聴取、今西艇の

命中と信じた。京都出身、慶應大学を卒業した。二十五歳。

「お父様
フミちゃん

太一は本日、回天特別攻撃隊菊水隊の一員として出撃します。日本男子と生まれ、これに過ぐる光栄はありません。私達はただ今日の日本がこの私達の出撃を必要としているということを知っているのみであります。

上御一人(天皇陛下)に帰し奉るこの道こそ、太一二十六年の生涯に教えられた唯一のものであり、そのままの生き方を為し得る今日を喜ぶものでもあります。(中略)

最後のお別れを充分にして来るようにと家に帰して戴いたとき、実のところはもっとも苦しいものだろうと予想しておったのであります。しかしこの攻撃をかけるのが決して特別のものでなく、日本の今日としては当たり前のことであると信じている私には何ら悲壮な感じも起こらず、あのような楽しい時を持ちました。坂本龍馬、中岡慎太郎、木戸孝允と先輩諸兄の墓に詣で、ひそかにその志に触れたく思ったのであります。何も申し上げられなかったこと申訳ないことと思いが、これだけはお許し下さい。

お父様、フミちゃんのその寂しい生

活を考えると何んにも言えなくなります。けれども日本は非常の秋に直面しております。日本人たるもの、この戦法に出ずるのは当然のことなのであります。日本人としてこの真の生き方の出来るこの私、親不孝とは考えておりません。淋しいのはよくわかります。しかしこは一番こらえて戴きます。太一を頼りに今日まで生きてきて下さったことも充分承知しております。それでも止まらないものがあります。

フミちゃん、立派な日本の娘となつて幸福に暮して下さい。これ以上に私の望みはありません。お父様のことよろしくお願い致します。私は心配をかけた放しでこのまま征きます。その埋め合わせはお頼み致します。他人は何と言えお父様は世界一人の人であり、お母様も日本一立派な母でありました。その名を恥ずかしめない日本の母になつて下さい。この父母の素質を受け継いだフミちゃんには、それだけの資格があるのですから。何にも動ずることのない私も、フミちゃんのことを思うと涙を止めることができせん。

けれどもフミちゃん、お父様、泣いて下さいませ。太一はこんなにも幸福にその死所を得て行ったのでありますから。そしてやがてお母様と一緒になれる喜びを胸に秘めながら、軍艦旗

高く大空に揚がるところ菊水の紋章もあざやかに出撃する私達の心の中、何と申し上げればよいのでしょうか。

回天特別攻撃隊菊水隊、今西太一唯今出撃します。

お父様
フミちゃん

お元気で幸あれかしと祈っておりますます。すらすらのかげ草むすあら野べに咲きこそにはへ大和なでしこ

(伴林光平作)
元氣で行って参ります 出撃の朝
太一」

特攻隊員の遺書中もっとも心打たれる一つである。父とまだ年若い妹を残してゆくことに断腸の悲しみを抱きながら、この家族と祖国を護り抜くために回天特攻の最先陣に立つことを、「こんなにも幸福にその死所を得て」、「日本人としてこの真の生き方の出来る私」と言い切つて出撃した今西大尉の心はこの上なく気高く美しい。

姉上、母に代りて ご養育唯々有難く

パラオに向つた伊三七潜は十一月十九日、敵対潜部隊と交戦、撃沈された。四名の特攻隊員の一人、近藤和彦少尉(大尉)は愛知県出身、名古屋高等学校を出た。二十一歳。

「姉上様

顧みれば私がいまだいとけなき頃より母に代りて育くみ下され、かつまた私の向学心をば遂げ得させるため、想

いも及ばざる労苦を致し下され、ただただ有難く涙溢るるのみにて言葉もありません。これに報ゆるにはただ現在の与えられたる任務を完遂するよりほか何もありません。吾死せりと聞こし

召さば何卒お喜び下さい。決してあやしき振舞など致されぬようお願いし

す。万感胸に迫り筆また進まず、あまたた任務の成功を祈るのみ。姉上様、御壮健にてお暮しのほど祈り上げます。

姉上の子には必ず私の心を継がしめられんことを最後にお願ひします」

ああお母ちゃん

松田光雄海軍二等飛行兵曹（少尉）

は茨城県出身、古河商業より海軍甲種飛行予科練習生となった。昭和二十年四月二十二日、回天特別攻撃隊天武隊の一員として沖繩海域で散華した。二十歳。

「出撃前、ちよっとでも家で母に会えたならと念じたるは我が真の心なりき。しかれども我が子、祖国のために散りゆくを喜ぶ我が母あれば、子は安心して御奉公できるなり。」

母よ、ああお母ちゃん、光雄は護國

の鬼となり、母さんに面会に家に帰りますと、特眼鏡に映じたる水平線に祈りたり。

身はたとへ米鬼と共に沈むとも
笑顔で帰らん母の夢路に」

日本男子として

これ以上の喜びなし

川尻勉海軍一等兵曹（少尉）は北海道出身、北見中学から甲種飛行予科練習生となる。予科練から回天特攻を志願した軍人は多かった。昭和二十七年四月十四日、回天特別攻撃隊多聞隊として沖繩南方海域に出撃して散華した。十七歳。

「勉この度幸いにも日本男子として誉とすべき死所を得、醜艦撃沈せんと張切り居り候。昭和の聖代に生を享けてより十八年、志を大空に樹て大空の雲をわが墓標とせんとせしも、新兵器搭乗員として神潮特攻隊（回天特攻隊の別名）の一員となり、一途に体当たりへと邁進し来り候。

心ははやれど機到らず今日まで腕を撫して生き長らえしも、ここに好機至りて出撃できる身となり申し候。日本男子としてこれ以上の幸福、喜びこれなきものと存じ居り候。父上の子として川尻家の長男として恥じざる最後を為さんと心掛け居り候えは何卒御安心

下されたく候。弱冠十八歳の身をもって、一人二千殺の出来得る身をお喜び下されたく候。

父上様はじめ皆様先立つ罪は何とも申し上げる言葉もなく、唯々お許し下さいの一語にて候。しかれども大義親を滅すとか、神州日本に最大の危機

に至らんとする今、先立つも忠に発したればまた孝なりと信じおり候。生れしより受けし数々の御恩返しもなすことなくして散りゆくは心苦しき次第に候も、またいづくかの世にて御孝養つくすべくその折を今より楽しみに待ち居り候。（中略）

日本に如何なる危難襲うとも、必ずや護國の鬼と化して大日本帝国の楯とならん。身は大東亜の防波堤の一個の石として南海に消ゆるとも、魂は永久に留まりて故郷の山河と同胞を守らん。

身は消えて姿この世に無けれども
魂残りて撃ちて止まん
予一人にて米鬼を皆殺しにせんとの決意にて候。はるか南溟の果てに皆様の御健康ならんことをお祈り申上げ候。

御両親様、近所の方々、山尾様、坪谷様、畠山様、水野様、中川様、山本様、加藤様に永年の御高恩を謝しつつ喜んで死んで行きましたと呉々もよろしくお伝え下されたく候」

いまだ十七歳の少年であるが、実に

立派である。このような若人が回天特攻の勇士として神州日本をとわに守る為護國の鬼と化したのである。

日本人の心に刻まれる 不滅の血涙の歴史

昭和二十一年十一月七日、岐阜県下呂町で黒木博司少佐の葬儀がとり行われた。六日のお通夜のとき両親、家族、親戚、知友の前で恩師平泉澄は次の通り挨拶した。

「黒木少佐の御生前御奮闘の事は実に目覚ましいことでありまして、その御言葉また書かれましたもの、その行いが我が海軍に及ぼした刺激は実に大きいものであります。ひとりわが海軍のみといわず日本国全体に士気を鼓舞しましたのみならず、直ちに敵に対して強烈な打撃、甚大な影響を与えましたことは誠に顕著なものがありません。今度の戦争には万事手違い多くの不運嘆いて及ばずこの不運の時に若し黒木少佐出られず、あの大きな働きなければ今度の日本の不運はどれだけ悔を残し残念を多くしたか知れませぬ。日本としてやれるだけの事をやっただけという爽快さ痛快さを持ち得、今の人に僅かな慰めを与え、後世子孫の為に非常な力となり永久に残るものでありま

す。その回天の大成功ならず逆境不運
 であつて、その気塊きくわい、その努力、その
 勇敢さ、よく敵を震撼しんげんさせた事必ずや
 後世に感激感銘しんげんを与えるに違いない。

このことを考えますと黒木少佐が国家
 不運の時に出了られたのは非常な神意と
 確信するのであります」

わずか二十一、二歳の一下級士官に
 すぎぬ黒木が周りの多くの反対、無理
 解の中で遂に回天特攻を創始したこと
 が、その最終目的とする航空特攻を導
 き、海軍そして陸軍あげての特攻を終
 戦時まで展開せしめ、それがアメリカ
 軍に与えた物理的・心理的打撃は計り知
 れぬものがあつた。特攻に加うるに硫
 黄島を始めとする玉碎戦たまつぶしが米軍の損害
 を著しく増大させた。それが結局、ア
 メリカをして無条件降伏要求を断念さ
 せ日本の国体を認める有条件降伏要求
 に緩和させるもつたのである。

黒木、仁科両少佐を代表とする回天特
 攻勇士の祖国を亡国より救つた純忠至
 誠は不朽不滅である。両少佐の高貴な
 る精神と行動は維新の志士達と比べて
 寸分劣らない。日本人の心の奥底にと
 こしえに刻まれるものこそ、神風特攻
 とともに回天特攻の血涙の歴史でなけ
 ればならない。(完)

黒木少佐の葬儀は昭和二十一年十一

月七日下呂の自宅で行われたが、前日
 の通夜で平泉澄先生の述べられたこと。
 (平泉博士と黒木少佐の關係は前号に
 ある)

通夜における平泉先生の御挨拶

御挨拶申し上げます。御挨拶申し上げた
 いと思ひますが、色々の感じがこみあ
 げて参りまして、どこから申し上げれ
 ばよいか言葉もまとまりかねます。

黒木少佐の御生前御奮闘の事は実に
 目覚ましい事でありまして、その御言
 葉又その書かれましたもの、その行ひが、
 我が海軍に及ぼした刺戟は実に大きい
 ものであります。独り我が海軍のみと
 云はず、日本国全体に士気を鼓舞し影
 響を与へました事、誠に大きいものが
 ございます。独り我国の士気を鼓舞し
 ましたのみならず直に敵に対して強烈な
 打撃、甚大な影響を与へましたこと、
 誠に顕著なものであります。

永年、黒木少佐と懇意に交はること
 が出来まして、先程、鄭重な御挨拶が
 御座いましたが、私共こそ却つて非常
 な益をうけました。その見事な黒木少
 佐を育てられました御一家又御親戚に
 対し、感謝と尊敬の念に堪へません。

世が世であれば、かゝる見事な人の
 お葬式といふ事ですと、全国的に言ひ
 伝へ語り伝へてお弔ひする、従つて盛
 大なるべきであります、又知れるか

ぎりの友は遠近より馳せ参じ御通夜致
 したのであります、不幸今日の状
 態に於きましては、世間に内々に致さ
 ねばならず、私共战友の中には志あれ
 ど事情により出席できないものもあり
 まして、斯く僅かの者が馳せ参じまし
 た事、誠に相済まぬところで御座いま
 す。馳せ参じたのは僅かな者でありま
 す上に、私共心持に於いては出来る限
 りの事をさせて頂き、霊前にも出来る
 だけのお供へを致し、御両親・御兄妹
 にも出来るだけのお慰めを致したいの
 であります。然るにそれも何の心も尽
 し得ませんで、却つて御厚意に甘え御
 馳走を頂いてをりますことは、衷心慚
 愧に堪へぬところで御座います。

お願いが一つ御座います。本日の御
 通夜で御座いますが、総て簡単に御省
 略されるとのこと、若し御賛成下さ
 るならばかうさせて頂き度い。神式な
 らば祝詞、仏式ですと御経であります
 が、今日はそれもなき為、その両方の
 代りに、服装も整はず言語も拙いので
 すが、私の詠みました歌をよみ上げさ
 せて頂き度いと存じます。その後で御
 家族・御親戚・戦友の順で玉串を奉奠
 させて頂き、それで式を一応終りまし
 て、その後で故人の思ひ出を色々御伺
 ひ致し度いと思ひます。どうか宜しく
 お願い致します。

お願い致します。

黒木少佐を弔う

- 一、秋ふけて 飛驒の山々
 もみぢばに 映ゆるを見れば
 想ひいづ 純忠の士
- 一生涯 頂天立地
 報國の 丹きまごころ
- 二、笑止なり 世の顯官
 廟堂の 高きに立てど
 情報は 余すなけれど
 見通さず 国の行末
 徒らに 月日を送る
 君思ふ ま心をのみ
- 三、唯一の たよりとなして
 眺むれば 火を観る如し
 盟邦の くらき運命
 わが国の 苦しき歩み
 眠られぬ 夜をば徹して
 血もて書く 非常の策
 謹みて 上に献じつ
 浪くぐる 決死の術
 難きをば 自ら擔ふ
- 五、皇國に 幸しありせば
 いしづみに 黄金ちりばめ
 琅玕ろうかんの 墓をも立てて
 いさをしは 村々傳へ
 口々に ひろく讃えむ
- 六、今集ふ 友わづかにて
 とぶらひは 寂しくあれど
 天かけり 見ませみ霊よ
 血に泣きて 沈める月の
 消えやらぬ 影悲しむを

今期の戦史 ⑧

ガ島の攻防 (4)

海軍の作戦 (続)

(1) ガダルカナル攻防戦と

「東京急行」

東京急行(トーキョー・エクスプレス)は、ラバウルからジョーランドに運ばれてくる兵員や補給品を、駆逐艦で夜陰に乗じて高速力で三〇〇哩遠方のガダルカナル島に揚陸する苦肉の緊急輸送作業に対してアメリカ側が名付けたものである。それは多数の島々の間の水路(スロット)を縫って駆逐艦がほぼ定期的に往來することから、急行列車にたとえて、いみじくもトウキョー・エクスプレスと呼んだのだ。昭和十七年八月十八日から次の年の二月七日までの間の暗夜には、ほとんど欠かさず運航されており成功したものの四五回、不成功を含めれば五〇回以上に達している。このほかに潜水艦によるものが二五回を数える。日本側では夜間すばやく鼠のように行動するので鼠輸送と呼んでいた。この東京急行に従事した駆逐艦は延べ一〇〇隻以上にのぼっている。

鼠輸送とドラム罐輸送

東京急行の第一列車ともいふべきものは、田中頼三少将の率いるガ島増援部隊(第二水雷戦隊)に所属する六隻の駆逐艦が二二節の高速で一路南下し、

予定どおり八月十八日の夜ガ島のタイボ岬付近に一木支隊(九〇〇名)の揚陸に成功したことである。しかし、八月下旬に二回にわたりガ島進出は中止され、二水戦は陣容立て直しのためいったん第一線から退いたが、その際田中司令官は「小艦艇による上陸部隊の逐次的な増強法は、それに関係のある部隊全部を小刻みに撃滅される危険にさらすものである。よろしく、大部隊を一挙に使用するよう努力すべきである」と建策したが、その方法はまもなく十月末に実施されることになった。

九月一日から第二水雷戦隊に代って第三水雷戦隊(橋本信太郎少将)の駆逐艦八隻が登場し、十一月上旬まで二回にわたり東京急行に従事したが、八月下旬の一木支隊、九月中旬の川口支隊、十月下旬の第二師団および川口支隊の総攻撃はすべて失敗し、さらに上陸軍は弾薬糧食に欠乏し、悪疫の流行に悩まされ、ガ島奪回の企図はほとんど絶望状態に近かった。しかし、統帥部は奪回の希望を放棄せず、あと一回の総攻撃を行うことに決して、第三

八師団をガ島に強行輸送することになった。しかし、十一月中旬に決行されたこの大がかりな輸送作戦が大失敗に終わったことは、本文に見るとおりである。

第三八師団主力の輸送は大失敗に終わり、ガ島奪回の企図はついに水泡に帰してしまっただが、今度は一万数千名の上陸部隊に対する弾薬、糧食類の補給が重大問題となってきた。島内は栄養失調と病人が続出し地獄の様相を呈しはじめていた。いよいよ戦闘艦艇を糧食、医薬運びに使用せねばならなくなった。そこで考案されたのがドラム罐(二〇〇個以上)輸送である。

その第一回は十一月三十日に実施されたが、ドラム罐搭載艦六、警戒艦二であった。同夜この輸送隊がガ島の揚陸点に近づいたとき、突如として敵の重巡五と駆逐艦五が出現してここに有名なルンガ沖夜戦が展開された。指揮官田中少将はこの交戦について後日、「わが方はきわめて不利な態勢から起ちあがり、よくその真価を現したのは日本駆逐艦乗員の多年の苦心精進が実を結んだ結果だ」と淡々と述べた。この田中提督は、アメリカ側では陸の牛島將軍とやらで日本の二人の名将の一人だと称揚された。だが日本では不思議にもほとんど誰にも知られなかつた。

こうして、第一回の輸送は失敗に終わったので第二回が十二月三日に駆逐艦一〇隻で決行され今回は成功した。第三回は四日後に同数の駆逐艦で実施されたが、敵魚雷艇多数に妨害されて失敗に帰した。十二月十一日の駆逐艦一隻(旗艦「照月」)による第四回は揚陸に成功したが、旗艦が敵魚雷の命中を受け沈没し、田中司令官は負傷した。このころより月夜となり、ドラム罐輸送は第四回で中止となり、その後はガ島將兵の撤収作戦の準備がはじめられた。

太平洋戦最大の奇跡
大本営は東京急行によるガ島増援作戦を中止するとともに、撤収作戦を二月三十一日に決定し、十八年一月四日に撤収作戦(「ケ」号作戦)が発令された。日本側は二月一日より七日までに三回にわたり、延べ巡洋艦一、駆逐艦六〇隻をもってガ島所在兵力を撤収し、合計一万六五二名を收容したが、その間「巻雲」が機雷により沈没した以外は四隻が損傷したにすぎなかった。聯合艦隊司令部が、この撤収作戦で半数の駆逐艦を失うことを覚悟していたことを考え合わせれば、幸運と同時に日本駆逐艦がいかに巧妙に敵機や魚雷艇の攻撃を回避したかの実証ともいえ

よう。

アメリカ側はこの撤収作戦にまったく気がつかず、むしろ日本軍の増援作戦とばかり思い込んでいたらしい。

二月二日の午後早く、アメリカ側の沿岸監視員と偵察機は、二〇隻の日本駆逐艦がヴェラ・ラヴェラの北方を高速で南下中と報告した。これは「ケ」

号作戦の第一次梯団だったのだが、それはちょうど軍隊を揚陸させようとする増援行動のように見えた。四日の午後一隻の巡洋艦と二隻の駆逐艦が狭水道を突っ走っているのが発見された。

二月八日の朝、エスベランス岬の海岸には空っぽの舟艇のほかは何も発見されなかった。

(2) ガダルカナル撤収作戦

(イサベル島沖海戦)

異例の大本営会議

昭和十七年もいよいよ押しつまった十二月末日の午後遅く、異例の大本営御前会議が開かれた。そして、この御前会議の決定が年が明けるやいなや一月四日に、次のような大本営命令となって下令されたのであった。

「陸海軍協同しあらゆる手段を尽くして、概ね一月下旬より二月月上旬にわたる夜間を利用し在ガ島部隊を撤収す」
ところで、これよりさき、撤収まで

の餓死寸前の守備隊を救う応急策がとられねばならなかった。その第一陣は十七年十一月下旬の四夜にわたる潜水艦による食糧輸送であった。この四回で揚陸できた糧食は、わずかに米二八五〇俵、乾パン七〇四箱その他にすぎなかったが、絶望のガ島将兵を蘇生させるに役立った。

さらに十二月三日を第一回として七日、十一日の三回にわたり駆逐艦延三二隻をもってドラム罐二七〇〇個の糧食を投入したが、陸上に揚収できたのは七二〇個にすぎなかった。しかも、その間に「伊3潜」と駆逐艦「照月」を失うに至った。

撤収作戦の準備と計画

一万名を超える在ガ島の将兵を月暗の短期間に敵前撤収する作戦は難事中の難事であったが、山本長官は基地航空部隊の大部と虎の子の駆逐艦の全部に近い二二隻をこの作戦に投入することを決意した。

撤退は二月一日、五日および十日の三回に分け、第一回は傷病者、海軍部隊および第三八師団、第二回は第二師団および軍直轄部隊、最終の第三回は新たに送られた援護部隊を収容する計画であった。

さらに、この撤収計画を遂行するため、一月十五日までに糧食三週間分を

輸送すること、一月十五日に歩兵一個と推察していたようだ。

やがて二月七日の第三回撤収がやってきた。この回もほとんど前回と同様の経過をたどって、一九隻のうち一隻が落伍しただけで、陸軍一七二一名、海軍七五名が無事収容された。

戦史上の奇跡

以上がガダルカナル撤収作戦のあらましであるが、大本営発表はこの猛烈な攻撃を受け一隻が損傷したので、それを曳航して引き返した一隻を除く一八隻が突入した。来襲した魚雷艇は一隻残らず撃沈または撃破した。

待ちに待った撤退の開始であった。陸軍四四九四名および海軍四四一名を収容し、ただちに帰途に就いた。引揚時に「巻雲」が敷設機雷に触れたので自沈したほか被害なく、第一回は予想以上の成功を収めた。

第二回の撤退は二月四日、駆逐艦一九隻をもって行われた。一隻が六十余機の攻撃を受けて落伍したほか、陸軍三五八九名および海軍三三二名を収容し無事ショートランドに帰着した。日本軍の撤収企図をアメリカ側は大規模な新攻勢と信じていた。すなわち、ソモン群島の北東方に進出したわが第二艦隊の兵力一戦艦四、巡洋艦六、駆逐艦一二を索敵機が報告したのを聞いたハルゼイ司令部では、「山本提督はこの期におよんでも、まだガダルカナルを奪回するつもりでいるらしい」

「古今の海戦史をひもどいて、日本軍のキスカおよびガダルカナルの撤収作戦ほど巧妙かつ手際よく行われたものは未だかつてない。」

また、二月九日の午後日本軍の完全撤退をはじめ確認したパッチ將軍は、ハルゼイ提督に次の電報を打った。

「私は貴官の命令に対して、以上の成り行き(撤退の確認)を報告することを甚だ欣快とするものであります。……いまや「東京急行」は終着駅ガダルカナルの看板をおろしました。」

顧みれば、十七年八月、米軍の上陸このかた半年の筆紙につくしがたい悪戦苦闘も空しくガダルカナル島の星条旗を引き降して、日章旗を再び掲げることは、ついにできなかった。そして「転進」という撤退の苦しい新造語だけが空しく後世に残ることになった。

(3) 恨みは深しガダルカナル

ガダルカナル戦の両軍の損害

まるまる六か月間にわたる筆紙につくしがたい困苦と艱難と恐怖の連続の後に、二五〇〇平方哩の熱病の巣である平原と千古の密林と未開の山地は、アメリカ軍の手中に帰した。それはいったいどれだけの代価を支払って手に入れたものだったか。

直接の陸上戦闘による米軍の戦死者は一七五二名ということである。一方、米海軍の戦死者は正確に集計されたものを見当たらないが、陸軍や海兵隊の数字を上回るのは確実である。第一次ソロモン海戦の戦死者だけで一〇二三名であり、第三次ソロモン海戦の第一日に、日本潜水艦「伊26号」に雷撃さ

れた軽巡「ジュノー」の戦死者だけでも七〇〇名に達しているほどである。

鉄底海峡(アイアンボトム海峡)と呼ばれる水道付近に沈没した戦闘艦艇二九隻の戦死者や行方不明者の数を平均一〇〇名と見積っても、その合計は三〇〇〇名を上回るのは確実である。航空隊は三隊だったが生命を捧げた人数は百数十名となっている。

一方、日本軍はガダルカナル戦に参加した三万七〇〇〇名のうち約三分の二を失った。内訳は一万名内外が戦死または行方不明、九〇〇〇名が戦病死し捕虜もいくらかあった。さらに数千名の将兵が沈没した商船やハシケなどで沈み生命を失った。また、激しい海戦で失われた乗員の数も決して少なくはないことは確実である。そしてまた、ガダルカナル半年間の作戦における両軍の戦闘艦艇の損失数が偶然の一致とはいえまったくの同数―二九隻―であったことは、奇妙な暗合といわねばならない。

ガダルカナルは地名ではない

アメリカの中央当局やニミッツ司令部からみると、ガダルカナル戦は代価として支払った艦艇、飛行機および生命の全部にふさわしいものだった。なぜなら、それによって日本軍の目的地への貴重な跳躍の足場をくつがえして

しまったからだ。そして、ラバウル攻略を目標とするはしごの第一段は、てまどりはしたがしつかりと踏み出されたからである。

ともあれ、ガダルカナルが日米両軍にとつて、いかに血みどろな決闘場面の連続であったかを、高名な戦史家であるサミュエル・モリスンは、まざまざと鬼気せまる言葉で述べている。

「われわれにとつて、ガダルカナルはもはや一つの地名ではなくて、一種の得もいわれない感動にはかならぬ。それは絶体絶命の空の死闘、狂暴そのものの海上夜戦、気狂いじみた補給活動と建設作業の繰り返し、ジメジメした水びたしのジャングル内の陰惨な格闘白兵戦、すすり泣くような甲高い砲弾や爆弾のうなり声や、耳も聾せんばかりの艦砲の炸裂に夢を破られる、日毎夜の毎の思い出に胸をしめつけられる、その思い出につきまといわれる感慨である。

私は時々、ガダルカナルにおける世紀の激戦の一大記念碑に想いをめぐらすことがある。それは一つの花崗岩の尖塔であるが、その表面には生命をささげたすべての人命と、アイアンボトム(鉄底)海峡に眠る全艦船の名が刻みこまれているものである。

また、ある時は血で濃くなった海峡の波の上に、永遠にそびえ立っている

あのギザギザしたサヴォ島こそは、潮のように打ち寄せた日本軍を巻き返し、はね退けた将兵や艦艇に対するこの上もない記念碑ではなからうかと夢想するのである。

ガダルカナルの国力差のパロメーターだったガダルカナル攻防戦の海軍戦闘艦艇の喪失が、日米両国とも二九隻であったことを単純に考えると、この海上作戦はいかにも互格に終わったような感じを受ける。それなら、日本が敗退したのは何故であるか。それは日米国力(軍需生産力)の大差が一見同等に見える損害の裏に、じりじりとしかもはつきり影響してきたことを雄弁に実証しているのだ。金持ちと貧乏人に与える同額の出費の痛さを比較してみればよい。損害高は喪失のほかに、さらに損傷を同時に考える必要があるが、この点で日本側はアメリカ側に比しはるかに大きな打撃―日本軍四二隻、アメリカ二七隻―を受けたことを見逃すわけにはいかない。なぜ、損傷が問題かといえ、それは修理能力の大小や遅速によつては、すぐに戦力全体にひびくからで、一隻の修理に数か月もかかるとなると損傷艦艇が多いことは大きな不利をもたらす。日本側の修理能力はアメリカの十分の一もなかったから、日本の受けた打撃はさらに深刻の度を

平和へのみちしるべ(抄①)

知覧特攻平和会館参観者の声

この『平和へのみちしるべ』は、知覧特攻平和会館が第50回知覧特攻基地戦没者慰霊祭記念誌別冊として発行されたもので、同会館の見学者ノートや手紙に記載された参観者(小学生から元特攻隊員まで)の率直な意見や感想文の中から一部を抜粋収録されたものである。同会館のご了承を得て、全75篇中その一部を2回に分けて転載させていただきます(順不同)。なお、事柄の性質上参観者名は匿名とさせていただきます。



①小学四年女子「平和会館の皆様へ

このあいだは、戦争の事をいろいろと教えてくださってありがとうございます。心がいよいよ悲しいしかわいそうだ

と思いました。まだ、十七歳十八歳の若い人まで死んでしまう事を聞いて、私はその時はじめて戦争のおそろしさを知りました。特攻前日の写真にうつっている少年飛行兵の五人の顔を見ると、なみだが出てきそうでした。今の時代が、とても平和なのは戦争でたまたた人たちのおかげだと思いました。本

当にありがとうございます。」

②小学四年男子「あんなに若い人が日本のために死んでいくのはすごくかなしいです。今こんなに自由で幸せなのはその人たちのおかげだと思います。」

③T女「この特攻遺品館にはもう二度見ると何も言えず：本当にこの方々の志あって、私達は救われたのだなあ日本国は救われてきたのだなあ：としみじみ思われてなりません。遺書を読ませて頂きました。「どうかよろこんで下さい」と書かれてあった。お父様、お母様にどんな切ない気持で筆を取られたのだらうと思います。

戦後の日本人は、平和・平和を唱えつつも、その言葉が何と先人の魂を理解されない軽薄な言葉かとうんざりします。特攻隊の方々が護りたかったものは、果たしていまの平和なのだろうか：と思います。

戦後、生き残られた方々が口をつぐ

んでいらっしやるのは、戦後の日本人が「平和」を叫びつつも、彼らの志を忘れ去ってしまったからではないかと思えてなりません。

私達は戦後に生れてきた。しかし、そうであればこそ戦中を必死に生きられた方々の志をわがものとし、先人の魂だけは、我が内に決して死なせてはならないと思います。

特攻隊の方々は、私たちの永遠の鏡です。」

④元特攻隊員「当時を思い出し涙にくれました。青春に悔いなしと思ったあの頃、私はそれが当時の本当の心でありましたが、今にすればどうか私にはわかりません。

生き残っただけでも幸せと言えますが、心は重いものが残っています。」

⑤T男「この遺品館はこれで四回目、だらけた自分を立て直すにはここに来れば、また新たにやるぞと言う気持ちを奮い立たせてくれる。若くして国のために尊い命を捧げた激戦の中であって、今の世はなんとパラダイスなんだろうと感ずる。

⑥N男「戦争はしない方が良い。しか

し、国が攻撃を受けた場合は守るために命をかけて戦わなければならない。そうです、あの頃私は死ぬ気でいました。それくらいに気持が私の友達を含め、その時代の少年達にはあったので

す。その頃の教育は軍、産業、新聞の主導のもと戦争に勝つ、戦うための教育がなされたのです。知事も市長も村長も隣組のおじさんも国民を戦うためにおおりました。

国を守るための戦争と、外国の領土をかすめ取るための戦争は質が違います。外国へ軍隊を送るような指導者は支持しないようにし、今の国土を攻められた場合は命をかけて戦うことに賛成するのです。

そのためには政治をする人を十分知り、新聞やテレビの報道などにもウソが多いので、平素よりいろいろな本など良く読み、何が本当かを見極める力を養いましょう。これが悲劇を作らない道なのです。」

⑦A女「遺書に書かれていた母への思い、その他いろいろお世話になった方々への感謝の気持ち、どうしても言っておきたかったんでしようね。

面と向かって言ってみたかったけれど言えなかった。せめて書面にぶつきたい、なんかすごくよく分かります。今の人々は死と向き合っていないので

感謝の心を忘れかけている。今からでも遅くない御世話になった方々に感謝の気持ちを直に伝えたい。」

⑧O男「四年前、「空よ海よ息子たちよ」を見て、感動し、その場所に来れるとは思ってもみなかった。靖国参拝とか、政治家が公式にお参りするのは憲法上問題があるとか：そんなこと全然問題外であり、今の幸福な日本があるのも、戦争で命を捨ててまで敵国と戦って下さった皆さんのお陰であるのは誰が何と言おうと当然の事であり、つまらない事でぐずぐずもめているのに腹立たしく感じます。別に参拝したから軍国主義ってわけじゃないのに：。たとえばどんな宗教であっても手を合わすという事は大事な事だと思えます。」

⑨K男「今日九州の旅で一番来たかったのは、ここ知覧だった。此処へ来て本当に良かった。特攻隊の若者の写真を見ると皆すがすがしい顔をしている。今の若者にこんな風貌の人が何人いるか。かく言う私も二四歳。彼らと同年代になってしまった。」

太平洋戦争について研究すればするほど、特攻で死んでいった若者がかわいそうでならない。彼らは七生報国を胸に死地に赴いた。私もあの当時の状況なら同じ事をするだろう。あの戦争について人はあれこれ言う。

しかし、国の為、日本の人々を守る為、自ら志願し空に飛び立った若人の清く澄んだ心、それだけは、尊び続けたい。それは、今平和を享受している我々日本人の責務ではないか。」

⑩少年自衛官「自分は今、航空自衛隊の少年自衛官として熊谷の地で勉強、訓練に励んでおります。」

熊谷基地は陸軍時代には、少年飛行兵学校を中心とした航空操縦教育が行われておりました。建物などは今でも残っており使われています。

同じ十五、十六歳で国防という世界に身を投げ散っていかれた特攻隊員の皆さん安らかに眠り下さい。自分も日本の平和を願い、戦争が、悲しい戦争が行われないように微力ながら努力して参ります。

特攻隊員の皆さん、次に生まれ変わった時には青春を人生を楽しんでください。」

⑪O男「戦争が反対だの何だの言う前に四〇年前に日本の将来を案じて散られた方々に深い感謝の気持ちを抱くのが、我々のすべきことではないか。

ちなみに、このノートに書かれる諸氏のほとんどは「戦争は二度と起こしません」とか書いてあるが、今まで日本が起こした戦争など一度もない。(太平洋戦争でなく、大東亜戦争であ

ることも留意)

この資料館が、反戦教育に使われるのではなく、明日の日本を見定める確かな証拠としてあることを切に願う。」

⑫H男「戦争反対、それは極く当たり前の事である。それよりも、特攻隊の方々が何を考え、何を信じていたのかという処に視線を向ける必要があるのでは無いだろうか。遺書を一読すれば分かる、家族の絆が非常に強いものである。これが現代社会にあるだろうか。むしろ消えつつあるのでは無いだろうか。

ある共産主義者がこう言った。「戦争未亡人は再婚せず、夫への愛を貫いているのに、戦後、平和憲法に守られ、民主主義の恩恵に浴した人々がコインロッカーに赤ん坊を捨てる。どちらが良いのか、私には分からなくなった」と。

PKO反対、それは軍国主義への道であるからだとする意見が、このノートにもずいぶんせられていて、なぜそんなに飛躍した論理が生まれるのか一度聞いてみたい。軍事力を持つ国が軍国主義の国であるならば、世界中の国は軍国主義である。世界総軍国主義化だ。そんな事ある訳が無い。一寸頭を冷やして考えてみて欲しい。

戦争反対と叫ぶのは、地震反対とか台風反対とか叫ぶ事と同様であり、敢

えてスローガンとする必要は無い。それをスローガンとしている人達は、自分がそういう人になる危険性を秘めているか、それを恐れているか先入観念にとりつかれているかである。」

⑬M男「二度目の来館です。いつも感じる事ですが、同世代の若者として今の私達は何て幸せなんだろうと思えます。戦争は愚かなものだということももとより、私を含めて今の世代は、命の尊さ、生きているということの素晴らしさを、もっと認識しなければいけないと思いました。」

⑭S男「何度かこの特攻の聖地に足を運びます。自然に脚が向いてしまうのです。小生も数え年二〇歳で、この南薩の浜辺で護南二四〇八部隊のコマンドとして終戦をむかえたものです。この地を永久の基地として考え、祖国防衛の為、心血を注いだ地として生涯忘れることができないのです。

同年代の若桜が散華して征ったのです。その気持ちは痛いほど分かります。老いた父母を敵靴に蹂躪させてなるものかとの気持ちは、あの時の全若人すべてを抱いていたものだと言言できます。

今日は、語り部の親切な説明に涙し感謝するのみでした。今日のご縁を胸に秘めて又来ます。」次回(抄②)へ

川南護国神社例祭参加の記

田中 賢一

川南護国神社のことについては、既に何回か述べたが、創立の由来と年次例祭のことなどについて、世に広く紹介しておきたいので、要点だけ重ねて述べる。なお、今回は自衛隊空挺団長岡部将補以下数名が同行したので、伝統を継承してもらうため、現地で説明したことも併せて記事とする。

護国神社創立の由来

川南村には陸軍挺進部隊の大半が駐屯していた。陸軍挺進練習部の管内に挺進神社があり、挺進部隊戦死者をお祀りしてあった。戦後その取扱いに苦慮したが、宮崎市内にあった師範学校が戦災で焼け出され、一時兵舎を使うことになり、男子部長が生徒の精神教育に役立つというのでお任せした。ところが二十一年の春米軍が来て、神社を焼き払ってしまった。

その後軒余曲折を経て村の中央の要地に靈堂を建て、村の戦死者六三四柱と挺進神社一万有余の御祭神を祀ることが出来た。それには現地居住の挺進部隊復員者の悲願と奔走があった。その後講和条約が成立し我が国が独立を恢復した後、遺族会が靈堂を本殿とし

拜殿と鳥居を建て神社とした。なおその後本殿が老朽したので新築したが、このときも我々復員者が応分の協力をした。

例祭の実施

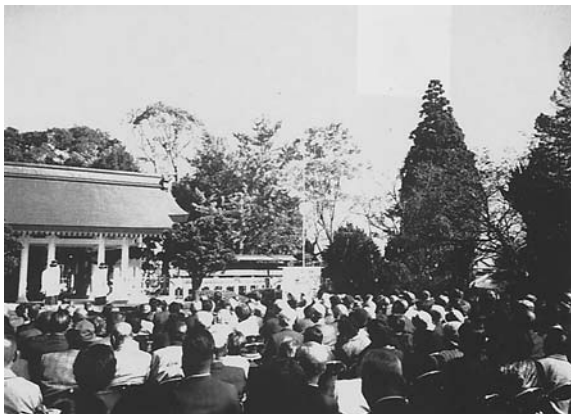
毎年十一月二十三日に町長が祭主となり、町を挙げて行われる。受付は各学校区毎に設けられ、最寄りの商店街ではこのような幟がかかげられる。神楽を奉納するのは中学校の女生徒で、行事一切の運営は役場の職員が行う。町の各機関や組織からは代表者が参加している。



神楽奉納



表通り



今年は雨天だったので、ここに披露する写真は一部昨年のものである。

国旗掲揚は都城の自衛隊員が行い、都城、えびのの両陸上自衛隊からは連隊長が、新田原の航空団からは団司令が参加する。習志野の空挺団からは団長以下数名が参加する。以上のことは例年変わらない。陸軍挺進隊員と自衛隊空挺退職者で構成している空挺同志会では、県下だけでなく遠隔地の支部からも参加している。嘗ては旧軍の戦友も大勢参加したが、今は寥々たるものになってしまった。

例年通り私は戦友代表として次の一文を奏上した。

空挺部隊の御祭神に奉る辞

川南護国神社に神鎮まる先輩同僚に老耄の落下傘兵謹みて思いを述べ 光陰矢の如く諸霊と志を同じくし武を練り戦の庭に臨みしより六十数星霜を経ぬ 挺身殉国を合言葉とし国軍の先頭にありて精鋭類なき我ら緒戦パレンバンの栄光に意気愈々揚がりぬこの地瀨原に連日落下傘の花咲き 地上戦闘訓練に夏草も茂げらざるほどなりき 聖戦三年全般の戦局類勢甚だしきも乃公出でずんばの意気高く比島決戦場に向かいぬしかれども大廈の倒れんとするや一肱の支うる能わず レイテに血戦しルソン・ネグロスに死闘し屍を異境に曝しぬ 義烈特攻の烈士に至りては戦勢打開の為欣然として帰らぬ出撃に就けり ここ神前に立てば在りし日の英姿彷彿として臉に浮かびぬ 諸霊は匂うが如き若武者なるに我は杖を頼りに罷り越し神前に佇む

(中略)

後に続く者あるを信じて逝かれし英霊ここに連なる戦友年々減少し類齢微力なるも諸霊の戦いし史実と精神を後世に語り伝えるを終世の任とすべし 乞う憐せ賜え この社に斎き祀らる地元御出身の英霊に申し上げ 我ら若き日この地にありて具さに素朴なる人情に感銘を覚えたり うぶすなの神々なれば畏敬の念只ならず この聖域に神鎮まりて郷土を守護し給え

平成十八年十一月二十三日

落下傘部隊戦友代表 田中賢一



護国神社の裏庭には我々が建てた二つの碑がある。その一つは空挺落下傘部隊発祥之地」という大きな碑である。碑の背後には小運動場があり、その先は樹木が繁茂して見通しがきかないが、嘗てはここから先は広大な降下場だった。この碑を建てた頃はまだ開闢しており、往時を思い起こす絶好の場所だった。

この碑の土台には「花負いて…」の歌が刻んである

レイテ空挺作戦で第一次降下部隊がアンフェレス飛行場を発進したあと、宿舎の壁にこの歌が書き残されていたのを、毛利義治衛生兵が手帳に写し取って戦後私に告げた。この人はレイテ降下には加わらず、ルソン島で戦い辛く



も生還したが今は亡い。19年12月6日レイテに降下した白井聯隊長以下四百数十名に一人の生還者も無い。この歌の詠者も御社に祀られているのだと思ふと感懐只ならぬものがある。

もう一つの碑には、川南護国神社創立の由来と、陸軍挺進部隊の全部隊名と内地における所在地を刻んだ銅板が埋め込んである。神社の御祭神が所属した部隊名を、これにより正確に後世に伝えることが出来る。



陸軍挺進部隊一覽

所在地が数箇所あった部隊は最も長く所在した場所を示す

- | | |
|----------------|------------------|
| 陸軍 挺進練習部 (川南) | 挺進飛行第二戦隊 (新田原) |
| 第一 挺進集団 (川南) | 滑空飛行第一戦隊 (西筑波) |
| 第一 挺進団 (川南) | 第一、第二飛行場中隊 (新田原) |
| 挺進第一聯隊 (川南) | 第三百三飛行場中隊 (西筑波) |
| 挺進第二聯隊 (川南) | 滑空歩兵第一聯隊 (西筑波) |
| 第二 挺進団 (川南) | 滑空歩兵第二聯隊 (西筑波) |
| 挺進第三聯隊 (川南) | 第一挺進戦車隊 (川南) |
| 挺進第四聯隊 (川南) | 第一挺進機関砲隊 (西筑波) |
| 第一挺進飛行団 (新田原) | 第一挺進工兵隊 (川南) |
| 飛行団通信隊 (新田原) | 第一挺進通信隊 (川南) |
| 挺進飛行第一戦隊 (新田原) | 第一挺進整備隊 (川南) |

古い碑に秘められた史実 「八勇士殉職之碑」

宮崎県高鍋町小丸川北岸台上の高鍋大師境内にこの碑がある。

嘗て挺進第三、第四聯隊の戦友達だけでなく近在の村人達も、この碑を榊原中尉が建てた碑と呼んだ。初めは小丸川の堤防上にあつたが、堤防改修工事のとき現在地に移された。



小丸川の悲劇

十八年六月十八日のことである。挺進第四聯隊では落下傘降下訓練を終了し新しく所属になった将校に、挺進部隊指揮官らしい実兵指揮の集合教育を行っていた。この日教官は榊原中尉だった。榊原は唐瀬原に降下して高鍋町にある軍事施設占領に向かうという想定で、その部隊の尖兵長という構成の演習を計画した。小丸川の橋梁は敵の火制下にあり、渡渉させるように仕組ん

であつた。勿論榊原は事前に自ら渡渉し安全を確認してあつた。

演習小隊長伊藤中尉は小丸川左岸に進出し、仮設敵が橋梁を縦射していると見るや、下流の方に迂回して先頭に立つて渡渉した。ところが前日上流の山間部に大雨が降つたらしく、川は増水しており全員が押し流されてしまった。対岸に辿りついた者もあつたが、伊藤中尉以下八名は行方不明になつてしまった。榊原は助かつたが補助教官の鈴木少尉は不明だつた。急報によつて生本聯隊長以下が駆け付け行方不明者の搜索を開始したが、海まで流された者もあり、遺体が全部揚がるのに翌日までかかつた。榊原は行方不明者の搜索部署が整つたとき、軍刀で自決しようとした。このことを予期していた聯隊長は、屈強の下士官を彼の身边に付けておいたので取り押さえられ、死ぬべき時は戦場にいくらでもあると、聯隊長に諭され、その時は思いとどまつた。

榊原の最期

高千穂部隊(第二挺進団)のレイテ空挺作戦は、十九年十二月六日に行われた。初めの計画ではまだ第四聯隊が到着していなかつたので、四航軍から命ぜられた通りブラウエン地区の三つの飛行場に第三聯隊を降下させること

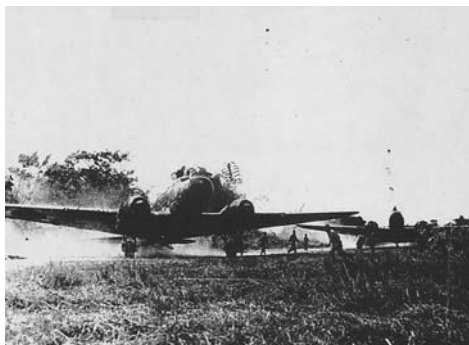
になつて来た。その後第四聯隊が到着し、この聯隊も第一次降下に使つてくれという強い要請が寄せられた。

その頃レイテに向かう船舶が敵航空による被害甚大で、それを封ずるにはブラウエン地区の三飛行場だけでなくレイテ湾沿いのタクロバンとドラッグも押さえねばならぬ。これは進出する友軍との提携の見込みはないので特攻隊であるが、自分にやらせてくれという要望が中隊長級指揮官から盛んに出された。その頃榊原は大尉に進級し聯隊本部付になつていたが、最も熱心な主張者だつた。結局、榊原がそれまで所属していた第一中隊の一部を指揮してタクロバン攻撃隊長になつた。彼は小丸川で殉職した八人の位牌を抱いて輸送機に乗り込んだが、降下出来たか途中で撃墜されたか全くわからない。

私と榊原の御縁

十九年六月から十月第二挺進団に動員が下令されるまで私は挺進練習部の下士官候補者隊長だつた。私一人が挺進練習部付で区隊長や助教は全部聯隊から出ており、その中に榊原がいた。約五ヶ月ばかり彼は私の部下だつた。榊原は気性の激しい男で候補者をよく鍛えたが、人望は篤かつた。私は小丸川事件のころは千葉戦車学校の学生で不在だつたので、事件の印象は薄く彼

がいつもそのことで悩んでおり、ある時自殺までしようとしたことを、戦後になつて知つた。事件当時の聯隊長も替わつていたので、彼の心情に立ち入り話相手になつてやればよかつたと今になつて悔やんでいる。



19年12月6日アンフェレスを離陸する第1次降下部隊。機種は百式輸送機。



榊原と延岡高等女学校の生徒のことは会報25号に掲載した。平成7年に嘗ての女生徒達が作った本に位牌を抱いた絵が載っている。

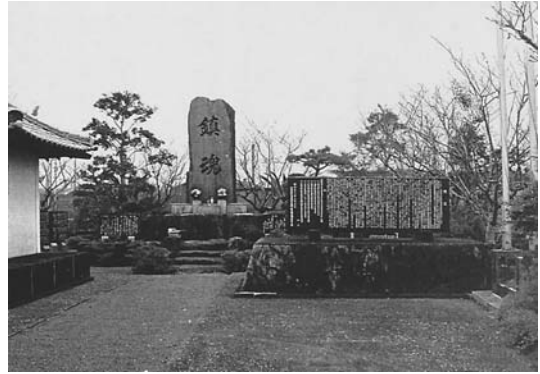
海軍赤江飛行場の慰霊碑

宮崎空港は昔赤江飛行場と言った。ここにある慰霊碑のことは「特別攻撃隊」に載せておいた。今回の川南護国神社の例祭参加のため、正午に宮崎空港に着いた。同行の自衛隊空挺団長以下に認識してもらうため、先ずこの慰霊碑に詣でた。空港の北の外柵沿いにあり、人目に触れにくいのは残念である。

入口の看板に書いてある。

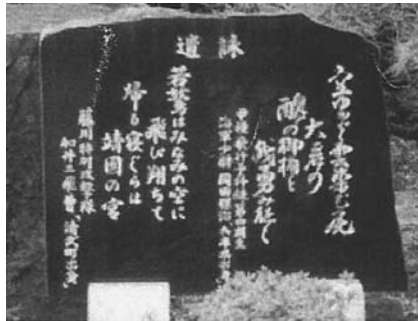
「宮崎基地より出撃した銀河特攻機四七機、搭乗員一四〇名並びに陸海攻撃雷撃作戦に出撃した搭乗員六〇五名が散華しました。このゆかりの地に鎮魂の碑・募銘碑を建立しました。」

平成十一年三月



遺書

海軍一等飛行兵曹 伊東 勲
 何も書くことはありません。只御両親様及久美子の健康を祈るのみ。
 勲は決して人におくれはとりません。



潔よく散るのみです。
 目標は正規空母です。

十日位したら徳島海軍航空隊十四分隊
 五班上野功君に便りして下さい。
 写真は受け取っても泣かずにほめて下さい。
 幸多かれと祈るなり。親戚の皆様へ宜敷く。

宮崎航空基地にて 六時五十五分

身はたとへ嵐の叫ぶ南海に
 雲染む屍と散りぬとも
 咲く勲の香り止めて

昭和二十年五月十二日 宮崎基地出撃
 神風特攻菊水銀河隊 伊東 勲

みんなみの雲染む果てに散らんとも
 くにの野花とわれは咲きたし
 海軍予科練出身 高崎文雄

特攻兵の望みの花の枝持ちて

駆けつけ来れば機は飛び立ちぬ
 宮崎海軍航空隊勤務 安田いく子

立ちゆかで雲染む屍

大君の
 醜の御楯と
 我勇み往く

甲種飛行予科練第四期生
 海軍少尉 岡田保治

若鷺はみなみの空に
 飛び翔ちて

帰る寝ぐらは靖國の宮
 藤川特別攻撃隊 加井二飛曹

見学者に与える二枚の葉書

田中賢一

習志野の自衛隊には、空挺館と呼ぶ立派な記念館がある。ここは昔騎兵学校だったので騎兵関係の資料と、現在自衛隊の空挺部隊が駐屯しているの、昔の空挺部隊の資料が展示されている。空挺館の見学者は部隊者だけでなく年間四千人ほどあるという。見学者が多いときは現職の広報担当者だけでは手がまわりかねるので、退職した元隊員が「語り部」として応援している。その人達は事前に講習を受けて、昔の空挺や騎兵についての知識を得ている。

見学した者には印象をさらに強める為、このような二枚一組の私製葉書を進呈している。この葉書を入れた封筒の表には次の通り印刷してある「この二つの写真は、夕刻に出撃を控えて一兵士が何かを書き残している。義烈空挺隊はもとより高千穂部隊にもこの日出撃した者に一人の

我が先人の残したもの

奥山に名もなき花と咲きたれど
散りてこの世に香りとどめん

今村美好曹長

(隊長は奥山道郎大尉)

よしや身は千々に散るとも来る春に

また咲きいでん靖國のみや

関 三郎軍曹

待つありて眺むる月の涼しさよ

新妻幸雄少尉

続くものありと思へばものふの
道ひたすらにかけしをのこら



義烈空挺隊 出撃を夕刻に控え宿舎で何か書き残す一隊員

沖縄作戦のとき航空特攻を成立させるため、敵飛行場を一時制圧しようとして義烈空挺隊が使われた。20年5月24日熊本の本健軍飛行場を発進し沖縄に向かった。敵航空の主飛行場は翌々日朝まで完全に機能を喪失した。

全日本空挺同志会

我が先人の残したもの

花負いて空うち往かん雲染めん
屍悔いなく吾ら散るなり

レイテに向かい出撃した後挺進第三聯隊が宿舎にしていた家屋の壁に書き残してあった。

高千穂部隊(第二挺進団)はクラーク飛行場群の一隅アンフレス飛行場にあつて作戦準備をしていたが、既に陸海軍の航空特攻が開始されており、戦局の容易でないことはヒシヒシと感じられた。降下目標の一つタクロバンは友軍と提携の見込みは全く無かったが、自分の中隊を使ってくれと全中隊長が申し出ている。

ますらをのかなしきいのちつみかさね
つみかさねまもる大和島根を

二井甲之



アンフレス出撃前 何を書き残すか

レイテ空挺作戦 「和号」と呼ぶレイテ島東部平野に対する攻勢作戦の、先陣として第二挺進団が使われた。挺進第二聯隊の主力に一部第四聯隊が加わった第一挺進部隊は、十九年十二月六日リン島アンフレス基地を発進し、夕刻レイテ島の五目標に向かった。彼らの戦力は隔絶しており、聯隊長白井少佐率いる主力以外の行動は詳かでない。最終的には全員戦死してしまった。

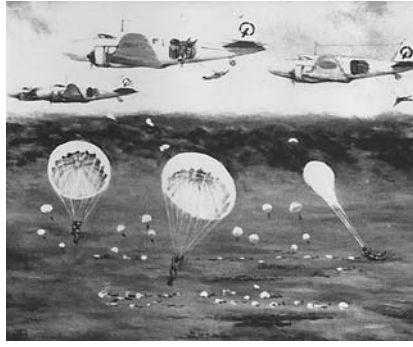
全日本空挺同志会

生還者もない。六十年後の我々にこの人達は何と言うであろうか」昔の空挺隊員だった者と自衛隊空挺隊の退職者で構成している「全日本空挺同志会」という団体がある。会を結成した当初、主体は昔の空挺隊員だったが、今は会員の大半は戦後の者になってしまった。この「語り部」は同志会千葉支部の者で、葉書作成の費用も同志会の予算で支弁している。

記念館は昔は御馬見所と言ひ、騎兵学校が東京の目黒にあったころからの建物で、明治天皇が馬術を御覧になられた事もある。大正五年騎兵学校が習志野に移ったとき移築された由緒ある建築物である。



挺進第1聯隊
宇都宮で天覧の栄に浴す



陸軍挺進練習部
全軍から志願して集まった者を訓練



パレンバン精油所攻撃



挺進第2聯隊
パレンバン飛行場攻撃



挺進第3、4聯隊
ルソン島バレット峠で戦闘



挺進第3、4聯隊
レイテに降下



滑空歩兵第2聯隊
ルソン島クラーク西方地区で戦闘



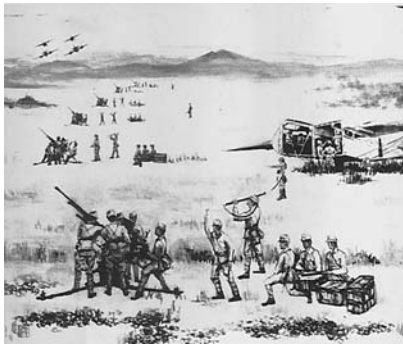
滑空歩兵第1聯隊作業中隊がルソン島
イリサン西方で橋梁爆破し敵戦車を阻止

空挺館には昔の空挺全部隊の油絵十七点が展示されている。それらは故松本武仁画伯の筆になる二十号の大作である。この絵に見る場面を、見学者につ

一つ説明しては一日かかるので、要点だけを述べることにしているという。

これと同じものを、昔空挺部隊の基地のあった宮崎県児湯郡川南町にも寄贈してあるので、毎年行われる川南護国神社の例祭に展示されている。これらを整えたのは平成四年で、費用は戦友の拠金によったが、今は生存者

も少なくなり活力も失せた。この記事は白黒印刷のため正しく伝えられなくて残念。



挺進機関砲隊 西筑波で訓練
この部隊は滑歩2と共に戦闘



挺進戦車隊 唐瀬原で訓練



挺進通信隊 滑歩2と共に戦闘



挺進工兵隊
ルソン島イリサン付近で戦闘



滑空飛行戦隊 西筑波で訓練



挺進飛行第1、2戦隊 第1戦隊はブラウエン地区で第2戦隊はレイテ湾岸地区で戦闘



義烈空挺隊
健軍飛行場出撃にあたり故郷に別れを告げた

挺進整備隊 落下傘の整備は担当したが折畳みは降下者が自ら行った



大東亜戦争忠魂顕彰六十五年祭

平成18年12月8日(金)15時15分

から靖國神社において「大東亜戦争忠魂顕彰六十五年祭」が執行された。国土館大学名誉教授金城和彦先生を代表とする「大東亜戦争忠魂顕彰会」の主催によるものである。その趣意書に曰く「印度のラダクリシュナン大統領は、「印度が今日独立できたのは、ひとり印度だけでなく、ベトナムであれ、カ

えて開戦の日たる十二月八日を期し、神々在ます靖國神社御本殿の大前で、伏して忠魂の意志と殉国を偲ぶと共に、自らに誓うため、この忠魂顕彰六十五年祭を齎行する次第であります」と。我々にとつて、この日は今も記憶に鮮明な「大詔奉戴日」である。戦争の是非を論ずるならば、この日に立ち返り、当時の状況を冷厳に見詰め直すべきであらう。

ンボジアであれ、インドネシアであれ旧植民地であった亜細亜諸国は、日本が払った大きな犠牲によって独立できたのである」と。：思えば、大東亜戦争はこのような尊い使命を担ったものであり、それは三百万余の忠魂によって達成され、そして我々はその御加護によって、現在の平和に生きることができているのである。：伏して亡びるより征でて国難を開かんと昭和十六年十二月八日我が日本民族は亜細亜の開放を期して火の玉となり、風雨となり、断々乎として白人の壁に体当たりを敢行したのであり、以来、我が忠勇なる同胞は祖国の楯となり、身を挺して戦い、後に続くとして散華したのである。：我々はただ一途に崇高なる忠魂の名譽と御国の誇りを念ずるの余り、戦いに敗れた八月十五日を採らず、敢

十二月八日を「開戦記念日」として世に印象づけよう

田中 賢一

嘗ては三月十日を陸軍記念日、五月二十七日を海軍記念日として、先人の偉勲を讃えるなにかの行事を催した。この日は国で定めた祝祭日ではなく、日露戦役の終わった日でもない。現在八月十五日を終戦の日と心得、今次大戦で死んだ人の慰霊の日としているが、別に悪い事ではないが何か釈然としないものがある。開戦記念日がなくて、終戦記念日があることは、今次対戦を否定する気持ちが根底にあるからである。これは東京裁判史観に通ずるものと言えよう。大東亜戦争の歴史については万巻の書物があるが、そこには正鵠な観察がなければならぬ。国史学の泰斗平泉澄博士は「国史学の骨髓」で次のように述べている。

歴史はその本質に於いて、決して事実そのままの模写ではない。単に事実を事実として全然自己の判断を拒否し、一個無関心の傍観者として対するならば、この世は複雑混沌極りなく変転生滅遂に把握し難い。我等がこれを把握し得るは、我等の力によってこれを組織するによる。而して我等が之を組織するは、自らの意志により、信仰によ

る。歴史は単なる知的所産ではない。歴史の認識は知的活動の外に情意的活動を必要とし、而して自らの活動を通じて初めて得られるものである。

かくて歴史は、自国の歴史に於いて我れ自らその歴史の中より生まれたる祖国の歴史に於いて、初めて真の歴史となり得るものである事は、今や明かである。我が意志によりて組織し、我が全人格に於いて之を認識し、我が行を通して把握するが如きは、祖国の歴史にあらざるは不可能である。祖国の歴史にして始めて古人と今人の連鎖統一は完全である。古人がここに完全に復活し来るを思う時、歴史は即ち永生となる。歴史を認識するは永生の確信を得る事である。

この論文はまだ読すが、要は今大戦を認識するには、何故開戦に踏み切ったのかを明察しなければならぬ。その為には、この日を開戦記念日とし、国民あげて歴史に眼を開かねばならぬ。嘗ては十二月八日を大詔奉戴日と称し、官衛・軍隊、民間の会社でも奉読したが、今こそあの詔書の裏にひそむ歴史を確かと認識すべきである。緒戦の作戦のことを顧みるのもよいが、我々の探求しなければならぬのは、国家の執るべき方策であり、ここに於いて平泉博士の言われる古人と今人の連鎖の完全復活となる。

(飯田正能記)

運命の日 十二月八日

田中 賢一

「大本営陸海軍部発表、十二月八日午前六時、帝國陸海軍は本八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」



「今日はこれから重大放送があるかも知れませんが、そのままスイッチを切らずにおいて下さい」

「情報局発表、八日十一時四十五分。只今アメリカ、イギリスに対する宣戦の大詔が発せられ、また同時に臨時議会召集の詔書が公布されました」

「大本営陸海軍部発表、八日午前十

一時五十分。わが軍は陸海緊密なる協同の下に今八日早朝マレー半島方面の奇襲上陸作戦を敢行し着々戦果を拡張中なり」

「大本営海軍部発表 八日午後一時。一、帝國海軍は本八日未明のハワイ方面の米國艦隊並びに航空兵力に対し決死の大空襲を敢行せり。二、帝國海軍は本八日未明上海に於いて英砲艦ベトルを撃沈せり、米砲艦ウエーキは同時刻我に降伏せり。三、帝國海軍は本八日未明シンガポールを爆撃し大なる戦果を収めたり。四、帝國海軍は本八日ダバオ、ウエーキ、グアムの敵軍事施設を爆撃せり」

「大本営海軍部発表、八日午後八時四十五分。一、本八日早朝帝國海軍航空部隊により決行せられたるハワイ空襲において現在判明せる戦果左の如し、戦艦二隻轟沈、戦艦四隻大破、大型巡洋艦四隻大破、以上確実、他に敵飛行機多数を撃墜撃破せり、我が飛行機の損害は軽微なり。二、我が潜水艦はホ



ノルル沖において航空母艦一隻を撃沈せるものの如きもまだ確実ならず。三、本八日早朝グアム島空襲において軍艦ペンギンを撃沈せり。四、本日敵商船を捕獲せるもの数隻。五、本日全作戦においてわが艦艇損害なし」

米英二對スル宣戰ノ詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有眾ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ

朕カ眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ不顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニ

シテ米英兩國ト鬪端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セズ濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更

新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ビ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尚未タ牆ニ相闚クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス刺ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和の通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日



開戦並びに緒戦の大戦果に、国民は
積もり積もった暗雲が一時に晴れた思
に湧き立った。当時一流の歌人に次の
詩がある。

アメリカ太平洋艦隊全滅せり

三好達治

ああその恫喝

ああその示威

ああその経済封鎖

ああそのABC D線

笑うべし 脂肪過多

鉛よりもなお甘かりけん
デモクラシー大統領が

昨夜の魂胆のごとくは

アメリカ太平洋艦隊は全滅せり！

荒天万里の外

激浪天を拍つる間に馳駆すべかりし

ああその凡庸提督

キンメル麾下の鱒鱧は

一夜熟睡の夜

かしこ波しずかな真珠湾内ふかく

船艦相含みて沈没せり

げにや一朝有事の日

彼らの光栄のさなかにあつて

ああその百の巨砲は

ついに彼らの黄金の沈黙をまもりつつ
海底に沈み横たわれるなり

日東真男児帝国

一たび雷霆の軍を放つや

彼らの潜水艦はとこしえに潜水し

彼らの航空母艦は鞠躬如として

遁走せり

而してその空軍の百千の燕雀もまた

空しく地上に格納庫中に炎上せり

笑うべし 脂肪過多

デモクラシー大統領が

鉛よりもなお甘かりけん

昨夜の魂胆のごとくは

アメリカ太平洋艦隊は全滅せり

然り 無用の兵を耀かすもの

必ず滅ぶ！

速やかに彼らはその価をもて一の金言
をあがないて 而して 咄 我らの海
洋の外に立去るべし！

十二月八日

室生犀屋

何かを言いあらわそうとする者

そして言いあらわせない者

よろこびの大きさに打たれて

ここに凝平として喜んでいる者

よろこび過ぎて言葉を失った瞬間

人ははじめて自分の我欲をなくし

何とかして

偉大な喜びをあらわしたいとあせる

勝利を自分のものにするのは勿体ない

それを何かで表わしたい

何かをつくり上げたい

絵も彫刻も音楽も

そして文学も勝刊にぶら下がる

何かをつくり

何かをえがき

自分のよろこびを人に示したい

自分も臣の一人であり

臣のいのちをまもり

それゆえに寿をつくり上げたい

非才いま至らずなどとは言わない

この日何かをつくり

何かをのこしたい

文学の徒の一人としてそれをなし遂げ
たいのだ

齋藤茂吉

世はここに大きく変わる十二月八日朝の
空のゆゆしき

大詔くだるすなはち海のうへ霹靂鳴れ
りすがすがしきかなや

真珠湾いくさの知らせ聴きし朝の胸の
とどろきを忘れじとこそ

川田 順

天地に寒さの淨いく凝る時し大東亜戦
宣らせ給へり

厳肅にいくさを宣らすみことのり独り
坐りて吾が捧げ読む

大東亜戦争の起爆剤となった ハルノート

昭和十六年十一月二十六日ハル國務長官は野村大使を呼び、挑戦状ともいえる「合衆国及日本国間協定ノ基礎概略」(我が国ではハルノートと呼ぶ)を手渡した。まずその全文を掲げてみよう。

第一項 政策に関する相互宣言案

合衆国及日本国政府は共に太平洋の平和を欲し其国策は太平洋地域全般に亘る永続的且広汎なる平和を目的とし、両国は右地域に於て何等領土的企図を有せず、他国を脅威し又は隣接国に対し侵略的に武力を行使するの意図なく又其国策に於ては相互間及一切の他国政府との間の関係の基礎たる左記根本諸原則を積極的に支持し且之を實際的に適用すべき旨闡明す

一、一切の国家の領土保全及主権の不可侵原則

二、他の諸国の国内問題に対する不干渉の原則

三、通商上の機会及待遇の平等を含む平等原則

四、紛争の防止及平和的解決並に平和的方法及手続に依る国際情勢改善の方法

五、為国際協力及国際調停遵拠の原則
六、日本国政府及合衆国政府は慢性的政治

不安定の根絶、頻繁なる経済的崩壊の防止及平和の基礎設定の為相互間並に他国家及他国民との間の経済関係に於て左記諸原則を積極的に支持し且實際的に適用すべきことに合意せり

一、国際通商関係に於ける無差別待遇の原則

二、国際的経済協力及過度の通商制限に現れたる極端なる国家主義撤廃の原則

三、一切の国家に依る無差別的な原料物資獲得の原則

四、国際的商品協定の運用に關し消費国家及民衆の利益の充分なる保護の原則

五、一切の国家の主要企業及連続的發展に資し且一切の国家の福祉に合致する貿易手順に依る支払いを許容せしむるが如き国際金融機構及取極樹立の原則

六、合衆国政府及日本国政府の採るべき措置

一、合衆国政府及日本国政府は英帝国、支那、日本国、和蘭、蘇連邦、泰国及び合衆国間多边的不可侵条約の締結に努むべし

二、両国政府は米、英、支、日、蘭及泰政府間に各国政府が仏領印度支那

の領土主権を尊重し且印度支那の領土保全に対する脅威発生するが如き場合斯る脅威に対するに必要且適当なりと見做さるべき措置を講ずるの目的を以て即時協議する旨誓約すべき協定の締結に努むべし

斯る協定は又協定締約国たる各国政府が印度支那との貿易若は経済関係に於て特惠の待遇を求め又は之を受けざるべく且各締約国の為仏領印度支那との貿易及通商に於ける平等待遇を確保するが為尽力すべき旨規定すべきものとす

三、日本国政府は支那及印度支那より一切の陸、海、空軍兵力及警察力を撤収すべし

四、合衆国政府及日本国政府は臨時に首都を重慶に置ける中華民國政府以外支那に於ける如何なる政府若しくは政權をも軍事的、政治的、経済的に支援せざるべし

五、両国政府は外国租界及居留地内及之に關連せる諸權益並に一九〇一年の團匪事件議定書に依る諸權利をも含む支那に在る一切の治外法權を放棄すべし
六、両国政府は外国租界及居留地に於ける諸權利並に一九〇一年の團匪事件議定書による諸權利を含む支那に於ける治外法權放棄方に付英
七、支那及其他の諸政府の同意を取付

くべく努力すべし

六、合衆国政府及日本国政府は互惠的最惠国待遇及通商障壁の低減並に生糸を自由品目として据置かんとする米国企図に基き合衆国及日本国間に通商協定締結の為協議を開始すべし

七、合衆国政府及日本国政府は夫々合衆国にある日本資金及日本国にある米
八、両国政府は円弗為替の安定に關する案に付協定し右目的の為適當なる資金の割当は半額を日本国より半額を合衆国より供与せらるべきことに同意すべし

九、両国政府は其の何れかの一方が第三国と締結しをる如何なる協定も同
十、両国政府は他国政府をして本協定に規定せる基本的なる政治的経済的
十一、原則を遵守し且之を實際的に適用せしむる為其の勢力を行使すべし

ハルノートの全文は以上の通りで、
十二、第一項はその前に我が方が出した提案に答えたもので、それを参照しなければ解り難いので暫らく措くとし、重大

の領土主権を尊重し且印度支那の領土保全に対する脅威発生するが如き場合斯る脅威に対するに必要且適当なりと見做さるべき措置を講ずるの目的を以て即時協議する旨誓約すべき協定の締結に努むべし

斯る協定は又協定締約国たる各国政府が印度支那との貿易若は経済関係に於て特惠の待遇を求め又は之を受けざるべく且各締約国の為仏領印度支那との貿易及通商に於ける平等待遇を確保するが為尽力すべき旨規定すべきものとす

三、日本国政府は支那及印度支那より一切の陸、海、空軍兵力及警察力を撤収すべし

四、合衆国政府及日本国政府は臨時に首都を重慶に置ける中華民國政府以外支那に於ける如何なる政府若しくは政權をも軍事的、政治的、経済的に支援せざるべし

五、両国政府は外国租界及居留地内及之に關連せる諸權益並に一九〇一年の團匪事件議定書に依る諸權利をも含む支那に在る一切の治外法權を放棄すべし
六、両国政府は外国租界及居留地に於ける諸權利並に一九〇一年の團匪事件議定書による諸權利を含む支那に於ける治外法權放棄方に付英
七、支那及其他の諸政府の同意を取付

くべく努力すべし

六、合衆国政府及日本国政府は互惠的最惠国待遇及通商障壁の低減並に生糸を自由品目として据置かんとする米国企図に基き合衆国及日本国間に通商協定締結の為協議を開始すべし

七、合衆国政府及日本国政府は夫々合衆国にある日本資金及日本国にある米
八、両国政府は円弗為替の安定に關する案に付協定し右目的の為適當なる資金の割当は半額を日本国より半額を合衆国より供与せらるべきことに同意すべし

九、両国政府は其の何れかの一方が第三国と締結しをる如何なる協定も同
十、両国政府は他国政府をして本協定に規定せる基本的なる政治的経済的
十一、原則を遵守し且之を實際的に適用せしむる為其の勢力を行使すべし

ハルノートの全文は以上の通りで、
十二、第一項はその前に我が方が出した提案に答えたもので、それを参照しなければ解り難いので暫らく措くとし、重大

の領土主権を尊重し且印度支那の領土保全に対する脅威発生するが如き場合斯る脅威に対するに必要且適当なりと見做さるべき措置を講ずるの目的を以て即時協議する旨誓約すべき協定の締結に努むべし

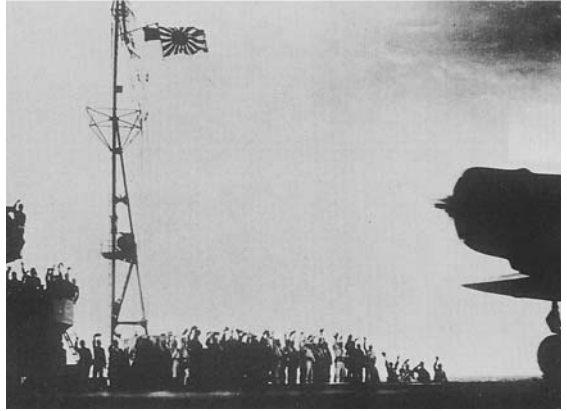
なのは第二項にある。これを要約すれば次の通りである。

- 一、支那及び仏印より我が軍と警察の全面撤退。
- 二、日支近接特殊緊密関係の放棄
- 三、三国同盟の死文化
- 四、支那における重慶政権以外の一切の政権否認

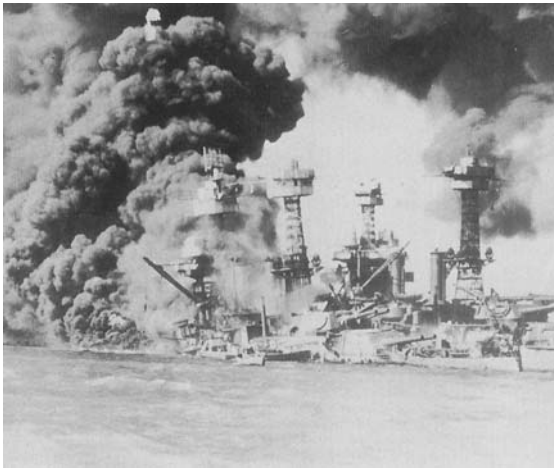
極東軍事裁判で被告全員の無罪をとなえた判事のパール博士は「米国務省が日本政府に送ったような通牒を受領すれば、モナコ公国やルクセンブルグ大公国でさえも、合衆国に対して武器を執ったであろう」言っている。

ハルノートを手渡す五日前、ハル国務長官は陸海軍当局者との会談で「今や日米交渉は終り、外交当局の為すべきことは終った。今後の仕事は軍部の手に委ねなければならぬ」とのべた。次いで二十六日ハルノートを手渡して日米交渉の終了を正式に軍部に告げ、軍部は直ちにハワイの軍当局に警告を発した。そして「米国より先に手を出さな、日本に先に手を出させよ」と告げた。

ハルノートは正に挑戦状を通り越し宣戦布告にも等しいものだった。



進 発



攻撃を受けた戦艦群、半分沈みながらなお炎上中のウェストバーシニア（中央）、テネシー（右）、転覆したオクラホマ（左）。

我々は大東亜戦争を戦ったが、太平洋戦争に従軍した覚えはない昭和十六年十二月十二日（開戦の四日後）政府は「今次対英米戦を支那事変をも含め大東亜戦争と呼称す」と閣議決定した。

敗戦後の昭和二十年十二月七日、GHQは各新聞社の代表を集め、彼らが作成した「太平洋戦争史」を示し掲載を命じた。更に十二月十五日、日本政府に対し所謂「神道指令」を出し、その中で「大東亜戦争」や「八紘一宇」等の用語の使用を禁じた。

今次大戦の戦場は太平洋だけではない。インパール作戦が何で太平洋なのか、そのような地理音痴もさることながら閣議決定という法的手段を経ている名称を、独立回復した時どうして改めなかったのか。

今の若者に大東亜戦争と言っても、何処の国の戦争か知らない。東京裁判史観の妖怪はこんなところまで浸透しているのだ。

十二月八日を記念日扱いとし、国民を啓蒙せねばならぬ、そうすれば「大東亜戦争」という名称も復活するであろう。

C D「あ、特攻」の頒布と「あ、特攻」勇士之像全国護国神社奉納運動

理事 藤田 幸生

先に会報67号でお知らせ致しましたが、協会は、大阪芸術大学学生、教授等を中心とするボランティア団体「日本人の心を伝える会」(世話人代表 富田和夫)が、C D「あ、特攻」を制作販売しようとしていることを知りました。その狙いとしているところは、慰霊顕彰を通じて史実を後世に伝え、特攻隊戦没者の精神を今一度国民の肝に銘じて、我が国の未長い繁栄に資することを願うというものであり、協会は、この趣旨に賛同し、平成18年3月からC Dの販売を開始致しました。基本とする構想は売上益で特攻勇士の像を製作し、全国の護国神社に奉納していきたいということであり、計画の概要と経過は次の通りであります。

第1段階 C D「あ、特攻」の製作、販売

協会は、「日本人の心を伝える会」が、2年がかりで完成したC D「あ、特攻」の企画に対し、平成17年末から参画してきました。製作したC Dを適

宜増産しながら、協会機関誌「特攻」を始め、「偕行」、「水交」、「海上自衛隊新聞」、「朝雲」、「隊友」、「新生つばさ」などの各会報新聞、及び雑誌「正論」などに広告を載せる等P Rし、かつ、靖國神社、知覧・鹿屋の特攻記念館、阿見の海原会記念館、水交会、偕行社、自衛隊主要P X、大和ミュージアム、三笠記念艦売店などに委託販売してまいりました。平成18年末までに、3000枚以上が売れました。今後更に、C Dショップ等にも販路拡充を検討していく予定であります。

第2段階 特攻隊員の像の製作

C D「あ、特攻」が売れて利益が蓄積されてきましたので、協会は昨夏から、「あ、特攻」勇士之像の製作に着手しました。会員の塚本 哲デザイン事務所(代表:塚本 哲)がボランティアで、特攻隊員の各種記録写真を元に立像をデザインしてくれました。それに基づき小高 勇氏の支援を得て、造形作家三原帯水氏、坂 充央氏が「あ、特攻」の立派な像の原型(後掲の通り、高さ1メートル、FRP製)を制作してくれました。当面、製作の効率上第一回目として五体のブロンズ像を製造します。

第3段階 「あ、特攻」勇士之像の奉納、建立



護国神社は、靖國神社の下、全国八つの地域に分かれて52箇所あります。地区は、①北海道、②東北、③関東、④東海、⑤北陸、⑥近畿、⑦中・四国、⑧九州・沖縄。北海道には3箇所、宮崎には戦後にでき、神奈川県にはありません。靖國神社、全国護国神社及び地元の方々の協力を得て、全国の護国神社に逐次像を奉納していくこととなります。

現在、特攻慰霊施設は、東京、九州南部に集中していますが、特攻隊戦没者の出身地は全国的に散らばっていますので、奉納は地域的に偏らないように配慮しなければなりません。

一体80万円程度する像の製作資金は、一枚20000円で売るC Dの販売益を充当していきます。従って事業完了までに数十年かかります。各神社に像を奉納するまでは、協会の責任で行いますが、台座(高さ約1m)の建立は地元の支援をお願いすることになりますので、その受け皿団体が必要であります。

しょう。更に建立場所、環境の設定、台座、囲い、文字板、説明板など、具体的にはそれぞれの地元の事情や判断によって決めて頂くこととなります。

最初の奉納は以下の事情から福井県に決まりました。島崎宗勝氏を中心になって、県戦没者慰霊碑を護国神社境内に建立する計画が進んでいて、氏がC Dを購入して協会の意図を知り、共同事業にならないかとの申し出があり、協会としても願ってもないこととお引き受け致しました。

以後の建立場所については、全国規模で検討中ですが、建立要領については、福井を参考としていくことになりました。言わば、今後のモデルつくりとなります。

第4段階 碑第1号の除幕式

今年の4月13日福井県護国神社春の例祭日に、像の除幕式が例祭終了後12時30分から挙行されます。

除幕奉納後の像の維持管理は、基本的には地元の皆さんにお願いしたいと考えております。

以上が、計画の概要と経緯であります。今後、各護国神社に像の奉納を行うに際して、地元の方々に、お世話になると思いますが、本事業完遂のためのご支援ご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。

平成18年第2回理事会・評議員会報告

(平成18年12月2日開催)

理事長

議決された平成19年事業計画は左記の通りであります。

一、方針

寄付行為にある事業目的に従い、次の方針に基づいて会の健全な運営を図る。

- (1) 会員の拡充と財政基盤の確立に努める。
- (2) 各種慰霊事業の実施と支援を行う。
- (3) 特攻隊の史実研究、調査及び資料の収集整備を行う。

二、各種事業

- (1) 例年通り春秋の慰霊祭及び年次法要を実施する。
- (2) 全国各地における特攻隊戦没者慰霊顕彰事業への協力
- (3) 機関誌「特攻」の発行・配布
- (4) 特攻隊に関する調査研究並びに特別攻撃隊全史(特別攻撃隊5訂・追補版)の資料収集に努める。
- (5) 勸大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会に引き続き協力と支援を行う。

(6) 新会員の加入促進

イ、日本会議、自衛隊OB会等諸団体並びに各会員に協力を求める。
CD「あゝ特攻」の販売促進と、

(7) この基金による特攻像を制作し、各県護国神社に逐次建立、奉納する。

以上であります。平成12年の南九州から始まった、特攻発進基地慰霊巡拝旅行は、沖縄、台湾・宮古島・石垣島、比島と廻って、平成18年で終止符を打ちました。ただし、マバラカット東飛行場跡地で開催される神風特攻慰霊は、我が国の初めての特攻出撃地であり、しかも、慰霊碑は現地で建立してくれて、毎年10月25日、関大尉機が発進した午前7時25分を期して現地音楽隊が「海行かば」を演奏し、慰霊祭が開催される実態を目にすると、以後は国内特攻基地慰霊祭に協会代表を派遣して

いる延長線上に、マバラカット(リリーヒルを含む)を置いて、毎年現地慰霊祭に参加することを考えています。委細は具体案が決まり次第お知らせ致します。

理事1名(石野清治氏 体調不良)
評議員4名(小灘利春氏、木村元正氏 何れも死去、伊藤直之氏 体調不良、深山明敏氏 理事選任)の欠員を生じ

ましたので、それぞれ左記の方々が選任されました。

イ、理事会選任評議員

- 飯田正能 特攻編集人 陸士61期
- 田村力 海自元幹部学校長
- 山本英 スズル 海自元小松島航空隊司令
- 神崎夢現 海自元小松島航空隊司令

最近「特攻最後の証言」を刊行 本名五十嵐啓二

ロ、評議員会選任理事
深山明敏 陸自元師団長 勸借行社 理事

毎年事業方針の筆頭に、会員増強・財政基盤の確立が挙げられています。平成15～16年にかけて、約一八〇〇

名の入会者がありました。遺憾ながら一昨年から会員は再び減少に転じ、昨年の減員は約二四〇名になりました(平成18年初会員三五五二名)。

次世代の慰霊顕彰の中核となる自衛官OBからは、多くの慰霊団体があって入会に迷う、慰霊団体が一本化されれば動き易いという意見が出されています。

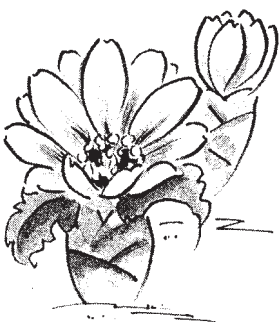
そこで、理事会、評議員会の議事終了後、それぞれ懇談会に切り替えて、旧軍関係会員が現役として活動できる時代の終焉を目前にして、協会の先き行きをどう考えるのか、一昨年充足し

た勸大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会(慰霊協)との合併統合という考え方を、一つの叩き台として出席者の意見を伺いました。

意見の多くは、現在その様なことを考えるのは時期尚早である、特攻の名称は消してはならないということであり、協会としては引き続き従来通りの運営を続けて行くことに致しました。ホームページの充実、CD「あゝ特攻」の販売等で、入会者は平成14年に比して倍以上となり、昨年は一五〇名を超えるに至りました。しかしながら、死亡と2年以上会費滞納による除籍処分

の減員を補うには、未だという状況にあります。

会員各位が、一人入会者を紹介して下さるならば、直ちに会員は倍増致します。是非共会員増強に御協力を賜り、次世代への特攻隊慰霊顕彰事業の継承がより円滑に行われるように御協力の程よろしくお願い申し上げます。



図書紹介

田中 賢一

「特攻最後の証言」

特攻最後の証言製作委員会

それぞれの理由で生き残ったつぎの人達に質問し、答えてもらった生の証言を集録した書物である。当然のことながら、その人達は皆老境にあり、題名の通り「最後の証言」であるが、斬新な構成であるのに敬意を表する。必読をお勧めする。

第七二二空桜花隊

海軍大尉 鈴木英男

第二回天隊 故海軍大尉 小灘利春

第一二二震洋隊

海軍一等飛行兵曹 黒木 豊

第七一嵐突撃隊

海軍上等兵曹 海老沢喜佐雄

特攻石陽隊 陸軍少尉 吉武登志夫

海上挺進第三戦隊

陸軍中尉 皆本義博



神風特別攻撃隊第三正気隊
海軍少尉 江名武彦

神風特別攻撃隊第九筑波隊
海軍大尉 木名瀬信也

定価一、九九五円(税込) 送料二五〇円

陸軍特別攻撃隊の真実

「只一筋に征く」

愛するものを護るため

大空に飛び立った若者たち

この標題通りのことを、無数の写真と短切にして肺腑を穿つ解説によって構成されている。よくもこのように多くの写真を集め得たものと、敬意を表す。写真を主軸としているので活字離れをした現代の若い者にも、強く訴えることが出来る本である。

定価二、一〇〇円(税込) 送料二五〇円



事務局より

新入会員名簿

(平成18年10月1日～12月31日)

- 北海道 堀井健次 ○茨城 小林みゆき ○埼玉 浅野明照 齋藤升八
- 山本隆之 ○東京 青木英美 大槻茂 川副幹夫 里崎 雪 横田 宗
- 神奈川 稲田正三 田辺純也 渡辺忠貴 ○長野 中沢 睦 ○京都 藤井浩幸 ○福岡 野口裕子

会員計報

謹んで哀悼の意を捧げます。

- 栃木 岡田 昭郎 (18・8)
- 埼玉 金久保萬蔵 (18・10)
- 東京 荒木しげ子 (18・11)
- 小室 治郎 (16・12)
- 田中彰太郎 (18・11)
- 谷内 守男 (17・10)
- 神奈川 桑原 泰郎 (18・)
- 七海 隆 (18・10)
- 愛知 秀平 幹雄 (18・10)
- 山田満寿雄 (18・7)
- 滋賀 岡 光雄 (17・12)
- 西村 孝三 (18・6)

寄付者御芳名

(平成18年10月～12月・単位千円)

- 一〇〇 (有)アマティ 二一 市村 俊夫

- 三 中田 正延 二 長島とし子
- 三 山本 亘 二 鉦田 太郎
- 三 円谷 信一

「特攻」を御覧の各位に御挨拶申し上げます。
田中賢一

協会の前身である慰霊顕彰会の時代の平成2年から、私は「特攻」の編集を担当して参りました。ただ続ける活力は持っている積りですが、本年は89歳にもなり何時までできるか保障の限りでありません。そこで理事長の御配慮により飯田正能君にこの仕事を担当してもらうことになりました。但し私がかねてから何時倒れても直ぐに「特攻」の発行が中断しないように、一回分だけは記事を持っておりましたので、飯田君がそれらを逐次掲載して下さい、また私としてもまだ後世に残しておきたいこともありますので、執筆して参りたいと存じます。語りてもなを語りても尽さるは国に殉ぜしますらをのとも変わらぬ御好誼をお願い致します。